平成２９年３月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

３月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、１７日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、さいたま放送局の取り組みと今後の予定について報告した。次に、前回の審議会での答申を受け「平成２９年度関東甲信越地方向け地域放送番組編集計画」を決定したこと、およびこれに基づいて策定した「平成２９年度関東甲信越地方向け地域放送番組編成計画」について説明があった。その後、特報首都圏「震災６年　岐路に立つ原発避難者」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、４月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　髙野孫左ヱ門（(株)吉字屋本店代表取締役社長）
副委員長　伊藤由貴子（神奈川県立音楽堂館長・プロデューサー）
委　　員　岩佐　十良（(株)自遊人代表取締役）
大山　寛（サンファーム・オオヤマ(有)取締役会長）
岡田　芳保（元群馬県立土屋文明記念文学館館長）
国崎　信江（(株)危機管理教育研究所代表）
野老真理子（大里綜合管理（株）代表取締役）
原　拓男（千曲錦酒造(株)相談役）
古澤　宏司（(有)古沢園代表取締役）
山口　晃平（(株)山口楼 専務取締役）

（主な発言）

＜特報首都圏「震災６年　岐路に立つ原発避難者」
（総合　２月３日(金)放送）について＞

○　この時期は東日本大震災から６年になるのに合わせた番組が多く放送された。この番組は２月３日の放送だったが、こうした番組の一つとして見た。番組前半で、避難指示の解除により、避難先での避難者への住宅無償提供がなくなり経済的に厳

しい状況におかれることが紹介されていた。当人には切実な問題だと思う。６年というのは、小学校に入学した子どもが卒業するほどの長い時間だ。生活しているうちに体を壊す、家族構成が変わるなど、いろいろな状況が起こることもある。個々にいろいろな悩みがあり、十把一からげで施策を進めてしまうのはあまりにも厳しい現実があると改めて思い知らされた気がする。天災という自己責任ではない事態に対し、政治がどれだけのことをできるのかは、もう少し丁寧によく考えるべきではないかと感じた。後半では、新たな支援のあり方の一つとして、埼玉県越谷市の自治会の取り組みを紹介していた。地域のイベントに招待する、畑仕事に誘うなどし、住まいや仕事を失いふさぎ込んでしまった佐藤カヨ子さんが笑顔を取り戻すのは、感動するシーンだった。制度も大事だが、最後は人と人とのつながりが大事だと思わされた。ほかの地域などで支援に携わっている方にもよいヒントになるような取材ができていたのではないか。埼玉県は多くの福島の方々が避難してきているので、丁寧な対応ができるとよいと改めて思った。番組を見る人によって心に響く作り方は違うと思う。多様な切り口からいろいろな番組を提供し、重大な話題を風化させないでほしい。今回は人々が協力し合うきっかけとなる番組だったのではないかと思う。今後も引き続き取材してほしい。

○　冒頭が陽気な民謡のシーンで何の番組かと思ったが、すぐに本題に入ったのでその違和感は解消された。首都圏には福島からの避難者が約２万 2,000 人おり、事故１年後の約２万 6,000 人とあまり変わっていないという。それは「帰りたくても帰れない」という現実を表していると感じた。国は７割の地域に避難指示を解除すると伝えていた。南相馬市で居酒屋を経営していた方の「前の月まで靴にカバーをし、手袋をはめていたが、何月何日からその地域に入ってくださいと言われても、安全性は大いに疑問だ」ということばは、国と避難者の考えの相違が如実に表されていたと思う。避難者はその不安があるからこそ、帰りたくても帰れないのだと感じる。国はその現実を避難者の立場で考えているのかと疑問に感じた。そのあたりはもう少し国への取材をしてほしいと思った。番組では子どもの安全を考え、自主避難している母親を取材していたが、自主避難者への住宅の無償提供は３月末で終わるので生活苦になるという話だった。本当に安全が確認されるまでは帰りたくても帰れないという母親の葛藤がよく伝わったと思う。避難指示を解除すると行政の支援が縮小するということだったが、多くの視聴者がそれでよいのだろうかと感じたのではないか。越谷市の自治会などの組織が行政に頼らない支援を行っていると紹介していたが、支援の方法などさらに詳しく紹介すればほかの市町村にも参考になるのではないかと感じた。国と東京電力は、故郷に帰りたくても帰れない多くの避難者のことを真剣に考える義務があると多くの視聴者が思ったことだろう。現地に行ったキャスターが「ここでは時間が止まっている」と語ったひと言がすべてを表して

いた。避難者の存在を忘れないためにもＮＨＫはこのような番組を今後も続けるべきだと思う。

（ＮＨＫ側）

国への取材について指摘を頂いた。番組全体の構成の中でどこの部分を強調し、伝えるべきかと考えたときに、避難者の方の実情に最も力を割いて取材し、その部分にできるだけ寄り添った形で伝えるべきではないかという議論の中で、今回の構成になった。越谷市の事例は前向きなテーマとして、さいたま放送局の記者が取材で見つけてきた話題だ。取材に応じていただける方は多くなく、顔を出して取材に応じていただくことに記者はかなり努力をした。今回の番組を通じてほかの地域の方に参考にしてもらいたいという思いもあり、越谷市のパートを制作した。

○　震災から６年で岐路に立っている現状については、首都圏の方だけでなく、国民全体が共有すべき重要な情報だと思った。後半は特に印象に残った。帰りたくても帰れない方々に対し、行政だけに頼らず、地域住民で支え合うことで、避難者の居場所の確立を支援している越谷市の事例はすばらしいと思う。被災者の方々が明るくなっていく表情、生きがいを持って過ごす姿は他県で暮らしている多くの被災者の希望にもなるのではないかと思った。気になった点としては、自主避難の厳しさを伝える中で、母親と子どもの現状を取り上げていたが、自主避難で苦しんでいるのは母親と子どもの世帯だけではない。母親と子どもの現状にスポットを当てるのであれば、なぜ母親と子どもの世帯が生活苦になっているのかという現状をもっと深掘りし伝えるべきではなかったか。母親と子どもの生活苦の背景には、住宅の無償提供が終わることのほかに、今の場所では福島の時と同じ仕事に就けないという就職の問題、震災が起因となる離別などによるシングルマザーの問題もある。もう少し丁寧に説明するとよいのではないかと思った。

キャスターについて気になった点が２つあった。ゲストが話している最中にもかかわらず、強引に割り入り、もう１人のゲストのコメントを求めるという振り方に不快感を持った。一生懸命話している人の話を途中で切っていた。またキャスターがフリップを使って説明するとき、自分の使っているペンでそのままフリップの内容を指し示していた。これも見ていてよい印象がなく、手の先で示したほうがよかったと思う。また女性ゲストのコメントで意味の分からない部分があった。指示代名詞などことばの使い方がおかしく、何を伝えようとしているのか分からない部分が散見された。最後にフリップでまとめた「まぜこぜ」というコメントも前後の

つながりを欠いており、何をもってまぜこぜなのかが分からなかった。事前にコメントの打ち合わせはすると思うが、いずれにしても進行役のキャスターのフォローもうまくなく、消化しきれなかった。男性ゲストの話はとても分かりやすく、聞いていて共感できる内容だった。

（ＮＨＫ側）

キャスターが話の途中で割り入ったことについて、スタジオ部分は生放送であり、時間制限もある中で、そのように映ったところもあったかもしれない。そのように感じられたのであれば、反省する。フリップの点についても同様だ。女性ゲストのコメントについては、事前に打ち合わせをしている。それはこちらの調整不足だと思うので、指摘を受け止めさせていただく。

○　生番組であればゲストのコメントは長くなりがちだ。それにどう対処するかは技術だと思う。視聴者が見ていて不快感にならないように、「なるほど」などと言っていったん切って、それからもう１人のゲストに話を振るような、うまい仕切りがあると思う。

（ＮＨＫ側）

指摘のとおり、キャスターがゲストの話を打ち切るのはよくないことだ。またゲストのコメントについても、「それはこういうことでしょうか」とフォローするなど、キャスターワークはいろいろ考えうると思う。ほかのキャスターも含め、意見を参考にさせていただく。

ペンについてはさまざまな印象を受ける方がいる。ペンを使い、分かりやすく説明できることもある。指でなくてはいけないという指導はしておらず、ケース・バイ・ケースで対応している。また限られた３０分弱でコンパクトに伝える中で、話を断ち切ったという印象を与えたとすれば、次に向けしっかりと反省し確認する項目になる。「特報首都圏」は「金曜イチから」にリニューアルするが、そこにもつながっていく。スタジオでのさまざまな所作も含め、あらゆる人がいろいろな角度でご覧になっていることをキャスターにも伝える。

○　まとまった内容の番組だった。復興庁の調べでは原発事故の影響で福島県内外に避難している人はおよそ８万人、自主避難者はおよそ３万人ということだ。原発事故の原因を作ったのはどこなのか。国策だから国の責任があるのは当たり前だが、その指摘が少し弱かったように思う。短時間で東日本大震災後の現状をよくまとめてくれており、福島出身の男性ゲストのコメントはとても分かりやすかった。マスコミ、特にＮＨＫの力はとても大きく、行政に対してもインパクトがあると思う。除染した土地の管理、その周辺で暮らす人に対しての支援など、地域行政でなく、国としてもっと重視して支援を考えなければならないと痛感した。岩手、宮城、福島、被災３県の取り組みを追った番組も作ってもらえるとよいと思った。

（ＮＨＫ側）

今回の「特報首都圏」以外でも、さまざまな番組を通じて、被災３県の被災者や避難者の現状、支援の取り組みなどについて掘り下げて伝えている。

○　風化も進んでいるというコメントがあったが、現在も首都圏には２万 2,000 人が避難しているという。避難者はそれぞれの事情で戻りたくても戻れないことがよく伝わった。家族の病気もあるし、帰ろうとしていた自宅のそばに除染作業で出た土が運ばれていた人もいた。また自主避難中の親と子どもの事情など、避難者の苦渋の様子が伝わってきた。これからも長く続く問題、先の見えない問題としてしっかりと取り上げていた。男性ゲストのコメントで印象的だったのは、「避難先でも戻る人と戻らない人の間に溝、派閥ができている」ということだ。そういった人間関係の分断も含め大きな課題があることが分かった。越谷市の取り組みは成功例としてすばらしく、うまく取材したと感じた。避難しても、避難先で何もしない、何もできないというのは苦痛だろう。畑作業をしたり、郷土料理をふるまったり、小学校に出向いて防災や避難の準備の大切さを伝えることなどを通じて、自分の居場所を見つけられた人は、地域に根づく可能性が十分にあると思った。ほかの震災関連の「ＮＨＫスペシャル」などを見ても、本当に課題の多い原発事故だったと思う。ＮＨＫの今後の取り組み、どのような報道をするのかを教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

この「特報首都圏」もそうだが、首都圏放送センターでは「首都圏ネットワーク」内で震災関連のシリーズを８日間放送した。全国放送でも、ニュースのほか「ＮＨＫスペシャル」「クローズアップ現代＋」などの番組で課題などを伝え、風化させないための報道をし続ける。東日本大震災、原発事故

について伝え続けることは、来年度の「国内放送番組編集の基本計画」や、前回諮問させていただいた「関東甲信越地方向け地域放送番組編集計画」の中にも記している。しっかりと伝え続ける決意だ。

東日本大震災から６年たち、被災３県への応援も含め、どの局よりも態勢を増強し取材している。取材する中で、被災者からは「忘れてほしくない」という声がよく聞かれる。ニュース番組では「ＮＨＫニュース　おはよう日本」「ＮＨＫニュース７」「ニュースウオッチ９」「ニュースチェック１１」で、キャスターが被災地から中継で伝えた。３月１２日(日)のＮＨＫスペシャル　メルトダウンＦｉｌｅ．６「原子炉冷却　１２日間の深層～見過ごされた“危機”～」では、あのとき何が起こったのかを改めて検証するなど、これまでの取材で蓄積したものを生かした。ほかのメディアがやらなくても、われわれはきちんと後世に伝える必要があると思っている。それは視聴率と関係なく、きっちりと取材し伝える。いろいろな受け止め方があると思うが、全国の視聴者に考えてもらう、そういう素材を提供することをこれからも引き続きやっていく。

○　この問題をいちばん伝えられる放送局はＮＨＫだと思う。よろしくお願いしたい。

○　常磐自動車道を走っている時、汚染された土の仮置き場が点在しているのを実際に見て、これでは避難指示を解除されても帰れないだろうと思っていた矢先の番組だった。きちんと事実を報道しているという印象を持った。賠償金の月１０万円は、多い、少ない、いろいろな意見があると思う。現状、月１０万円では、大胆な転居あるいは仕事の拠点を移すまでは踏み切れず、真綿で首を絞められているような状態が続いているという声が聞こえてくるのも事実だ。そういうところにも踏み込んでもらえればと思った。この番組では細かくいろいろと取材していた。このまま風化させないことが重要だと思うが、これから起こり得るだろうさまざまな問題についても、新たな切り口で報道してもらえればと思う。

○　自然災害と、戻りたくても戻れない原発事故では、性質が異なると改めて思った。番組を見て感じたことは、バンドを組んで披露しようとする男性たちや、畑仕事などを通じ生きがいを得て、避難してきた地域に住むことを決めた佐藤さんの笑顔が

うれしかった。どちらも苦しいことがなくなったわけではないが、音楽、畑を通し、地域の人たちに溶け込んでいくことに救われる思いがした。対照的に集団で避難している人たちは、地域との交流がないのかと思うほど、６年間、時が止まったままのような、新たなつながりの感じられない会話だったのが残念だった。住宅保障も生活保障も、有限であることは分かっている。どんな場合でも本人が自分の人生をどうするかを決め、行動しなければならないはずだ。そのきっかけとなるのは周りの人たちとの関わり、つながりしかないのではと思った。地域と避難者の関係性を細かく記したシートは、お互いの課題やできることが双方の目に見えるもので、つながりを感じさせるものだった。沖縄のエイサーの源流が福島の踊りにあることで交流しているという話にも救われる思いがした。６年は誰にとっても平等に与えられた時間で、それぞれが決めた道で今の課題を乗り越えてほしいと願って見た。

○　ＮＨＫは公共放送だが、国営放送が発するべきものと公共放送が発するべきものの違いは何だろうかと考えながら見た。国営放送ならば国と東京電力のスタンスに立った報道がされる。公共放送ではあくまでも公共に立った報道だ。その差は大きいと考える。今回の番組はありとあらゆる角度から取材されていると感じた。タイトルに「岐路に立つ」とあるが、戻れずに困っている方、今の場所で新天地を求めがんばっている方など、いろいろな視点で捉えていると感じた。ただ、いつも「特報首都圏」を見ていて思うのは、３０分弱の短い時間にいろいろな要素が詰まっていればいるほど、どこがいちばんのポイントなのかが見えづらくなる。６年たち、首都圏の避難者たちが新しい道を歩み始めているという力強さを打ち出すのか、住宅補助や賠償が切れることについて、国、国民全体でどう考えるべきなのかという点に絞るのか、大きく分けるとその二つのポイントがあると思う。どちらかにシフトをしたほうがより分かりやすいと思った。重大な話なので、３夜連続などに分け、テーマごとに深掘りし分かりやすく提案したほうがよかったのではないかと思う。また首都圏への避難者２万 2,000 人が今どういう思いで暮らしているのか、そのデータはないのかと思った。戻ろうとしているのか、帰りたくても帰れないのか、新天地を探そうと考えているのか、補償がなくなることにどれだけの人が困っているのかなど、そうした客観的な数字を見たかった。

（ＮＨＫ側）

番組制作時点では２万 2,000 人というマスの状況を集約したデータは見つけられなかった。全体像を探るべきだったというのは指摘のとおりだと思う。

いろいろな角度から見る必要がある。「特報首都圏」は「金

曜イチから」にリニューアルするが、３０分に収まらないときは３週連続シリーズというのもあり得ると思う。「金曜イチからスペシャル」という７３分番組も年８本程度制作するので、その中で伝えるというやり方もある。あらゆる形で多角的にやっていきたい。

○　問題は大きく、新しい課題がどんどん生まれている。原発問題については、われわれが全く経験しなかったことに立ち向かっていると言える。地図に引かれた避難指示の線はただの線だが、そこに訪れてみれば、大事にしていた自分の家のすぐそばに廃棄物が置かれていることが分かる。そういうことは地図では分からないが、映像だと一目で分かる。短い時間でそうした映像を組み上げることにより、視聴者は納得するし、自分のこととして理解できる。その意味でとてもよい番組だった。とんでもないことだが、横浜では原発事故で避難してきた子どもへのいじめが現実に起きている。それは想像力のなさによるところも大きいと思う。この人たちがどんな苦難に直面しているのか、実感を持てる形で、具体的なエピソードとして伝えている点が、今回の「特報首都圏」の意義だったのではないかと思う。

○　番組を見て最初から最後まで分からなかったことは、避難指示が解除される地域の安全性は確認されたのかということだ。避難者と行政の認識の乖離（かいり）、放置された住宅の状況、周辺のさまざまな環境の変化、健康の問題など、「不安」がさまざまな問題の原点にあることは分かった。しかし、本当に安全が確認されたから避難指示が解除されたのかどうかは、最後まで分からなかった。もう少し明確で整理されていると、視聴者もさまざまな事象に対して「そこは割り切るべきだろう」「そこは割り切れない、もっともなことだ」などと判断しやすかったのではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

多岐にわたる指摘を頂き、制作現場として大変参考になった。励みとなる意見も頂いた。今後も東日本大震災に関しては、ＮＨＫとして力を入れ、番組を制作していきたい。

＜放送番組一般について＞

○　３月１１日(土)放送のＮＨＫスペシャル　シリーズ東日本大震災「“仮設６年”は問いかける～巨大災害に備えるために～」(総合 後8:00～8:45)を見た。東日本

大震災から６年の関連の番組の中でも特に印象に残った。仮設住宅の提供のあり方については、被災地の被災規模、そこからの復興状況と合わせ、被災者のニーズに見合っているのだろうかという問題が必ず出る。時間との勝負ですぐに建てられる仮設が重要ということでプレハブ仮設住宅が提供され続けてきたが、６年という時間の中で課題が噴出している。７０年前に制定された法律がこの課題における壁となっており、それがいかに厚く、重いのかについて、番組では丁寧に説明していた。なぜその課題が被災地で繰り返されてしまうのかが広く視聴者に理解されたのではないかと思う。今起きている問題だけでなく、今後私たちは何を考えなければならないのか、今後起きるであろうと予測されている首都直下地震、南海トラフ地震を踏まえ、今解決しなくてはならないという提言は重要であり、わがこととして仮設住宅を考えなければならないというメッセージはすばらしいと思う。被災者の立場を考えれば、復旧だけでなく、復興まで見据えた住宅の提供が必要だと思う。法律を変えない国が悪いという見方にも見えた。一方で、内閣府の方へのインタビューに大事なポイントもあった。自ら生活再建する意識を低下させるような支援が本当に正しいのか、６年も仮設住宅にいるとそこから出ていく気力もなくなってしまうのではないかという事情も考えないといけない。そうしたことを検証している中で、国も今のまま行こうとなっていると思う。そのあたりのコメントをもっと引き出してもらいたかった。そもそも仮設住宅に１世帯で 400 万円かけている。それだけの建設費をかけ、期間は原則２年間だ。その仮設住宅が使われなくなった後にどうなるのか、これからも災害が起きるたびに大量のごみを出すことを繰り返すのかという点についても触れてもらいたかった。番組で紹介した、岩手県住田町の繰り返し使える木造の住宅のすばらしさも含め、いろいろな仮設住宅の提供のあり方が考えられたのではないかと思う。引き続き番組を作ってもらえたらと期待している。

○　東日本大震災から６年の関連番組はほとんど見た。３月５日(日)のＮＨＫスペシャル「あの日引き波が…行方不明者２５５６人」は、引き波の脅威と、実際に遭遇した人たちの聴き取り取材、映像に臨場感があった。

３月１０日(金)のＮＨＫスペシャル「１５歳、故郷への旅～福島の子どもたちの一時帰宅～」(総合 後 10:00～10:49)は、１５歳になり故郷へ一時帰宅する若者たちが何を思い、どう考え、これからどう生きるのかを素直なカメラワークで映しており、考えさせられた。

３月１１日(土)のＮＨＫスペシャル「“仮設６年”は問いかける～巨大災害に備えるために～」では、仮設住宅での暮らしが長引く原因は何か探り、被災者の実態、仮設住宅の生活の実態、特に高齢者の切実さが伝わってきた。仮設住宅には、コミュニティーの崩壊の問題もあるだろう。同じく３月１１日に放送したＮＨＫスペシャ

ル　シリーズ東日本大震災「避難指示“一斉解除”～福島で何が～」も見た。原発事故で立入制限された区域の７割が解除されるが、東京電力からの賠償が打ち切られる。帰る条件が整っていない人も多い。自治体はこれ以上の避難が続くと住民の帰還意欲が失われ、町がなくなる恐れもあり、避難指示の解除を急いでいる。両者の対立、人間関係、コミュニティーの崩壊のようなことをリアルに映していた。

３月１２日(日)のＮＨＫスペシャル　メルトダウンＦｉｌｅ．６「原子炉冷却１２日間の深層～見過ごされた“危機”～」では、当時の失敗をめぐる新事実を緊迫したドラマで見せており、訴求力が強かった。

３月８日(水)と９日(木)放送のハートネットＴＶ「原発被災地　最小の村　福島県葛尾村１９４５－２０１７」（前・後編）を見た。葛尾村では 1,500 人いた村民がたったの 100 人しか帰っていない。周りは汚染土の仮置き場になっている。もう１回追及してほしい。

ＮＨＫがこうした放送を精力的に続け、事実を伝え、記録してくれたことは大きい。ＮＨＫでなければできないことだ。

○　３月１１日前後はいろいろな角度から東日本大震災の特集を放送していた。最近は津波の映像が画面に出てくることがなかったが、３月５日(日)のＮＨＫスペシャル「あの日引き波が…行方不明者２５５６人」では多く映され、改めてその破壊力を突きつけられた。津波の映像を見ても６年前のように不安感が襲うことはなかった。６年という時間がたったからこそ分かったこと、次にはこうしておくことが大事という示唆が、学者やコメンテーターの発言だけで終わってしまうのはもったいないと感じる。私たちに備える、覚悟することをしっかりと訴えかけるチャンスがあるのだから、「ここより先に家を建てるな」と先人が残してくれたように、未来の人たちに向けもっとはっきりと結論を出してほしかった。ＮＨＫは多くを記録してきたのだから、東日本大震災に対しての教訓を、ＮＨＫとして見える形で後世のために残してほしい。

３月７日(火)の「首都圏ネットワーク」で飯舘村から千葉県山武市に避難してきた小林牧場に関するリポートを見た。畜産農家の小林将男さんのがんばりはもちろん、それを支えてきた地域の人たちも含め、みんなが誇りに思えるリポートだった。被災者と地域が力を合わせれば、６年の時間でどれだけの変化を作り出せるのかということを表していた。この地域を誇りに思った。

○　３月１２日(日)のＮＨＫスペシャル「原子炉冷却　１２日間の深層～見過ごされた“危機”～」を見た。かなり突っ込んだ内容だったが、最後の一歩をもっと突っ込んでほしかったというのが率直な感想だ。あれだけの発話の記録、テレビ会議の記録をどのような形で入手し、どのような形で承認を取り、番組を作ったのかは興

味深いところだ。ＡＩによる実際の会話の分析などから、組織的な問題を浮かび上がらせていた。ただ、最終的な締めも含め、その部分の追及が弱くなっていた印象だ。現場では最大限のことをしていたというようなコメントがあったが、それは分かっている。今回のタイトルの「見過ごされた“危機”」と「深層」の組織的な問題は、目の前に見えているので、もっと追及してほしく、もったいないと思った。

○　ＮＨＫスペシャル「原子炉冷却　１２日間の深層～見過ごされた“危機”～」は、ＡＩを使ったテレビ会議の分析から、そこで起きていた状況やさまざまな課題が読み取れ、そういった危機にいかに対峙し処理するかを学ぶことができた。

○　３月１１日(土)の夜の編成は感心した。２０時からＮＨＫスペシャル「“仮設６年”は問いかける～巨大災害に備えるために～」、２０時４５分から「ニュース・気象情報」、２１時からＮＨＫスペシャル「避難指示“一斉解除”～福島で何が～」、２３時からＥＴＶ特集　アンコール「事態を侮らず　過度に恐れず～福島プロジェクトの挑戦～」という編成は非常にインパクトがあった。「“仮設６年”は問いかける～巨大災害に備えるために～」には有働由美子アナウンサーが出演していた。すごく真剣で、鋭い目つきで内閣府の方にインタビューされていて、すごいと思った。キャスターは冷静でなければならないのだろうが、有働アナウンサーは「あさイチ」で視聴者と接しており、ある意味で視聴者の代表のようであったことに好感が持てた。自分たちの意見を代弁してもらっている感じを強く受けた。ほかの視聴者もそういう印象を持ったとすれば、自分の問題として考えるきっかけになったのではないかと思う。次の「ニュース・気象情報」では、前のＮＨＫスペシャルを受ける形で、東京で大きな震災が起きた場合に１８万世帯の住宅の不足があるだろうというニュースから始まり、その次は福島で町村合併が起きるというニュースで、このニュースは次の番組につながっていた。次の「避難指示“一斉解除”福島で何が～」では「あさイチ」の柳澤秀夫解説委員が進行し、現場のさまざまな問題が突きつけられた。復興とは何か、何をしたら復興なのかと問いかけて終わっていた。２３時からＥテレで放送したＥＴＶ特集「事態を侮らず　過度に恐れず～福島プロジェクトの挑戦～」では、科学的な冷静な目で放射能汚染について語っていた。事態を侮らず、過度に恐れず、理性的に向き合うというのは、報道もそうだし、私たちもそうあらねばいけないと伝えていた。３月１１日はいろいろなことについて学んだ。そういう特殊な流れで集中して編成するのはいろいろなことを考えるのによいと思った。

○　３月１３日(月)のクローズアップ現代＋「追跡“森友学園問題”」を見た。森友学園の話は連日のように次々と新しい話が出てくる。日本の行政、官僚システム、

社会が持つ日本的な部分に本質があるような気がして、民放も含めてよく見ているが、この番組は質の違う切り込み方ができていて、とてもよい取材と期待を上回る答えが出てきたと思う。いろいろな問題が切り口になり得るが、問題の発端は小学校の認可を適当とした大阪府の私学審議会だと思う。当時の私学審議会会長のコメントもあり、その審議会のやりとりがいかに異例だったかをしっかりと再現できていた。また８億円の値引きについて、普通の取引ではありえないということを、実際の土地関係の取引をしている業者に取材し、説得力のある形で説明していた。大阪府、国も含め、開校を前提として、いろいろ動いているということでなければ説明がつかないということがよく表現されていたと思う。森友学園理事長の籠池泰典氏に関しても、無理難題はどうやると通るかというような推測など、さもありなんといういろいろな話をよく取材できていたと思う。

○　３月１６日(木)のクローズアップ現代＋「“老人ホーム”が空いている！？」を見た。地方都市は人口減少で入居者が不足している施設があり、逆に人口集中部では足りないという問題を取り上げていた。地域のニーズは地域がいちばんよく分かり、地域が対応していくことが大事ということだ。その上で、それを客観的に俯瞰（ふかん）して全体を取りまとめる役割があるという構造を示唆する番組だった。保育園の問題もそうだが、地域によってそれぞれに解決方法があり、全国４７都道府県が最小公倍数的な施策で解決できるものはないと確認できる番組だった。新しい番組編成が始まる４月以降、地方局の活躍に期待する。

○　１月２８日(土)に放送したブラタモリ「水戸」は、観梅時期の相乗効果もあり、地元観光業に多大なる影響をもたらした。去年までは東日本大震災後の風評被害も長引き、観梅の来客者数が減少したままだったが、今年は週末だけでなく、平日にも水戸に訪れる方、観光バスが増えたように思われる。水戸市内はもちろん、茨城県沿岸部、北部にも好影響を与えただろう。ＮＨＫがこれからも地方に熱いエールを送っていただくことは地方にとって大変重要なことだと改めて認識した。

○　３月４日(土)、バスケットボール　Ｂ２リーグ中継「茨城ロボッツ」対「バンビシャス奈良」(総合 後1:50～3:55　茨城県域・奈良県域)を見た。放送翌日の茨城ロボッツの試合の観客数は、前日の倍近くに増えており、ＳＮＳ上でも大きな変動が見られた。通常は土曜よりも日曜の試合のほうが観客は減る傾向にあるが、ＮＨＫの影響力の強さを改めて感じた。ＮＨＫの放送は、Ｊリーグ、野球だけでなく、週末連戦となるＢリーグにおいても、地域活性化、スモールマーケットの魅力の向上も含め、すばらしい効果を生むと実感した。

（ＮＨＫ側）

バスケットボールは全国的に中高生など部活動でやっている方もかなり多く、日本にバスケットボール経験者は多い。ＢＳ１の新しいソフトとしてバスケットボール中継を育てていきたいと思っている。

○　それは 2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに向け、ステップを考えているのか。

（ＮＨＫ側）

必ずしも東京オリンピック・パラリンピックに向けてということではないが、地方のスポーツをさまざまな形で盛り上げることが 2020 年に向けても重要なことだと思う。そういう面でバスケットボール中継は、ＢＳ１の新しいソフトとして放送していきたいと考えている。

○　３月１日(水)のアナザーストーリーズ　運命の分岐点「北朝鮮　拉致を暴いた人たち～闘いは終わらない～」を見た。時間軸に沿って伝えており、その時々の課題が浮き彫りになっていると感じた。産経新聞の阿部雅美記者が警察関係者の話を小耳に挟み、日本海で変なことが起きているということころから取材はスタートした。新潟で蓮池薫さんの両親に取材をしたことで、普通の失踪ではないという確信を持ち、1980 年１月に産経新聞１面で報道したが、他のマスコミには追随されず、当時は虚偽報道だろうとうわさされた。７年後に大韓航空機爆破事件で金賢姫が拉致を証言し、1988 年に参議院予算委員会での質問に対し、国家公安委員長が拉致を認めた。それでも新聞社は小さく取り上げただけだった。関係者のコメントとして、「日本政府、マスコミ等が問題を早く取り上げれば、現在は違う方向になっていたのではないか」というものがあった。ＮＨＫはどんな考え方でどんな報道をしたのか聞きたい。報道のあり方を問われる番組をあえて今制作した意図も聞きたい。

（ＮＨＫ側）

時間がたち、語ってもらえるようになった事件を取り上げることが「アナザーストーリーズ　運命の分岐点」の一つのスタンスだ。当時、ごく一部の人たちが切り込んだことで問題が表面に出てきて、その何人かがつながり、かなりの時間をかけて顕在化させ、一部の解決につながった。そうしたことをある程度立体的に伝えることができたのが今のタイミン

グだった。

○　３月１２日(日)のＮＨＫスペシャル「原子炉冷却　１２日間の深層～見過ごされた“危機”～」もそうだが、時間がたってからそのとき何があったのか情報として伝わってくる。注水できる設備があったが、訓練をしていなかったために注水できず、メルトダウンが起きたということだった。報道機関として報道の仕方は難しい部分があると思うが、時間がたつと取り返しのつかない大きな事件、事故になってしまうこともある。そういうことを今後もいろいろな番組で視聴者に情報を提供してもらいたいと思う。

○　３月１５日(水)のアナザーストーリーズ　運命の分岐点「あさま山荘事件　立てこもり１０日間の真相」の再放送を見た。今から４５年前、連合赤軍のメンバー５人が軽井沢のあさま山荘で管理人の妻を人質に立てこもった事件は、衝撃的な経過がテレビで生中継され、日本中の注目を集めた。特にＮＨＫは２月２８日、事件が解決した日に異例の１０時間４０分にわたる生放送を行い、平均で５０．８％という視聴率を記録したという。４５年が経過した現在でも報道特別番組の日本記録ということだった。当時の中継画像を多く使っていたので、４５年前を鮮明に思い出した。あの頃テレビで見た人は、人が人を狙ってライフルを撃ったあの事件を忘れることはないと思う。番組では犯人の１人が獄中で書いた手記をもとに山荘内の様子を再現し、強行突入したときの緊迫した状況、鉄球で山荘を破壊したときの秘話を取り上げていた。忘れることのできない事件をさまざまな角度から丁寧に扱っていたと思う。

○　気象情報は一昨年にひまわり８号の運用が開始されてから以前にも増して分かりやすくなった。いろいろな種類の画像がきめ細かくスムーズに表現されるようになっている。平面ではなく、必要に応じて立体的にもなっている。気象予報士もよく鍛えられており、的確に分かりやすく説明している。私は雨雲や風の推移、雨がいつから降るのか、ということを細かくチェックしているが、時間の推移を示す表示がデジタル時計だ。９時、１０時と数字が動くが、いったん数字を読んで理解する必要があるので、もっと一目で分かるような表示を考えてほしい。例えばアナログ時計にして、針が動くのに合わせ背景の色も昼から夕方、夜にかけて変化させるとともに、同時に雨雲の動きを連関させるなど、感覚的に捉えやすい表示が分かりやすいと思う。また、気象予報士が解説するとき、標準的な生活をしている人のパターンが決められているような気がする。朝に出勤し、電車で通勤し、夕方に帰る、という人が基本になっているのではないか。車で通勤している人もいるし、自宅で商売をしている人もいるし、いろいろな人がいると思う。「今日は洗濯日和です」

というのはよいと思うが、あらかじめ決められた生活パターンに則しすぎた表現などがあると思う。

（ＮＨＫ側）

いろいろな指摘をありがたく思う。気象情報をどう伝えるかは不断の闘いで、いつも議論している。立体的な画像も含め、いろいろな種類の画像を駆使し、バーチャルの技術でアナウンサーが小さくなって全面に天気図を出す仕組みなど、いろいろと取り組んでいる。どれがいちばん分かりやすいか、視聴者の反応も見ながら最適なものを選んでいきたい。時間の推移が分かりづらいということだが、尺の問題もあるかもしれない。尺が短く、速く推移すると、あっという間に変わってしまう。９時、１２時、１５時という数字だけでは分かりにくい、という指摘もある。天気を伝える時間のスパン、表現方法は常に研究している。人によって受け取り方に幅があるので、なかなか決まらない部分もある。より視覚的に分かりやすくしていければと思う。いろいろな工夫を重ねていくので、引き続き意見を頂ければと思う。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２９年２月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

２月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、１７日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、８人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「ＳＴＡＰ細胞報道に対する申立て」に関するＢＰＯ決定とＮＨＫの対応について報告があった。次に「平成２９年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」について報告があった。引き続き、「平成２９年度関東甲信越地方向け地域放送番組編集計画（案)」の諮問にあたって説明があり、審議の結果、番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。

続いて、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、３月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　髙野孫左ヱ門（(株)吉字屋本店代表取締役社長）
副委員長　伊藤由貴子（神奈川県立音楽堂館長・プロデューサー）
委　　員　岩佐　十良（(株)自遊人代表取締役）
大山　寛（サンファーム・オオヤマ(有)取締役会長）
岡田　芳保（元群馬県立土屋文明記念文学館館長）
国崎　信江（(株)危機管理教育研究所代表）
原　　拓男（千曲錦酒造(株)相談役）
古澤　宏司（(有)古沢園代表取締役）

（主な発言）

＜「平成２９年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」について＞

○　「平成２９年度国内放送番組編成計画」にある、ラジオ第１の新設番組「きこえタマゴ！」(ラジオ第１　月～水　後　7:40～7:59)について。以前、番組審議会で、朝は忙しいのでテレビに目を奪われている余裕がなく、耳を働かせラジオを聴きながら朝の準備をしているという話をした。その際に、同じ時間帯に子どもも学校の準備をしており、朝の時間帯に親子で楽しめるラジオ番組があればよいのに、ということも話した。ようやくそうした番組が企画されたと思ったら、放送時間は夜だ

という。「共働き世帯が年々増加して親子の接触時間が少なくなる中」と書いてあるが、広報局のホームページには「親と一緒」にというような文は出ていない。子どもが参加して子どもが楽しめる番組となっている。番組の中身も親子で聴くものでなく、子どもが独りで聴くものではないかという感じもするが、なぜ午後７時台の編成なのか。その時間、ゴールデンタイムのテレビ番組には、子どもが見たがる競合番組が多くある。ラジオを親子で聴く番組はその時間でよいのだろうか。

（ＮＨＫ側）

　これまでラジオ第１は、ラジオの総合波としてさまざまな人のニーズに応えてきた。一方で、親子で楽しむ、あるいは子どものための番組は少なかったため、この番組を新設することにした。子どもは夜９時までに寝るのが理想的ともいわれているが、就寝までに親子で聴いていただけるよう、この時間に編成している。基本的な作りとしては、子どもが主役として楽しめる番組でありながらも、その中で親子の会話も生まれればよいという趣旨の番組だ。ＮＨＫでは、子ども番組は、ほかの時間帯にも編成しているが、親が食事の準備をしている、あるいは働きに出るような時間帯だと、子どもと一緒にゆっくり過ごすことが難しい側面もある。この時間帯であれば夕食を食べながら一緒に聴くこともできる。そういう意味で親子の会話が生まれるような番組を目指している。昨年度、「こどものじかん」という特集番組を放送したが、その発展系として「きこえタマゴ！ 」を開発した。広報資料には、「親子で聴ける子どもが主役の番組を新設」と記載している。理解いただければと思う。

○　せっかく子どもが楽しめる、親子で楽しめる番組ができたのに、この時間帯で聴取者が少なかったという評価により、こうした番組自体がなくならなければよいと思う。これからも親子で楽しめる、子どもが楽しめる番組づくりを進めていってほしいと期待している。

（ＮＨＫ側）

　ぜひ期待に応えたい。こんな番組ができてよかったと言われるように、評価していただけるような番組を目指す。

＜「平成２９年度関東甲信越地方向け地域放送番組編集計画（案）」について
−諮問−＞

○　各放送局、少しずつ独自性が出ていると感じた。昨年はどこの局も同じように感じたが、今回は地域性を前面に出すようになった印象を受けた。

○　各放送局が地域の個性を生かした計画を立てており、結構だと思う。昨年は東京都知事選挙が急きょ行われたり、富山市議会では信じられないような問題も起きたが、地方の議会、行政にはまだ大きな問題があると思う。各放送局は選挙報道にきちんと取り組むということだが、議会や行政がどう動くかについても、地域の活性化、地域づくりにとても大きな影響もあるので、そのあたりも積極的に取材していってほしい。そうした番組作りが、よい社会作りに貢献するのではないかと思う。その点について配慮をよろしくお願いしたい。

○　安全・安心に関して、県をまたいで災害が発生する火山、河川、断層などもあると思う。各放送局で今後展開する災害情報、防災面において関連する災害に関しては、各放送局で連携をとり、同じような情報が共有できればよいのではないか。

○　各放送局、いろいろなことをきちんと判断していると感じた。スポーツ関係をもう少し多く取り入れていただければという気がする。

○　地域の課題、多彩な魅力を、深く、詳しく掘り起こしてほしい。人口減少は各県でも大きな問題だ。群馬県は、限界集落の地域もあるし、魅力度も伸び悩んでいる。地方の新聞社、テレビ局、ラジオ局などと連携した企画も必要なのではないかと感じている。そのほかの課題については真摯（しんし）でよい姿勢であり、ＮＨＫらしいと思う。全面的に了解したい。

（ＮＨＫ側）
地元の新聞社などとの連携は各放送局が取り組んでいる。
今後も全国の放送局で取り組んでいく。

○　すべての放送局のいちばん上に書かれている防災・減災に関して、提案がある。書いてあることは大切だと思うし、何も異論はない。ただ、糸魚川の火災のときにも思ったのだが、最近のテレビの報道は、例えばどのぐらいの規模で火災が発生し、どこまで延焼しているのか、どれぐらいの被害が実際に出ているのかという点について、全国に広まるときに大きく伝わりやすい傾向にあると思う。大きく伝わるこ

とで、防災・減災にもつながり、次の災害の発生を食い止める側面もあるが、どの程度の範囲内で被害が発生しているのか、より正確に伝えるすべがないのかと考える。東日本大震災などでもそうだったが、災害が起きるとＳＮＳなどでデマが飛び交う。熊本地震で「ライオンが逃げた」というのもあった。今の報道の態勢では、具体的な被害の範囲に対し言及できない間にＳＮＳでデマが流れてしまう。そのことに報道機関が翻弄されるような状況になる可能性が高いのではないかと考えている。たくさんの支局を新たに設けることは難しいだろうが、ライブカメラの観測地点を網の目のように置くような形はとれないだろうか。編集計画（案）にはインターネットなどのあらゆる手段を活用すると書いてあるが、インターネット時代に即した防災・減災報道をし、デマを止められるシステムのようなものを考えてもらえると、安心できるのではないか。

（ＮＨＫ側）

発災直後にどの程度の被害の広がりがあるのかは、取材しながら、そのつど適切に伝えていく。全国にロボットカメラは 700 台程度あるが、今以上に面をきちんと捉えられるよう、さらに整備を進めていく。例えば富士山では、よりしっかり見えやすいところにロボットカメラを新たに２台設置することにしている。電源は太陽光を使い、切れないようにする。ヘリコプターは全国で１５機運用しており、空からの映像を伝えることで被害の広がりが分かるよう努めている。ヘリコプターの位置情報と地図を連携させるようなソフトも開発している。ほかにも委員からの指摘のような、被害の規模の広がりを把握できるようなより効果的な仕組み、技術も、今後開発していきたいと思う。フェイクニュースについては、一つ一つを検証、否定することは難しい部分もある。またマスメディアが反応することが、呼び水になってしまうこともあるかもしれない。ＮＨＫは公共メディアとして事実をきちんと伝え、「ＮＨＫが伝えていることはフェイクではない」と思ってもらえるような、信頼される情報を出していく。災害時には、被害の全体状況を見ながら、適切な情報の出し方について考えていく。

○　地域それぞれに課題となっている防災のあり方があると思うので、きちんと対応してほしい。また、首都圏は特に通勤などで人の地域間の移動が多いので、広域的な面での報道にも引き続き期待したい。地域放送局は地域への愛と地域の課題の発

信地点でもある。地域の課題は日本の課題でもあるが、まずは地域に密着した部分で糸口をつかむことが、全国に広げていくためのスタート地点にとなるのだと思う。そのことが、明確に地域に根ざした情報として、信頼を得られるのではないか。例えば、相模原市の障害者施設殺傷事件は、地域の事件だが、日本において障害者との共生を考えるうえで重要な課題をはらんでいる。ほかにもたくさんの課題があると思うが、日本全体、世界全体につながる話題を地域から発信し、全国的に取り上げてもらうようなスタイルができるとよいと思う。また、インターネットなどさまざまな技術革新により、便利に情報を入手できるようになることはありがたいが、そこから取りこぼされる人、手の届かない人もいるはずだ。そういう人たちへのフォローを常に頭に置きつつ、技術の革新を考えてほしいと思う。

（ＮＨＫ側）

　インターネットが普及し、インターネットから得られる情報はかなり多くなっている。その一方で、高齢者などでは、そうした情報が取れない方も多くいる。例えば貧困問題でも、もう少し情報がきちんと届いていれば早めに手が打てた、行政の支援が受けられたというケースもある。情報がきちんと届いていないことは大きな問題になっていると、強く認識している。そういう方々にもあまねく情報を伝えることが公共放送の役目だ。テレビ、ラジオなどを通じ、できる限り情報を届けたいと思う。特に命や暮らし、安全に関わる問題などには重点を置きたい。

○　防災・減災もさることながら、発災後の被害状況の報道については、できるだけバランスのよい内容で放送してほしい。概してその地域を代表するような特殊な産業や、新たに取り組んでいる大きなプロジェクトへの被害などについてが報道対象となりがちだ。一方で、一般的な生活を支えるインフラそのものに対する被害が報道されていないケースを過去何回か目にしたことがある。そうした被害については、放送で取り上げてもらうことで被災者が勇気づけられる一面もあろうかと思う。そのような報道のあり方に留意していってほしい。

○　災害、社会の課題、オリンピック・スポーツ文化、選挙報道など、それぞれの放送を通して、頼りになり信頼されるＮＨＫであることを目指していることを受け止めた。特に千葉放送局の編集計画（案）では、それぞれのカテゴリーで千葉県のことをしっかり知らせており、千葉県の価値を世界に発信していくことや、県内のあらゆる放送関係者とのつながりを活かしながら、豊かな地域づくりの一翼を担おうとしているこ

とが分かった。

○　諮問をいただいた「平成２９年度関東甲信越地方向け地域放送番組編集計画（案）」について、委員の皆さんの意見の趣旨が番組編成に生かされることを前提に、原案を可とする答申をしたいが、異議はないか。

○　異議なし。

○　原案を可とし、答申することにする。

（ＮＨＫ側）

原案を可とする答申をいただき、ありがたく思う。いただいたご指摘とご意見を、地域放送番組の編集に生かしていく。今後もよろしくお願いしたい。

＜放送番組一般について＞

○　２月１２日(日)のＮＨＫスペシャル「見えない“貧困”～未来を奪われる子どもたち～」は、タイトルのとおり見えない貧困を伝えていた。絶対的な貧困でなく、相対的な貧困だ。中高生がアルバイトで家計を支え、靴、服も買えないので部活に入れない。本人は貧困であることを隠している。そういう実態を明らかにし、６人に１人が相対的貧困とされる状況だということを伝えていた。ＮＨＫでなければできなかった番組ではないか。われわれの周りにもそういう子どもがいるのではないかと思わされた。

○　２月６日(月)と７日(火)放送のクローズアップ現代＋「フェイクニュース特集」を見た。さまざまな不確定な情報がインターネット上で流れているなかで、不確定な部分をいかに周知するかという番組だと感じとった。熊本地震で「ライオンが逃げた」というデマも、地震で不安なところにそういう情報が流れることで信じやすくなってしまう。そういった点を突いたフェイクニュースだったと思った。３人の出演者が自身の経験も交えながら分かりやすい話をしていた。高齢層など、そういう情報を取ることが苦手な世代もいるかと思うが、そうした人たちにも分かりやすい内容だった。自分たちで判断しないと情報に惑わされるという問題提起で、関心を持って見た。周りの人と会話をすることで、しっかりと判断するための基礎を身につけないといけないと考えさせられた。

○　２月６日(月)と７日(火)のクローズアップ現代＋「フェイクニュース特集」を、とても興味深く見た。見終わった後で「こういう時代になってしまったのか」と頭を抱えた。情報が錯綜（さくそう）する時代において、ＮＨＫには、今まで以上に正確で、あらゆる面で視聴者から信頼される放送を出してもらいたい。かなり細かいことも含め、しっかりとチェックをし、送出することが大事だと思う。

そんな目で見ていて気になる番組がいくつかあった。まず１月２９日(日)、ラジオ第１の新日曜名作座　萩原浩短編集（４）「時のない時計」だ。この番組は読み手の２人の俳優の器量が存分に発揮され、とても楽しく、さすがだと思って機会があれば聴いている。だがこの回、時計の針についての描写で、「ぶんしん」と読んでいたシーンがあった。ラジオは視覚情報がないので「ぶんしん」とは何だろうと思ったが、どうも「分針（ふんしん)」のことのようであった。時計の針は長針と短針かとも思ったが、原作は「分針」となっている。「ぶんしん」は別の意味になるのでまずいのではと思った。放送前にチェックするチャンスはあったと思うので、きちんとチェックしてもらいたい。

次に、今週の連続テレビ小説「べっぴんさん」で、登場人物がダメージジーンズをはいていた。昭和３７年の設定だが、その時代にはあれだけ鮮やかなダメージジーンズはなかった。流行の先端を行っている子どもを表現したくてはかせたのだと思うが、やりすぎだったと思う。しっかりとチェックしてほしい。

そして、アクセントについてだが、「夜勤」ということばで、「や」にアクセントを置くアナウンサーがいた。どれが正しいのかは分からないが、普通は「き」にアクセントを置くのではないか。ＮＨＫのアナウンサーの日本語は一つのひな形だと思っている。次からはどちらかに統一するような配慮をしてもらいたい。またプロ野球などで有望な新人を指す「即戦力」ということばも、「即、戦力」とはっきりと区切って発声しているケースがあった。おそらく誤って理解をしているのではと思った。間違いではないのかもしれないが、ＮＨＫには正しくあってほしい。そういうことも含め、いろいろとチェックをすることが、ＮＨＫの信頼感をアップさせるために大切だと思う。

（ＮＨＫ側）

指摘いただいた点は、制作現場に確認する。

連続テレビ小説「べっぴんさん」の、穴の開いたダメージジーンズについては、視聴者からも全く同様の意見が届いている。そういう意見をいただいたことは制作現場にも伝えている。

○　２月１３日(月)のクローズアップ現代＋「五七五　つらい現実　笑っちゃえ～サラリーマン川柳３０年～」を見た。今年で３０回目を数える恒例のサラリーマン川柳を取り上げていた。作品では部下と上司の関係、家庭内での男性の肩身の狭さを詠むなど、どの作品も１７音でうまく表現していた。作者を実際に取材することで作品の真意が視聴者により伝わったと思う。江戸時代の中ごろから続く川柳のように、短い文章で表現する短文文化が昨今は若い人たちの間でとても多くなっていると感じている。なお、この番組のタイトル「クローズアップ現代＋」を短文にし「クロ現＋」と画面に出ており、身近に感じる一方で、そこまで省略しなくてもという気もする。また、最初はこの番組が生放送である必然性が分からなかったが、「ＬＩＶＥ」というテロップの右側に「質問はこちらに」というスーパーがあり、視聴者からの意見をすぐに反映させるため生放送であるのだと理解した。しかし、視聴者からの意見をまとめたボードは、最後に少し出ただけだったように思う。せっかく視聴者から意見をもらったのだから、最後にもう少し取り上げたほうがよかったのではないか。この番組について、ＮＨＫステラには「最も関心の高いテーマに迫る」とあるが、残念ながら毎回そうはなっていないように思う。

（ＮＨＫ側）　「クローズアップ現代＋」を「クロ現＋」と省略して画面に表示しているのは、若者の短文文化にこびているわけでなく、単純に字数の問題だ。「クローズアップ現代＋」と書くと、字幕の字が増え、画面が見づらくなってしまう。視聴者からの意見のボードをもっと見たいという声はよくいただいている。ホームページには放送後、掲載している。視聴者の声を取り上げつつ番組を展開したいという志でやっているが、生放送なので時間が押すと短くなってしまうことはある。視聴者から寄せられた声を十分に生かした番組づくりを心がけたい。

○　２月２日(木)、ファミリーヒストリー「大竹しのぶ～語り継がれる大竹様伝説１世紀を経ての出会い」の再放送(総合 前 0:15～1:28)を見た。「ファミリーヒストリー」は好きで、よく見ている。大竹さんの先祖にあたる方々のあれこれが解明され、おもしろかった。そうしたエピソードを聞いている本人や司会者の表情や心の動きも感銘を受ける部分だ。この放送では、そうした出演者の表情をワイプで映す画面で、次回予告のテロップが出演者の顔に重なって出ていた。こんなによいところで、なぜ番組宣伝をするのだろうと思った。大女優の表情を見られるチャンスなのに、次回予告を出さなくてもよいではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

本放送時には、次回予告のテロップは入っていなかった。再放送であれば予告のテロップを入れてもいいのかということだが、次回の本放送を見てもらいたいというねらいがあったのだと思う。

○　２月１２日(日)、さわやか自然百景「千葉 外房 いすみの海」を見た。１５分という短い時間だが、とても興味深く、素晴らしい番組だった。海の中の不思議、物語に出てくるような生き物たちがすごかった。いつも当たり前に見ている海や魚たちが、美しい映像、構成、撮影の技術によって、全く違う貴重な世界のものに見えてとても新鮮だった。私たちがいつも当たり前に目にしていることや風景は、もしかしたらとても貴重なもので、世界に発信できるもの、上質な情報なのではないかと考えることができた。「“あるもの探し”はまちづくりの基本」と、人にはいつも言っているが、映像は、理屈ではなく知らせることのできる方法であると確信した。ＮＨＫワールドＴＶでの、南関東３県の集中編成では、千葉に関する番組が１２本も放送されることをありがたく思う。放送で展開される一つ一つに対して、しっかりと理解し、受け答えの出来る県民でありたいと改めて思った。

○　大河ファンタジー「精霊の守り人Ⅱ　悲しき破壊神」は、音も、ＣＧ技術も、美術も、とても楽しめている。前シリーズもそうだったが、何よりも主演の綾瀬はるかさんの演技力がすばらしい。しかし、ドラマをＰＲする番組「ロバート秋山の爆笑「精霊の守り人」を作ってみた」は、見ていてイライラした。かえってドラマを盛り下げているのではないかと思う。なぜわざわざ作ったのかが私には分からなかった。ドラマ自体はとてもすばらしい。

（ＮＨＫ側）

「ロバート秋山の爆笑「精霊の守り人」を作ってみた」は、表になかなか出てこない音づくりの深さ、楽しさといった、ドラマ作りの舞台裏について伝えたくて制作した。頂いた意見は制作現場にも伝える。

○　１月２９日(日)に千葉県君津市の館山自動車道で女性が死亡した軽自動車事故があった。ニュース番組で、事故車のナンバープレートがはっきりと読み取れた。以前にも「交通事故報道で事故車両のナンバープレートが見えているのはいかがなものか」と指摘した。その際は、「映らないように配慮している」という答えをいただいた。その後の放送では、ナンバープレートがきちんと隠されていたが、今回、

再びナンバープレートが見えた。時間がなく、すぐにニュースとして放送したのかと思うが、しっかりと規定があるのであれば配慮してもらいたい。

（ＮＨＫ側）

ナンバープレートが個人を特定できる情報とは言い切れないが、個人情報に配慮することは報道機関として大事なことであり、適切に対応していく。

○　２月１２日(日)、北朝鮮の弾道ミサイル発射があったことで、昼のニュースを大幅に延長していた。日米安全保障条約について関心が高まる中、北朝鮮の弾道ミサイルが発射されたことで、その後の日米共同会見でどのような発言があるのか期待して見た。ニュースを延長しタイムリーに伝えていたことはＮＨＫらしい報道だと感じた。世界情勢は、北朝鮮の金正男氏の殺害など、いろいろな動きが起きているが、ＮＨＫは公平・公正で正確な情報を今後も放送していってほしい。

○　２月７日(火)・８日(水)に放送した、ハートネットＴＶ　シリーズ　暮らしと憲法　第３回「障害者」、第４回「原発被災者」、また２月９日(木)放送の「ＷＥＢ連動企画“チエノバ”暮らしと憲法」は、日本国憲法施行７０周年の節目のシリーズだった。憲法条文は読んでいるが、生活の中でどのように自分たちと密着しているのかまでは分からなかった。憲法が暮らしの中でいかに重要な理念であり、法であるのか、生存権、国民主権とはどういうことなのか、現場の生活者の視点から解釈し、理解することができた。できれば今後もっと膨らませてほしい。憲法論議はこれから国会などでもあるだろうから、今後もっと膨らませてほしい。いつも憲法９条が注目されるが、番組でも取り上げた２５条の生存権の問題は大変重要だと思う。

ほかに憲法に関する番組として、ＢＳプレミアムで放送した２月１５日(水)のアナザーストリーズ　運命の分岐点「誕生！日本国憲法～焼け跡に秘められた３つのドラマ～」にも驚かされた。婚姻における男女平等を盛り込んだＧＨＱのベアテ・シロタや、憲法学者の鈴木安蔵をはじめとした日本の憲法研究会によるすぐれた草案の存在など、日本国憲法の舞台裏に具体的に迫っていた。また、当初、アメリカは伊豆大島を日本から独立した共和国にしたかったそうだが、これは初めて聞いたことで驚いた。これを受けて、当時の伊豆大島元村の村長はじめ島民たちで独自の憲法草案を作っていたという。憲法論議がされるとき、アメリカが押しつけたとよく言われるが、これらの話のように、そうではない側面、歴史的な背景なども具体的に掘ってくれるとよいと思う。

２月１１日(土)のＥＴＶ特集「その名は、ギリヤーク尼ヶ崎　職業　大道芸人」はおもしろかった。すさまじい芸人だ。水をかぶり、ふんどし一つで踊る。圧倒さ

れた。８６歳で、パーキンソン病になり手足も思うように動かなくなったが、人生最後との思いで、新宿で芸を披露した。大道芸人の生きざまに感動した。

○　「クラシック音楽館」や「ららら♪クラシック」などの音楽番組で、最初から番組を見ていれば、作曲者や曲名が分かるが、途中から番組を見ると「何という曲だったか」と知りたくなることがよくある。できれば楽曲の演奏中に、そうした情報をスーパーで随時出してもらえるとありがたい。少なくとも曲の最初と最後には作曲者と曲名を紹介してほしい。

（ＮＨＫ側）

音楽番組では、視聴者に分かりやすくストレスのない表示を考える。番組によってはデータ放送なども使い、テレビリモコンのｄボタンを押すと補足情報が分かるものもある。指摘された点は、今後検討する。

○　Ｅテレの「スーパープレゼンテーション」が好きで、よく見ている。「スーパープレゼンテーション」は単純な作りの番組で、プレゼンターの話をメインに撮影している。「平成２９年度国内放送番組編集の基本計画」では、スーパーハイビジョン、４Ｋ・８Ｋについての記述が多くあるが、「スーパープレゼンテーション」は、４Ｋ・８Ｋで制作するような番組とは対極にあると思う。私は、こうした形の番組やニュースにも価値があるのではないかと思っている。東京オリンピック・パラリンピックに向け、４Ｋ・８Ｋ制作が進むことに反対しているわけではない。ただ、最近考えるのは、テレビ、メディアが何を訴えなければいけないのか、美しい映像と音声だけではない世界があるのではないかということだ。視聴者は４Ｋ・８Ｋの放送を求めているかも知れないが、そればかりでは、専門家による、いきすぎの世界に陥る可能性があると思う。単純な映像、音声で伝えるよさも見直してもよいのではないか。

（ＮＨＫ側）

「スーパープレゼンテーション」は、アメリカのＴＥＤという組織が主催するカンファレンスの素材を活用し、ＮＨＫで解説を付けている番組だ。こうした番組も、４Ｋ・８Ｋと対立する概念ではないと思っている。中身で勝負せよ、ということだと思うが、その精神を外さずに進めていきたい。

○　ＢＳ１で放送している「ＢＳ世界のドキュメンタリー」が好きで、よく見ている。

シンプルな構成ながらも意外と深いところまで届いている。１月９日(月)から８回にわたって放送した「シリーズ　ギャレス・マローンの職場で歌おう！」、１月２４日(火)のシリーズ酉（とり）年に贈る“バード”なドキュメンタリー「鳥たちに人生を重ねて　～ＮＹセントラルパーク物語～」、２月１６日(木)のシリーズ　音楽って、すばらしい！「タッチ・ザ・ミュージック　盲目のフルート奏者が“見る”世界」などを見た。シンプルな作りの番組だが、力のある映像とコメントで訴えるべきことをきちんと伝えている。ＮＨＫが独自に作っている番組の中には、こういうことを忘れているのではないかと思うことがある。こうした番組のよさも忘れないでほしい。

（ＮＨＫ側）

シンプルながらも本質的に力のある番組作りは私たちが目指しているものだ。最近はそのあたりに課題があると感じており、ぜひ強化したい。

○　２月５日(日)、ＢＳ１で放送のドキュメンタリーＷＡＶＥ・選「チャイナマネーが見る夢～中国ベンチャービジネス最前線」を見た。深センという中国の特区での投資ファンドとベンチャーについて取材した番組だった。この街が培ってきたインキュベーターとしての機能が投資ファンド、ベンチャーをどう成功させるのかというストーリーで、その先にあるのは金もうけかと思っていたが、全く違っていた。投資ファンドが、人を育成する機能を果たしているという視点は興味深かった。かつて人件費の安さから「世界の工場」と言われた中国だが、もはや人件費が高騰し、世界の工場は次なる地域に移ってきている。中国の成長はいつ終焉（しゅうえん）するのか、成長とは何かということも併せて考えさせられる楽しい番組だった。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２９年１月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

１月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、２０日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、宇都宮放送局の取り組みと今後の予定について報告した。その後、金曜ｅｙｅ「あなたも知らない！ＴＯＫＹＯ発見旅」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　髙野孫左ヱ門（(株)吉字屋本店代表取締役社長）
副委員長　伊藤由貴子（神奈川県立音楽堂館長・プロデューサー）
委　　員　岩佐　十良（(株)自遊人代表取締役）
岡田　芳保（元群馬県立土屋文明記念文学館館長）
国崎　信江（(株)危機管理教育研究所代表）
野老真理子（大里綜合管理（株）代表取締役）
原　　拓男（千曲錦酒造(株)相談役）
古澤　宏司（(有)古沢園代表取締役）
山口　晃平（(株)山口楼 専務取締役）

（主な発言）

＜金曜ｅｙｅ「あなたも知らない！ＴＯＫＹＯ発見旅」
（総合　１２月２日(金)放送）について＞

○　ハラルメニューを提供するカラオケ店があることなど、興味深く見た。イスラム教徒の方々が多く出演しており、新しい発見もあった。イスラム教徒の中にもいろいろな考えの方がいるので、女性の衣装に関する部分などは、放送に出すことの判断が難しい面もあったと思うが、反応はどうだったのか。

（ＮＨＫ側）
委員の言うように、イスラム教徒の人が楽しむロリータ

ファッションの紹介部分については、番組を見るイスラム教徒がどう思うかを気にした。イスラム教の中でも宗派によって服装に関する考え方は異なるそうだ。担当ディレクターが事前に数多くのイスラム教徒の人たちを取材し、アドバイスをもらった。そのうえで、今回のような形であれば問題ないと判断し、紹介した。

○　タイトルに興味をひかれオンエアを見た。日本のことを深く知っている外国人をよく取材していた。高円寺・阿佐ヶ谷が大好きというチェコ人のペトル・ホリーさんが、徹底して日本の文化や日本人の感性を好きになってくれていることは、日本人としてうれしいと思った。番組が７３分と長いので、強く意志を持って見ないと疲れてしまうところがあると思う。特に“ギザ１０”のくだりはほかの題材の取り上げ方と温度差があり、違う形でもよかったのではと思った。首都高速道路の下などを移動するカヤックツアーの紹介は興味深かった。東京の都市美、機能美は好きだが、日本橋の上に位置する高速道路の景観は個人的にはいただけないと思っている。番組を見て改めてそう思ったし、世界の人がこれだけ東京の景観に興味を持ってくれているのであれば、別の形で構想していたらという思いを強くした。全体を通じて、日本の伝統、文化、家族、人との触れ合い、お互いを尊重することなど、日本人でも忘れかけているようなところを根底にしながら、番組の趣旨どおりに日本人でも知らないような東京の一面を見せてもらった。

○　番組を見る前に驚いたことが二つあった。一つ目は東京に外国人が４０万人以上住んでいること。二つ目はこの番組が長野県では放送されていなかったということだ。番組の冒頭と終わりにゴジラが出てきたが、その意味がよく分からなかった。セイン・カミュさんが縁に溝が掘られ、ぎざぎざのある十円玉“ギザ１０”を下町で探す企画は、興味深かったが、番組の趣旨・タイトルからは離れている気がした。最後まで番組を見て、東京は生活や食の安心・安全があり、かつ楽しい街であると外国人が思っていることを伝えたかったのだなと分かった。多くの外国人が日本人以上に東京を知り、文化に親しみ、東京を楽しんでいると感じた。最後にフランス人が制作した「ＯＮ　ＴＨＥ　ＣＩＴＩＥＳ’　ＲＯＯＦＴＯＰＳ」という番組の紹介があり、「東京はアジアの中でも特別な都市であり、秩序があり、穏やかで、気持ちのよい街」といったような表現をしていたが、われわれ日本人がもっと東京、日本のことを知り、誇りに思うべきだと思った。最初はタイトルと内容の差に違和感を覚えたが、最後まで見て番組のメッセージが理解できた。

（ＮＨＫ側）

ゴジラを使ったのは、昨年、映画がブームになっていたことと、その映画配給会社のスタジオにあるゴジラの像が外国人に人気で、よく記念撮影をしているそうで、今の東京の新しいシンボルとも言えると思い、挑戦した。

長野県では、金曜午後７時半からの本放送の時間は、県内向けに別番組を放送していた。翌日土曜の午前１０時５分からの再放送の時間については、長野県でもこの「金曜ｅｙｅ」の放送があった。

○　全体的に楽しく見た。取材量が圧倒的で、多くの時間撮影したものを編集しているのだろうと思った。“ギザ１０”という題材を通し、下町らしいアーケードの商店街を紹介していておもしろかった。ただ、昔ながらの商店街が観光資源になるのか、外国人におもしろく見てもらえるのかという視点が抜けていると思った。カヤックで日本橋川を行く映像も興味深かった。普段はあの角度から橋を見ることはまずないので、楽しく見た。７３分という放送時間にいろいろな情報が詰め込んであるので、散漫な印象を受けた。食べ物に絞るのか、あるいはほかの何かにテーマを絞ったうえで多面的に見せたほうが集中して見られたと思う。いろいろな形でシーンが切り替わっていたが、民放ではＣＭの前後でうまく切り替えている。その点、ＮＨＫは途中でテレビの前を離れづらいところがある。途中でトイレに行って分からなくなることがあった。

（ＮＨＫ側）

視聴者からも、「途中で話がどんどん切り替わるので見づらい」という意見をいただいた。制作側としては、飽きずに見ていただけるよう、あえてそうしたところもある。７３分、最初から最後まで番組に付き合っていただける視聴者ばかりではない。番組の途中から見始めても楽しめるよう、ＶＴＲを１４本に分けるというチャレンジをした。また、番組のコンセプトとして、食事、住居、カルチャーなど、東京のごった煮の雰囲気を出したいと思っており、ごちゃ混ぜの雑誌のような内容にしようということは最初から決めていた。ただ、委員からの指摘を受けて、もう少しまとまりを持たせたほうがよかったかと反省する点もある。

○　日本人も気がつかない、知らない東京の魅力を外国人が紹介してくれる企画は、理屈抜きでおもしろい。私はいろいろな情報のあるほうが飽きずに見られるので好きだ。浅草の民謡酒場や、高円寺の昭和グッズを売っているリサイクルショップなど、「行ってみたい」という場所がたくさんあり、私にとって有益な情報ばかりだった。“ギザ１０”については東京に特化し探すものではないので、下町で１０円玉を探すというコーナーは企画の趣旨とは合ってないと思い、違和感があった。カヤックの企画は、高速道路が頭上にあることで、景色が美しいとは思えず、自分もやってみたいとは思えなかった。後半にもカヤックが出てきて「またカヤックか」と、中だるみの印象を受けた。東京の歴史が分かる解説は興味深かったが、カヤックからの景色は残念なところがあった。全体としては、ＮＨＫならではの取材力でいろいろな情報を盛り込んでおり、それをおもしろく見せるという企画力も含め、よかった。

○　日本人が知らない東京を紹介する企画としては、大成功ではないか。たくさんの東京の地名が出てきたが、そこにわれわれの知らない東京があった。なぜ東京の町は外国人を引き付けるのか、ということについて、外国人から話をうまく引き出していた。日本のレトロな文化を魅力的に感じるという外国人がいたが、そうした時間のずれや、現代の日本語で翻訳できない文化に魅力を感じているのだろうか。日本人にとってはそれほどでもないことが、外国人の目を通すと違って見えることがたくさんあるというのは、よく分かった。カヤックのツアーは知らなかったので驚いた。外国人がカヤックに乗って、隅田川、日本橋川を巡り、東京を楽しんでいるというのは新しい発見だった。現代において隠されている、あるいは消えているように見える日本人の伝統や文化を、外国人が見つけているのかもしれないと思った。東京の下町の雰囲気やコミュニティーに外国人が引かれるという点については、もっと掘り下げてほしかった。

○　テーマのとおり、私も知らない東京が紹介されており、行ってみたいと思いながら見た。中でも、焼きショーロンポーや、民謡酒場については、思わずメモをとった。日本橋川を行くカヤックも、爽快で乗ってみたいと思った。いつもと違う目の高さから、ふだん見ている景色を見ることは、新しい観光の売りものの一つになると改めて思った。そのほか、ハラルラーメンも、ハリネズミカフェも、ロリータファッションも、知らない世界ばかりで、さすが東京だと思った。その一つ一つを外国人が紹介するという企画はとてもよいと思った。ただ、放送時間が長く、途中で早く終わらないかと思ってしまった。掘り下げることのない情報ならば、もっと短い時間でコンパクトに取り上げたほうよいのではないか。

○　日本人は、外からの目を気にするというか、外国人がよいと言ってくれるとうれしくなるところがあると思う。また二言目には「東京オリンピック・パラリンピックに向けて」ということが増えている。そうした番組が作られることは、悪いことではない。ハラルについては、知識としては知っていても、実際にハラルメニューに対応している飲食店の取り組みを、気楽に見ながら実感をもって知ることができた。食事は国際化のうえで重要な要素であり、そうしたことを堅苦しくなく伝えたことはよかったと思う。カヤックの企画は、途中で分断せずコンパクトにまとめて見せたほうがよいと思った。重要なのは、視点を変えるということだ。江戸はそもそも川の文化だったはずで、そのことがカヤックを通じて浮かび上がっていた。視点を変えることで都市が違って見えるというおもしろさがあって、よかった。日本には自分たちが思っている以上におもしろいところがあり、古いものもおもしろいし、高速道路の下の川についてもおもしろい。そういう発見を提供する番組を作っていってほしい。

○　いろいろな見方ができる番組だと思う。民謡酒場で出演者の吉木りささんが民謡を歌っていたが、昨今の地方では、その場所に伝わる伝統芸能や文化の伝承者、継承者が減り、次第に消えていくという憂き目に遭っている。その中で、吉木さんが過去に民謡を習っていたという話があった。自分たちが生まれ育った場所に対する知識、教育をしっかり考えるべきだというメッセージがあれば、よりインパクトがあったと思う。カヤックの企画に関して、江戸は運河の街だが、今の若い世代は運河の街という認識が全くない。そういう意味で、運河の街だったという痕跡や歴史をもっと見せるなど、さらに掘り下げてほしいと思った。いずれにせよ、自分たちが生まれ育った故郷のことをしっかり学ぼうというメッセージを強く伝えてもよかったのではないかと思う。ハラル料理についての紹介の部分では、国、文化、宗教を超え、共有できる価値観は何かということをもっと強調するとよかった。衣食住は、時代や社会環境でうわべの部分は変わるかもしれないが、根本にあるものは変わらない。それが家族・故郷への思いや絆を生み出すもとであり、そうした視点でほろっとさせるシーンをつないで一貫したテーマにすればよかったのではないか。編集自体はよく、短編集のような形で、途中から見た視聴者も楽しめただろう。

（ＮＨＫ側）

放送後、視聴者からの反響、ＳＮＳでの投稿などつぶさに目を通しているが、委員の皆さんからまた別の新しい切り口の意見もいただくことができた。７３分という長い放送時間の番組だが、楽しんで見てもらえるよう工夫を重ねていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　１２月３１日(土)の第６７回ＮＨＫ紅白歌合戦「夢を歌おう」を見た。紅白歌合戦は、年に一度、みんなが楽しみにしている番組だ。力の入った衣装、普段では見られないコラボレーション、ステージセット、舞台演出があり、「今年も見てよかった。また来年も見よう」という気持ちにつながっている。そうした部分を大事にしてほしい。最近は視聴者参加を志向したり、被災地の復興というテーマも盛り込むなど、たいへんな番組づくりだと思う。そんな中、今回の「第６７回ＮＨＫ紅白歌合戦」でいうと、スペシャルゲストのタモリさんとマツコ・デラックスさんの起用は、もっと紅白歌合戦ならではの切り口があるとよかった。紅白歌合戦に特化した演出がないと、来年も見ようという気が薄れてしまう。また、審査には違和感があった。審査をする以上は、審査規定がこうなっていると丁寧にしておくべきだったと思う。そうすれば視聴者審査や会場審査と結果が違っても、視聴者が納得できたのではないか。

（ＮＨＫ側）

紅白歌合戦の審査については、多くの視聴者から同様の意見をいただいている。次回はもっと納得いただけるような説明をしたい。タモリさんとマツコ・デラックスさんはとても人気があるが、お二人が共演するのは今回の紅白が初めてだった。そういう意味では特別感があったと思っている。ただ、演出の意図が分かりにくかったという意見もあるので、反省すべき点は反省し、次回に生かしていく。

○　「第６７回ＮＨＫ紅白歌合戦」は、家族で視聴者審査に参加した。真剣に番組を見て、真剣に審査をし、結果を楽しみにしていた。「白組が優勝」だと思っていたし、視聴者、会場の審査でも圧倒的に白組が多かったが、最終的に紅組が優勝した。視聴者投票であれほどの大差があったのにもかかわらず、それが軽んじられているようで腹が立った。視聴者が一生懸命審査したところで最後はゲスト審査員の投票で結果が決まるのであれば、そんなことをする必要があるのかと思う。また、スペシャルゲストのタモリさんとマツコ・デラックスさんの観覧席が最後まで空いたまま、という演出については、観覧応募が外れた多くの一般視聴者の心情に配慮しておらず、不快感を覚えた。昨年の番組審議会でも意見が出たことだが、歌で競うと

いう緊張感、ワクワク感もない展開で、今回も相変わらず歌手とバックにいる人のどちらが主役か分からないような演出だった。昨今はバックダンサーにアイドルグループや有名人を起用するので、視聴者はどちらも見たいとなり、カメラワークもどちらが主役なのかよく分からないようになる。歌手に対するＮＨＫの姿勢は本当にそれでよいのかと憤りを感じる。今回、私が物心ついてから最悪の紅白歌合戦だったと思う。改善点としては、審査方法を事前に丁寧に説明し、視聴者が納得できるような配点のあり方を検討してほしい。また、歌合戦である限りは審査に余裕を持った時間配分にするべきだ。そして、あくまでも主役は歌手であることを貫いた演出をしてもらいたい。紅白歌合戦の演出を任された担当者は、特別なエリート意識というか、奇抜で、いきすぎた演出をする傾向にあるのではないかと思ってしまう。これまで番組審議会で紅白歌合戦についてそのつどいろいろな意見が出てきたが、どれほど反映されているのかと思う。

（ＮＨＫ側）

いろいろと厳しい意見を頂いた。今回の紅白歌合戦では「採点方法がよく分からなかった」「印象としても白組が勝っているのになぜ紅組が勝ったのか」というような意見がＳＮＳでも氾濫した。放送後の電話対応もほとんどが審査についてだった。それは反省すべきことだ。会場のゲスト審査員が投票したのは紅組が多かったが、そこがよく映っていなかったので「なぜ紅組が優勝なのか」という違和感につながったのではないかとも思う。採点方法も、視聴者投票との重みの違いなどきちんと明示すべきだったと反省している。タモリさんとマツコ・デラックスさんの観覧席が空いていた件は、本当に座るのか座らないのか、という演出で、不快感を与えたとしたら真摯（しんし）に反省する。歌よりも後ろの踊りが目立つのではないかという指摘については、演出のあり方を考えなければいけないと思う。原点は歌の力、歌をきちんと見せることなので、ショーアップが過ぎているのではないかという指摘は心に響いており、反省会でも次回は演出をもう一度しっかりしようという話が出ている。エリート意識、おごりはないと信じている。意見が反映されていないということであれば、反省する。

○　１２月２４日(土)のＮＨＫスペシャル　私たちのこれから「＃長時間労働」を見た。昨今の長時間労働における問題を、各分野の方々からの話を交え、考えていく

番組だった。長時間労働に対するアンサーとしての番組としては納得できないものだった。アメリカやヨーロッパの国と比較対照したうえで提案しているが、日本はそうした国に本当になりたいのかと思った。全体的に見れば日本もすばらしい点があるので、長時間労働の一点だけを切り取ってアメリカやヨーロッパの例と比較しても、納得させるのは難しいと思う。顧客の無理なオーダーに断る勇気を持つ、というテーマについても、業態やその企業が置かれている状況によって事情は異なるので、業種の異なる２つの企業の比較対照は無理があった。この番組だけの話ではなく、全体の風潮として、一律漠然と長時間労働はいけないという議論で進んでいるが、本当にそれでよいのかと疑問を持っている。長時間労働が従事者にとって将来的なメリットにつながる仕事もあるのではないかと思う。番組内では大学の先生が「長時間労働はもはや命の問題である」と言っていたが、テクノロジーの発達で人が職を失い、尊厳を失うことによるストレス死を考えた場合、そのような短絡的な説明で国民に道を提案してよいのかと思った。繊細で難しい問題だと思うが、もっと深く掘り下げた番組を制作してほしい。ゲストの壇蜜さんが最後に言った「張り合いと折り合い」ということばは、すべてを凝縮したすばらしい表現だと思った。

（ＮＨＫ側）

長時間労働への対策は、その国の社会背景、その企業の規模や業種によってさまざまなケースがあり、一様には言えないということは委員の言うとおりだ。ただ、長時間労働は、これまでも長い間、日本社会の問題とされてきた。この番組では、この問題を解決できなかった壁は何なのかという部分を明らかにしたかった。日本では「お客さまは神さまで、お客さまの要望には応えなければいけない」という考えが根強く、そこで議論がいつも止まってしまう。そんな中、あえて違う道を進み、成果を上げているところはないかということで、今回の例を取り上げた。長時間労働についてはいろいろな考え方や議論があるが、「命よりも大切な仕事はあるのか」という問いかけにもあるように、このまま放置してはいけないという風潮は確かにあると思う。そうした問題意識で番組を制作した。議論があることは重々承知しているし、視聴者からも委員と同様の意見もいただいており、引き続き考えていく。

○　最近、長時間労働に関する番組が多いと感じる。長時間労働がよいか悪いかでい

えば、よくないと私も認識している。ただ、ＮＨＫの番組は世論を形成する影響力もあるので、立て続けにそうした番組が続くと、さすがにどうなのかとも思う。専門性の高い職業では、多くの労働時間を費やしているのが日常だ。もっと技術をつけたいという人はどうなるのかという視点もある。世間では少数派の意見かもしれないが、もっと多面的な形で扱ったほうがよいのではないか。

（ＮＨＫ側）　長時間労働は大きな社会問題になっており、きょう召集された通常国会でも議論が出てくる。日本全体の問題として長時間労働の削減が言われている中で、長時間労働に関する番組が多くなっている。過剰な労働による過労死、過労自殺、また生活と労働のバランスが崩れ心身に障害を来すことなどは、あってはいけないと思う。日本は外国と比べると長時間労働が多いといわれているので、できるだけ削減し、ワーク・ライフ・バランスを実現しようという方向性は重要なことだと思う。一方で、長時間労働がただちに悪なのかということについては、いろいろな意見があるだろうと思う。専門職では一定期間集中し、長時間熱中して取り組むことで初めて得られる技量、見識があることは間違いないと思う。過剰な長時間労働はなくさなくてはいけないが、一方ではそういう面もあることをきちんと取り上げることも大切だろうと思う。バランスを欠かない放送が重要だ。バランスの取れた、多角的な視点で伝える放送を心がけたい。

○　１月１４日(土)のＮＨＫスペシャル　ＭＥＧＡ　ＣＲＩＳＩＳ　巨大危機～脅威と闘う者たち～第３集「ウイルス“大感染時代”～忍び寄るパンデミック～」を見た。われわれは恐ろしい状況の中におかれていることをひしひしと感じた。鳥インフルエンザで何万羽と鳥を殺しているが、大変な危機であると思う。

○　１月１５日(日)のＮＨＫスペシャル「森の王者　ツキノワグマ～母と子の知られざる物語～」を見た。実験的な番組だと思った。右上に細かく章立てのテロップがあった。「食べもの探しは命がけ」など、番組の筋立てに合わせてコンパクトに表示していた。動物カメラマンの横田博さんが熊を追い続けた記録をもとにした番組で、とてもおもしろかった。読書をしているような感覚で番組を見ていた。

○　１２月２１日(水)の「ココがズレてる健常者～障害者１００人がモノ申す～」(総合 後 10:30～11:15)を見た。われわれ健常者は障害者のことをあまりに知らない

で、健常者の目からいつも見ていることが分かり、ショックだった。障害者から見た健常者の状況を見ることはおもしろかった。

○　「ココがズレてる健常者～障害者１００人がモノ申す～」は、衝撃的だった。障害者 100 人が一堂に会した映像だけでも、テレビが世論をつくることの入り口に到達したのだと感動した。障害者が主役であり、自由に意見を言っていた。発声が大変な方もいるので収録は苦労が多いのではと思った。番組で取り上げたようなことが普通のことになるよう、続けていってほしい。障害のある方も、ない方も、自分の立場で、自分の意見で、自分の判断を発信できるようにすることは重要なことだと思う。

○　１２月２７日(火)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」で高齢ドライバーの免許返納についての特集があった。最近は高齢ドライバーの事故が多発し、頻繁にそのニュースを耳にした。免許の返納を呼びかけているが、実際には平成２６年時点で７５歳以上のドライバーは 447 万人おり、去年１年間の返納率は２．８％に過ぎないということだった。運転にはまだ自信がある、車がなければ生活ができないという理由だった。番組では、そういう人たちに納得して返納してもらうための取り組みを取り上げていた。教習所でドライブレコーダー搭載車を運転してもらい、いかに運転技能がつたなくなっているか自覚してもらうという愛知県岡崎市の例や、バス路線を大幅に拡充させ病院や港などへの足を確保している香川県小豆島の例、バスがない地域の対策として、地元の人が運転する車を運行させている岐阜県恵那市の例などを紹介していた。それぞれの土地の題材をうまくまとめ上げ、疑問点にそれぞれ的確に答えており、見事な特集だった。さすが「報道のＮＨＫ」だと思った。

○　１月２日(月)にブラタモリ×鶴瓶の家族に乾杯　初詣スペシャル「成田山新勝寺」(総合 後 7:30～8:43)を見た。どちらもすてきな番組どうしのコラボで、成田山新勝寺にも興味があったので見た。コラボすることでそれぞれのよさが見えた部分もあったが、逆にマイナスに映ってしまう部分も見えた。よいことを単純に二つ足してもプラスになるわけではないと思った。それは紅白歌合戦でのタモリさんとマツコ・デラックスさんの起用でも感じた点だ。

（ＮＨＫ側）

「ブラタモリ」と「鶴瓶の家族に乾杯」のコラボスペシャルについては、ただ二つの番組をくっつければよいものではないというのはおっしゃるとおりだ。大事なのは演出だと思う。どういう切り口で視聴者を引き付けるのか、引き続き研

究し工夫していく。

○　１月３日(火)「究極ガイドＴＶ　２時間でまわるルーブル美術館」(総合 前8:15～10:14)を見た。本来は２時間でまわれるような美術館ではないが、ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、ラファエロのつながりを分かりやすく説明し、「モナリザ」「ミロのヴィーナス」「サモトラケのニケ」をはじめ、多くのすばらしい美術品をタイトルどおり２時間で見せてくれた。ナレーションのお笑いタレントの方は、淡々とした感情のない独特な話し方だったので、ルーブル美術館の芸術に興味がないのかという感じすら受けた。偉大な芸術作品の感動が視聴者に伝わらないのではないかとも思った。一方で、相方のもう１人の出演者は、ルーブル美術館のすばらしさを伝えようとしていた。終盤では番組の内容よりも２人のやりとりのほうが気になってしまい、そのあたりが残念だった。

○　１月７日(土)と１４日(土)の深夜に放送した「着信御礼！ケータイ大喜利」を見た。その中で、人工知能と大喜利対決に挑戦するというおもしろい試みがあった。人間とは違った発想の切り口の回答が出て、興味深かった。司会の今田耕司さん、回答を選択する千原ジュニアさん、審査委員長の板尾創路さんの３人のキャスティングは成功していると思う。特に審査委員長の板尾さんがしゅん巡しながらも的確に審査を下すのが見事で、いつも納得している。板尾さんの審査がポイントになっている気がする。人工知能もますます進化すると思うが、今後どのようになるのか楽しみだ。どのぐらいの投稿があるのかをグラフで出したりすれば、どのお題がどれだけ反響があるのか分かってよいと思う。

（ＮＨＫ側）

投稿数は公表しておらず、回によって幅がある。１月１４日(土)の放送については、スペシャルで放送時間が拡大したこともあり、いつもよりかなり多くの投稿をいただいた。

○　１月１４日(土)のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会「１２月の審議から」(総合 前 11:23～11:25 関東甲信越ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。番組審議会で何が語られていたかを報告する趣旨の番組だが、「放送番組一般について」で意見が出た番組を、どのような基準で選んでいるのか。１２月の番組審議会で私の印象に残っていたことと違う報告内容だった。

（ＮＨＫ側）

複数の委員から意見が出たものかどうか、また関東甲信越

地方放送番組審議会ならではの意見が出たかどうかで、そのつど判断している。「ＮＨＫ中央放送番組審議会」の公表番組も別の日時に放送しているので、中央でも似たような意見が出ていた場合は、重複を避け、関東甲信越ならではの意見により比重を置き、紹介することもある。短い放送時間なので、番組審議会での印象と若干の違いが出ることも、場合によってはあるかと思う。

○　１月１４日(土)から１５日(日)にかけての大雪報道について申し上げたい。確かに雪は降ったが、私が住んでいるところは報道で騒がれているほどの雪ではなかった。年に１、２回あるような程度だ。今回の大雪ではＬ字放送もやっていた。Ｌ字画面は、災害があったときに出てくるイメージがあるが、いろいろな人から「大雪は大丈夫か」と言われた。私の住んでいる土地は雪が降るのが当たり前だ。除雪もしっかりされているし、新幹線も動いており、普通の生活をしていたが、あたかも災害があったかのような報道だった。風評被害に近い状態で、知り合いの旅館業ではかなりキャンセルが出たそうだ。ふだんあまり雪が降らない地域では、交通まひなど、大雪に警戒する報道は必要だと思う。だが、今回の報道は正解だったのだろうか。どちらかというと、これだけの雪が降っているのになぜ交通が止まらないのか、という視点で、正確かつ素早い除雪の技術や、雪が積もらないよう縦に薄い信号機といった、大雪に備えた社会インフラについても報道してもらいたい。全国の皆さんにこの地域の知恵を知ってもらえたらと感じた。

（ＮＨＫ側）

大雪の報道については、全国放送、ブロック放送、そして県域放送があり、どの範囲でどの程度報道するか、その判断が難しい部分だ。基本的には、その地域を最も知っている地域放送局が、その地域に必要な放送をすることを重視している。Ｌ字放送は災害報道のイメージがあるという話もあったが、新幹線は通常どおり運行している、というような交通情報、安心情報も出している。そうしたことも含め、どの地域でどれだけの分量を放送するかはとても難しい。頂いたご意見を踏まえつつ、これからも状況に応じ適切に判断していきたい。また、大雪に備えた雪国ならではの知恵、ほかの地域でも参考になる社会インフラのあり方など、災害に強い地域の秘密も取材し、伝えていきたい。

○　１２月２４日(土)、ＥＴＶ特集「今よみがえるアイヌの言霊　１００枚のレコードに込められた思い～」の再放送を見た。戦後すぐの昭和２２年、ＮＨＫがアイヌの歌声、語りをレコードに収録しており、それが見つかったという。アイヌの最後の語り部のような方たちの声だ。古いレコードなので傷んでしまっていたが、現在の技術で復活させていた。当時のアイヌの声は文化そのもので、アイヌの人たちが昔からおかれてきた状況を知ることができた。ＮＨＫはこれまでさまざまな技術を開発し、文化的な資料を保存してきたが、それが活用されているよい例だと思った。消えてしまうもの、無形の文化財を保存しておくことは後世への遺産になると思う。メディアがどんどん変わる時代にそうした過去の資産を保存していくのは大変な面もあるかと思うが、ＮＨＫだからこそ次に伝えられることもあるだろう。文化的に重要な仕事であり、この番組を見て改めてそれを実感した。こうした仕事は地味な作業かもしれないが、続けてもらいたい。

○　１２月２８日(水)、Ｅテレで放送していた、ねほりんぱほりん「あなたは私たちから産まれた子じゃない」を見た。おもしろい番組だが、モグラの人形役の女性の声が独特で、会話が聞こえづらい。もっと工夫できないかと思う。

○　Ｅテレの子ども番組を見ることは近年なかったが、年末年始に、ながら視聴でいくつか見た。とてもリズミカルで、イメージとは全く違っていた。１分、５分というような短い時間に、子どもが大人になるために持っていてほしい教養を見せてくれている。昔は子どもにテレビを見るなと言っていたが、むしろ見てほしいと言いたくなるような内容だった。昔からそうだったのか、昨今、力を入れているのか、聞いてみたい。知り合いの母親たちもみんな見ているそうだ。色彩の感覚を身につけるのにはあの番組がよい、クラシックを聴かせるにはあの番組がよいなど、さまざまな形で利用されていることを聞いてうれしくなった。それだけよいものだとしたら、もっとほかの教育機関と連携し、授業のメニューとしてもっとＰＲしてもよいのではないかと思う。そのぐらい衝撃を受けた。

（ＮＨＫ側）

学校放送というと、昔は放送に合わせ教室のテレビで見ていただいていたが、今はデジタル展開を積極的に進めており、「ＮＨＫ　ｆｏｒ　Ｓｃｈｏｏｌ」というサイト、アプリにもコンテンツを掲載している。先生方に積極的に活用いただいており、今後も力を入れていく。

○　１月１１日(水)、ＢＳ１スペシャル「欲望の資本主義２０１７　ルールが変わる

時」（ＢＳ１　後 8:00～9:49 〈後 8:50～9:00 ニュース中断〉）の再放送を見た。１０の項目に分け、世界の経済学者、有識者がこれから起こりうる事象を予見していた。資本主義の現状の説明から始まったが、とても分かりやすく、多角的な視点で捉えられていた。興味深く、食い入るように見た。各項目に分けたことにより、事象の問題点が鮮明になり、深く掘り下げられ、飽きることなく、克明に伝えられていた。やくしまるえつこさんのナレーションが、切実さとともに奇妙な親近感をもたらし、相乗効果を高めていたように感じる。この番組は 110 分ほどだったが、あっという間に感じた。番組の内容、重要なキーワードについては頭にしっかりと入り、残っている。これからもこのような番組を放送していってほしい。

○　１月１８日(水)のＢＳプレミアム、山口発地域ドラマ「朗読屋」はおもしろかった。中原中也の詩を軸に、離婚した男の心境と再生を描いた物語だった。中也の「サーカス」「汚れちまった悲しみに」「骨」などの詩を朗読し、中也がうたった場所で撮影していた。朗読は、吉岡秀隆さんの個性がよく出ていた。女優の市原悦子さんの演技も光っていた。そして、こういうドラマが地方で制作できることに驚いた。地方でドラマを撮るのはお金がかかるかもしれないが、このドラマの視点はすばらしい。地域のにおいがして、大成功だったと思う。感激した。

○　年末年始は多くのＮＨＫの番組を見た。どれもＮＨＫならではのすばらしさを感じた。ＮＨＫの性質上、やむをえないと思うが、ＣＭがないので、番組の途中で席を立ったり休んだりするタイミングがなかった。個人的には、長時間番組においては途中で短い番組宣伝などの時間を設けてもよいのではと思う。新聞の投書で最近のＮＨＫは番組宣伝が多すぎるという意見もあり、賛否両論あると思うが、そのあたりのことを聞かせてほしい。

（ＮＨＫ側）

番組の中で、ある種の緩急を効果的につけることは、制作者に必要な技量だと思う。長時間番組を放送する際には、疲れず、飽きずについ見続けてしまうような演出の工夫ができればよい。番組宣伝のスポットＰＲは、今年度に入ってから、前年度に比べ３分の２程度に減らしている。今はインターネットはじめさまざまな形で番組情報に接していただける機会が増えているためだ。スポットＰＲは、番組の存在を知っていただく大事な機会なので、うるさくならず、よい情報だと思っていただけるように、伝え方も含めて工夫していきたい。番組宣伝と、長時間番組の中でのインターミッションに

ついては、それぞれ分けて考えていきたいと思う。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２８年１２月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

１２月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、１６日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、８人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、千葉放送局の取り組みと今後の予定について報告があった。その後、小さな旅「僕らの波　夢のせて～千葉県　一宮町～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　髙野孫左ヱ門（(株)吉字屋本店代表取締役社長）
副委員長　伊藤由貴子（神奈川県立音楽堂館長・プロデューサー）
委　員　岩佐　十良（(株)自遊人代表取締役）
大山　寛（サンファーム・オオヤマ(有)取締役会長）
国崎　信江（(株)危機管理教育研究所代表）
野老真理子（大里綜合管理（株）代表取締役）
古澤　宏司（(有)古沢園代表取締役）
山口　晃平（(株)山口楼 専務取締役）

（主な発言）

＜小さな旅「僕らの波　夢のせて～千葉県　一宮町～」
（総合　１０月１６日(日)放送）について＞

○　九十九里浜は全長約６６ｋｍあり、一宮はその南側に位置している。今回の番組は、空からの海岸線、跳ね返る波、サーファー一人一人の姿など、この海のすてきさを再認識できるものだった。問題も多いといわれているドローンだが、ドローンを生かした映像が美しく、その威力を改めて感じた。また、早回しの映像により、時間帯によって海に訪れる人が違うことをうまく表現していた。人、町、仕事、地方再生という観点から番組を見た。一宮町の波のすごさに気づき移住してきたサーファーの市東剛さんが中心となり、２０年近くかけた地道な活動で、「一宮にサーファーあり」とい

う地域を作り上げた。これは一宮町の地方再生そのものだ。地方再生のために税金を使わず、自分たちでできることをやり続け、最終的に東京オリンピックのサーフィン会場になった。一宮町をそういう観点から映像化したことをとてもうれしく感じる。子どもたちの生きる力という視点も優れていた。番組に出てくる子どもたちは、海という大自然の偉大な力、本物の大人のサーファーたちに接することでそれぞれが切磋琢磨（せっさたくま）し、努力することの楽しさ・大切さを理解し、今の若者に欠けている真の生きる力を身につけていると感じた。そのことは周りの生徒にもよい影響を与え、学校運営にもプラスになっていると思う。「小さな旅」の魅力の一つである「行ってみたい場所」という視点だけでなく、「地方の再生」や「子どもたちの生きる力」という、今問われている課題を解決するための事例としても見ることができた。すてきな番組だと思った。

○　「小さな旅」はテーマ音楽が心地よく、自然と番組に入っていくことができると毎回感じる。今回は千葉県一宮町だった。県外の人はその地域の風土に関して気づかない部分があるが、そこに暮らす地元の人たちの活動がよく伝わった。特に子どもたちはまるで海が庭のような感覚でサーフィンをし、将来はプロサーファーを目指すという。サーフィンと学業両立の誓約書を子どもが自主的に書いたシーンや、サーフィンを通じ子どもの成長が見られたという母親などの紹介もあった。子どもが地域の特徴を生かした目標に向かい、切磋琢磨していることが分かった。また、一宮町に移住してきた人たちが、地域の人たちとコミュニケーションをし、地域になじんでいく様子を、移住者の立場からいろいろと表現していた。移住したときに苦労があるという話はよく聞くが、穏やかな雰囲気でうまく表現できていたと感じた。ドローンを生かした撮影は臨場感があった。なかなか目にしない映像だった。サーファーが波に乗っている様子、砂浜、内陸の田畑と連続で出てきて、鳥にでもなったかのようだった。「小さな旅」は見ていていつも心穏やかになる番組だと思う。発信されにくい地域もうまく取り上げており、ＮＨＫらしい、持続性のある番組として評価したい。

○　「小さな旅」は肩に力を入れず、穏やかに見られる番組で、日曜日の朝にちょうどよい空気感の番組だと思う。そういう雰囲気を支えていることの一つに、映像へのこだわりが挙げられると思う。この場所はこのように撮りたいというこだわりを、いつも感じさせてくれる。今回では、冒頭、逆光の中、海に向かっていく２人のサーファーのシルエットや、夜明けの海に集まる人々を表現した早回しなどがよかった。一宮の海がサーフィンに向いているのは、波が長く続くからだが、それをドローンで上から追いかけていたのも分かりやすい映像だったと思う。また、地域の人間の生きざまのようなものもうまくちりばめ、上手に構成していた。３年前に一宮町に移住し、農業を営んでいる間地真さんが、「方言が自然に出るようにしたい」と言ったところは、

短いことばでもその人の感情が分かるよいシーンだった。地元レストランで主催しているサーフィン大会を２０年も続けているというのは大変なことだと思う。そこに地域の人がいろいろと差し入れなどをしてくれるところも心が温まる感じで、暮らしぶりが伝わるよいシーンだった。海とともに生活している人たちのことが羨ましくも感じた。一宮町は、東京オリンピックのサーフィン会場に選ばれるような価値ある海を中心に、うまく町づくりを進めている印象を受けた。登場した方たちの顔には、はつらつとした感じが漂っていて、とてもよい印象で見ることができた。

○　「小さな旅」は日本全国の個性と時代のすそ野も切り取る番組で、楽しく見ている。地方に正面から向き合っているＮＨＫの取材力も含め、バランスのとれた番組だといつも思っている。これからもこのような番組を制作していってほしい。

○　多くのサーファーが高波の荒々しい海を愛し、そこに集う人との交流を大切にしている日常をうまく捉えていたと思う。一宮町が、世界に夢を持って生きる人たちを育て、集めていることも改めてすごいと感じた。ドローンを活用した映像は臨場感があり、まるで自分がサーファーになった感覚で見ることができた。ドローンを利活用した撮影は今後も増えると思うが、成果を積み重ねることで、撮影技術のさらなる高度化、発展が期待できると思った。地方の活性化の視点では、そこにある資源を強みにし、人が集まり、日本にとどまらず、世界を身近にしたという活動はすばらしいと思う。またそこで成長する子どもの生き生きとした姿を見せることで、人にも焦点を当て、一宮町の魅力を十分に伝えていたと思う。ただ、私は「小さな旅」を見ると旅に出かけたくなるが、そういう意味においては、今回は「小さな旅」の趣旨に合っていたのだろうか。サーフィンに関心を持っていない人でも、一宮町に行ってみたくなるような魅力をもう少し紹介してほしかった。

○　「小さな旅」に期待する静かなトーン、旅情を誘う映像・音楽は、今回もオープニングとエンディングにはあった。しかしその間の中身は、どちらかというとアクティブな要素や人間ドラマが多くを占め、そこにギャップを感じた。内容については、２５分ゆっくりとした気持ちで見ることができ、消化不良を起こさずに内容が入ってくる、よいテンポだった。サーファーという題材が「小さな旅」に合っていたのかどうかは気になったが、仕事とサーフィンとのワーク・ライフ・バランスの視点や、子どもたちが学校の勉学・サーフィンとうまく折り合いをつけている様子など、人の暮らしと自然が交じり合い、よいバランスで生活していることが全編から感じられた。

○　「小さな旅」は映像を駆使し、その土地の魅力を知らしめている。４Ｋなどの高度な技術についても、早いうちから「小さな旅」で使っていたような記憶がある。ド

ローンを活用した撮影も、そうした取り組みの一つかと思う。朝の放送なので中身を深く掘り下げるというよりも、きれいな映像を楽しむ気持ちで見ているが、今回も大変きれいでダイナミックな映像がよかった。そして、移住してきたサーファーがいかに地域のコミュニティーに入っていくか、というような現代的なテーマも盛り込まれていた。ただ、昔からずっと町に住んでいる人たちの紹介も、もっとあったらよいと思った。移住してから受け入れられるまでにいろいろなことがあったと思う。何があったのかを深く掘る必要はないが、結果としてサーフィンの大会に地元の人がどういう関わりをしているのかが、分からなかった。古くからの地元の人たちの顔がもっと見えると、移住者が時間をかけ、うまく土地に溶け込んでいることについて、もっと納得できた気がする。あとは、サーフィンの試合のルールが分からなかったので、少しでも番組で紹介すればもっと感情移入できた気がする。また、子どもたちはどうやってサーフィンを学んだのか、誰が指導しているのか、指導者も移住してきた人なのか、そういうことも分かるとよいと思った。いま挙げたような部分を押さえれば、たとえ名所、旧跡などが出てこなくても、「あの浜辺に立ってみたい」という旅心をくすぐることにつながり、より「小さな旅」らしい番組になったのではないかと思う。

○　新しい公共を市民セクターが担うという、千葉県の動きの先端を行っている事例だと思った。移住してきたネギ農家の方は、高齢化する地元の農家の方々にさまざまな教えを請い、年代の差を超えしっかりとコミュニケーションをとっていた。受け入れる側の地元の方々の対応も紹介していた。海岸清掃の紹介もあったが、行政では負担しきれない公益・公共に対して、市民がいかに取り組んでいくのかという、新しい公共のあり方、地方創生のあり方を考えさせる番組だったと思う。子どもたちが夢を持つこと、それを実現するために日々をどう重ねるのかということが、生きる力、地域を支える力につながるというメッセージも伝わるよい番組だった。

○　映像がとても美しく、２５分の間に一宮町の自然、そこに住む人々と海との関わりがリアルに描かれていた。山本哲也アナウンサーが自然体で番組に溶け込んでいて好感が持てた。日本全国で町おこし運動がされているが、地元の人々が世界を相手にサーフィンで挑んでいく若者を応援している姿に感動した。サーフィンに夢をかける兄弟と家族、友達との関係が爽やかだった。日光と海水の影響で茶髪になっている少年が学校でも自然に受け入れられている教育環境がすばらしく、その点も好印象の一つに感じられた。少年たちの顔が光り輝いて見えた。海、サーファーだけでなく、その土地に移住し農業をしている若者と地元農家の人々の取り上げ方もよかった。

（ＮＨＫ側）

こちらの意図が伝わっているようで、うれしく思う。一宮町

は東京オリンピックのサーフィンの競技会場に決まったが、これからも引き続き取材をし、さまざまなニュース企画、番組で取り上げることになるだろう。その第一歩、一つの区切りとして今回の番組を位置づけることもできると思う。地域活性化の視点も含め、引き続き番組を作っていく。さまざまな意見をいただきありがたく思う。

来年２月には、南関東３県が舞台になっている「小さな旅」を英語化し、国際放送のＮＨＫワールドＴＶで放送する予定だ。今回の「僕らの波　夢のせて～千葉県　一宮町～」も含まれている。「小さな旅」以外の番組も含め、「Ｏｎｅ　Ｓｔｅｐ　ｆｒｏｍ　Ｔｏｋｙｏ」というキャッチフレーズで、南関東３県の関連番組をＮＨＫワールドＴＶで集中編成する。地域の魅力、地域の動きなどを海外発信することで、インバウンドも含めた地域の活性化につながればという趣旨だ。

また、委員から「小さな旅」は映像で先駆的な取り組みをしているというご意見をいただいたが、今年度は４Ｋで５本、８Ｋで１本制作している。年末３０日には、今年４Ｋ・８Ｋで制作した「小さな旅」から、えりすぐりの映像を集めた「特集 小さな旅 ２０１６ 彩りの四季」を総合テレビで放送する予定だ。

＜放送番組一般について＞

○　１１月２７日(日)のＮＨＫスペシャル「追跡　パナマ文書　衝撃の“日本人７００人”」を見た。よく調べ、根気よく作ったと思う。どのぐらいの時間をかけて調べたのだろうか。

（ＮＨＫ側）

「パナマ文書」から流出したデータは膨大な数だ。最初に情報を受け取ったのはドイツの新聞社だが、そこだけでは分析しきれないということで、国際調査報道ジャーナリスト連合（ＩＣＩＪ）にデータが持ちこまれた。ＩＣＩＪは、会社・国を超えたジャーナリストが、国際的に協同し取材するためのネットワークだ。ＮＨＫがＩＣＩＪの「パナマ文書」のプロジェクトに参加したのは今年の６月だった。それまでは日本人のデータ

がどれほどあるのかもあまり分かっていなかった。ＮＨＫがプロジェクトに参加してから、日本人 700 人のファイルが判明し、その一人一人を取材することを始めた。

○　１１月２７日(日)のＮＨＫスペシャル「追跡　パナマ文書　衝撃の“日本人７００人”」は、各国の権力者の資産運用の実態を暴いたスクープだった。ＩＣＩＪのジャーナリストたちの鋭い切り込みとその詳細、パナマ文書報道の舞台裏を知ることができた。これぞＮＨＫスペシャルという番組だった。

○　１２月４日(日)のＮＨＫスペシャル「戦艦武蔵の最期～映像解析　知られざる“真実”～」はすばらしかった。新発見が次々とたたみかけるように出てきたので引き込まれた。戦艦武蔵は、あちこちに仕切りがあり、水が入ってきても絶対に沈むことはないということだったが、想定外の横からの攻撃に弱かったこと、４６センチ砲の火薬が大量に残ったまま沈没したので最終的に水中爆発してしまったことなど、迫力ある映像とともに解説していた。昭和１９年１０月２４日、実際に沈没した日の再現をＣＧで見せた部分も見応えがあった。当時の乗組員の証言、アメリカ軍側の証言も丁寧に取材しており、よい番組だと思った。

○　ＮＨＫスペシャル「戦艦武蔵の最期～映像解析　知られざる“真実”～」はすばらしかった。ＮＨＫらしい取材力で、よく証言者を見つけるなと思った。証言の一つ一つを見逃してはいけない、永久保存版の番組で、家族と一緒に見たい番組だと思った。

○　１２月４日(日)のＮＨＫスペシャル「戦艦武蔵の最期～映像解析　知られざる“真実”～」を見て、戦艦武蔵の全貌が分かってきた。世界最大の戦艦として建造されたが、大きさ、性能については厳重な軍事機密のため知られていなかった。フィリピン沖の海底で発見され、アメリカのプロジェクトチームにより戦艦武蔵の映像が初めて記録、公開された。そしてＮＨＫによる新資料の詳細な分析により、戦艦武蔵の実像とその最期を浮かび上がらせていた。生き残った元乗組員、軍事専門家のコメントは生々しく、何のために大きな犠牲を払ったのか、戦死した若者たちの無念の声が聞こえてきた。

○　１２月１２日(月)から４夜連続で放送したＮＨＫスペシャル「ドラマ　東京裁判」(総合 後 10:25～11:20 〈初回のみ後 10:25～11:25〉)はすばらしかった。法のもとに人は戦争を裁けるのかという重いテーマだった。東京裁判を２年半もやっていたことに驚いた。会話一つ一つが練られていて、重厚なよい番組だった。ドラマの後にはドキュメンタリーのパートがあり、それも丁寧に作られていた。海外の制作会社との国

際共同制作番組ということだが、この時代にこうしたテーマをきちんと押さえておくことはＮＨＫらしいし、とてもすばらしいと思う。ぜひ続けてもらいたい。

○　１１月２３日(水)のロスト北斎　Ｔｈｅ　Ｌｏｓｔ　Ｈｏｋｕｓａｉ「幻の巨大絵に挑む男たち」(総合 後 10:00～10:49)を見た。関東大震災で焼失してしまった北斎晩年の幻の傑作を、明治時代に撮影された白黒写真から最先端技術を駆使し修復・復元したプロジェクトの紹介だった。北斎の驚くべき秘密を明らかにしており、以前の伊藤若冲の特集番組にも劣らない、見応えのある番組だった。北斎の絵に狂う天才性を再認識させられた。

○　１２月１日(木)の「首都圏ネットワーク」内で、千葉放送局のリポート「“がんを教える”模索が続く教育現場では」を見た。がんは国民の２人に１人がかかり、３人に１人が亡くなるという国民の病気だが、がん教育について伝えていた。千葉放送局は総合テレビの県域の電波を持っていないが、広域の放送で取り上げられたことをうれしく思った。闘病体験者からの教え、身近な人ががんになった時、「あなたにしかできないことが必ずある」というメッセージは、生徒たちにきちんと伝わっていたように思えた。番組で紹介していた千葉県立松尾高等学校は、文部科学省の平成２７年度スーパーグローバルハイスクールの指定校だ。英語力だけでなく、高校時代から社会の課題に取り組むことで国際的に活躍できるすぐれたリーダーを世に輩出しようという、学校についての紹介もしてほしかった。

○　１２月２日（金）の金曜ｅｙｅ「あなたも知らない！ＴＯＫＹＯ発見旅」を見た。４０万人を超えるという東京で暮らす外国人が、日本人ですら忘れかけているような日本の文化に興味を持ち、深く入り込んでいるところをおもしろく取材していた。民謡を歌う外国人、イスラム教徒が食事できるようハラール食を提供するカラオケ店の紹介など、興味深かった。日本橋川、神田川、隅田川をカヤックで巡るツアーについても、普段と違う視点で東京を見られるので外国人から喜ばれる、という話もおもしろかった。高円寺、阿佐ヶ谷が大好きというチェコ人は、日本のレトロなものが好きで、ＳＰ盤をかける名曲喫茶へ行っていた。名曲喫茶はステレオが高価で買えなかったときにかつての日本人が楽しんだ場所だが、そういうことを外国人に改めて教えてもらって郷愁を感じるという、不思議な気持ちになった。７３分の番組なので少し長く感じられたが、目のつけどころはおもしろかった。今後も取材力を生かした番組を放送してほしい。

○　１２月６日(火)のクローズアップ現代＋「どう防ぐ？高齢者ドライバー事故徹底研究！」を見た。タイトルに「どう防ぐ？」とあったが、どう防げるのかという具体的

な可能性、考証は提示されていなかったのではないかと思う。どちらかというと、高齢ドライバーがどういう心境で事故を起こし、どうやって運転免許証の返納に至るかというプロセスが紹介されていたという印象だった。これから期待される自動運転技術、カーシェアリングの可能性などについて触れていなかったのは残念だった。また、悲惨な事故の被害者の視点が入っていなかったのも残念だった。高齢者の「自分は大丈夫」という自信が過信に変わり、事故につながるという整理をしていたが、事故がどういう悲劇を生み出しているのかを考えることも、高齢ドライバーの事故防止、対応を検討する材料になるはずだと思う。

○　最近は高齢者による交通事故が相次いで起きている。社会的な問題になっており、ほかの番組でも取り上げているが、ぜひ「週刊　ニュース深読み」でも取り上げてもらいたい。「週刊　ニュース深読み」は、話題になっていることをすぐに取り上げることが魅力の一つだと思う。

（ＮＨＫ側）

「週刊　ニュース深読み」は旬なニュースを分かりやすく、ということをモットーにしている。いただいた意見については制作現場に伝える。

○　１２月９日(金)の特報首都圏「企業と“軍事”～民生技術の活用　どうあるべきか～」を見た。戦争が起きると新しい技術が開発され、技術レベルが上がるという話はよく聞く。今回、民間で開発された技術が軍事で利用されているという番組の作りで、関心を持った。新しいことばで「デュアルユース」と言うそうだ。ものづくりの展示会等に海外の軍人たちが来て、日本の技術を調べ、自国で軍事目的に使えないかというような動きも出てきているという。世界平和のため、医療のために開発された民生技術が、知らない間に軍事で利用される動きが出てきているという紹介は、大きな時代の変化の中にあるという印象を受けた。企業だけでなく、若い研究者の基礎研究などについても、将来自分たちの想定を超えて、軍事・戦争に関わる兵器に変わることも示唆していた。ドローン、ロボットなどもそうだが、自分が開発したものが目的以外に利用されることを丁寧に取材していた。画面の下部では視聴者からの「開発はもろ刃の剣」、「軍事利用されることによって日本の新技術開発につながる」といったメッセージが紹介されていた。いろいろな考え方がある。実際に起こっていることを考えさせられた。今後も丁寧な取材でしっかりと伝えてもらいたい。

○　１２月９日(金)の茨城スペシャル「家族になるために」を見た。血縁のない子どもを実子と同じ扱いにする特別養子縁組について、茨城県土浦市のＮＰＯ法人の活動を

通じ、その実情をこまやかに伝えていた。子どもに実子ではないことを告知する「真実告知」の場面では、家族の苦悩、葛藤、子どもの表情も映し出され、見ている私が緊張を覚えるほどに克明に感情が伝わってきた。また「真実告知」について、家族間の交流・情報交換の場としてパーティーを開催するなど、当事者たちの負担を軽減する努力についても紹介しており、丁寧に取材していると思った。「生まれてきたこともうれしいけれど、いま幸せなのでうれしい」という子どもの発言を聞いて、込み上げるものがあった。この番組は水戸放送局の制作で、地方局でもすばらしい番組を作るということが分かり、感激した。これからさらなる少子化を迎える日本において、そのような環境に生まれた子どもを社会がきちんと育てることは、重要なことだと感じる。これから特別養子縁組という制度が普通のこととなればよいと思う。引き続きこまやかに丁寧に取材をし、家族の心の負担を少しでも軽減する一助になるような番組を制作してほしい。

○　「鶴瓶の家族に乾杯」をよく見る。鶴瓶さんの人柄が伝わる旅番組で、特におもしろいと感じるのが、シナリオのない行き当たりばったりの旅だということだ。鶴瓶さんとゲストが、地域のどんなところやどんな人に関心を持つのかが、見ていてとても楽しい。時にはぶっつけ本番ならではの、地域の人からの厳しい、率直な意見、態度もある。そういう何もかもを受け止める鶴瓶さんの心の広さ、温かさに感心している。

○　１０月２４日(月)の「鶴瓶の家族に乾杯」で南魚沼市が紹介され、うれしく思った。ＮＨＫでは地域を舞台にした番組をたくさん作っている。自治体によっては１０年に１回の機会かもしれない。そういう地域を草の根で取り上げてもらえるとありがたい。

○　「ニュースチェック１１」は「おやすみ前の新感覚ニュース」という位置づけで、その日にどんなニュースがあったのか、１日の出来事をまとめて知ることができる貴重な番組だ。堅苦しいニュースのイメージを覆す緩やかな進行、キャスター同士が仲よさそうに和気あいあいと語り合っているところが気に入っている。和やかな雰囲気の中で、ニュースに対し視聴者が質問をリクエストできることも新しい感覚だ。その質問に対しキャスターの本音がちらほらと出てくるのも身近に感じられ、好きだ。これからも期待している。

○　大河ドラマ「真田丸」がいよいよ最終回を迎える。１年間楽しく見た。最初は真田昌幸、途中は石田三成、豊臣秀吉、最後は真田幸村というように、主要人物をうまく推移させ、とても上手に作ったと思う。三谷幸喜さんの脚本はさすがで、とてもおもしろい娯楽番組だった。想像を超えるような演出が多くあった。１１月の放送では、

真田丸の物見やぐらの上から「あちらにも赤備えの兵がいる。井伊直孝の陣か。向こうにも、ここに至るまでの物語があるだろう。その話も一度聞いてみたい」というようなやりとりを入れ、来年の大河ドラマ「おんな城主　直虎」の告知までやってしまうという、遊び心満載のドラマだった。

○　ドラマ１０「コピーフェイス～消された私～」を楽しく見ている。現実味のないストーリーだが、それでもしらけることがなく、毎回程よいスリルがあり、キャストもすばらしく、引き込まれている。

○　ＢＳプレミアムでドラマを見ることが多い。最近はプレミアムドラマ「山女日記～女たちは頂を目指して～」をよく見ている。説教くさいせりふもあるが、工藤夕貴さんのハスキーな声が落ち着いて聞こえるのでよい。そして何といってもところどころに盛り込まれる山の風景は、さすがＮＨＫと思える映像で、山の独特の空気を感じ取ることができる。そうした映像に癒やされるのを目的に見ているところもある。

プレミアムよるドラマ「プリンセスメゾン」は、会話劇に近いような印象だ。メルヘンというか、独特の不思議な雰囲気が漂っている。しかも、あまり劇的なことは起こらず、静かに進んでいく。ＢＳプレミアムは、女性が主役のドラマを取りそろえているのがおもしろいと思う。

最近のＢＳプレミアムは、何かのテーマに合わせ、大型のドラマなどと、テーマに関連した番組を集中的に放送している傾向があると感じる。夏目漱石の没後 100 年の節目に、一連の関連編成が見られた。そうした番組群を一挙に集中して見るのはおもしろいと感じた。ただ、１２月１０日(土)に放送したスーパープレミアム「漱石悶々（もんもん）　夏目漱石最後の恋　京都祇園の二十九日間」（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 7:30～8:59)は、作り込みすぎていて分かりにくいドラマだったように思えた。

その前月１１月１９日(土)のスーパープレミアム「獄門島」（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 8:00～10:00)は、新しい金田一耕助像を提示したドラマということで、宣伝を多くやっていた。その関連番組で、１１月２４日(木)と２５日(金)に放送した「シリーズ横溝正史短編集　金田一耕助登場！」（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 11:15～11:44)はすごく怖く、昔のサイケ、演劇的な雰囲気があり、ドラマよりもそちらのほうがおもしろく感じた。あのドロドロとした時代的な感じをよく表していた。

○　１２月２日(金)にＥテレで放送した団塊スタイル「いつまでも“未完の自分”で～横尾忠則（８０）～」では、今年８０歳になり、現役画家として第一線で活躍している横尾忠則氏の仕事、生き方のスタイルを紹介していた。グラフィックデザイナーから画家に転身し、戦後の大衆社会の中で独自の創作活動を展開してきた横尾氏の生き方スタイルとは、自分のアイデンティティーを追求しない、目的は持たない、結果に

期待しないということだった。安保闘争の時代から横尾氏の作品は若者たちの風俗を象徴していた。その無欲さ、時代感覚が横尾氏のアートを生み出していることが分かった。

○　１２月３日(土)のＢＳ１スペシャル「ザ・リアル・ボイス“スラローバヤ”からロシアの本音が聞こえる」（ＢＳ１　後 7:00～8:49<ニュース中断あり>)を見た。前回はアメリカの大衆食堂“ダイナー”を舞台にしていたが、今回のロシア国民の声はさらに興味深く、楽しいものだった。大衆食堂に集う人々の姿を通じて、隣国でありながらも遠い国のような気がするロシアの日常を切り取っていた。プーチン大統領や北方領土などについて、市井の人々の生の声を聞くことができた。番組内の「リトルボイス」のコーナーは、その国の身近な問題点も浮き彫りにし、時にかわいらしく、時に辛辣（しんらつ）に、番組全体によいアクセント、リズムをもたらしていた。単発企画と思っていたが、次はどこの国の人々の声が聞けるのか期待している。

（ＮＨＫ側）

ＢＳ１スペシャル「ザ・リアル・ボイス」のシリーズの続編は検討している。来年１月には、トランプ大統領が誕生するタイミングで、再びアメリカを訪れる回を放送する予定だ。

○　オスプレイが不時着したという報道を見た。あの墜落を「不時着」と表現するのはどうか。発表はそうかもしれないが、ジャーナリズムは違うコメントではないかという気がした。「報道はＮＨＫ」という視聴者からの信頼を意識してもらいたいと思う。もう少し自信をもってやってもらいたい。

（ＮＨＫ側）

報道全体についての励ましのことばと受け止めた。伝えるべきことをきちんと果敢に伝えるという姿勢は変わりがなく、これからもそういう姿勢で報道していく。オスプレイが不時着なのか、墜落なのかについては難しい部分だ。ＮＨＫだけで判断するものではない。沖縄県の副知事が防衛省の副大臣と会談し、あの状態は不時着でなく、墜落ではないかというようなことを指摘していた。それを受けて防衛副大臣は、制御した上であの場所に落ちたので不時着であるというような説明をした。きょうのニュースでは、そうしたやりとりがあったことも含め、伝えている。映像は雄弁に語るので、ヘリコプターから撮影した現場の映像を、朝のニュースで見せている。不時着か、墜落か

というような論争があるような場合には、多角的な情報、立場の違うさまざまな人の意見を伝え、視聴者の皆様に判断していただくような報道をしている。

○　ＮＨＫオンデマンドで小さな旅「僕らの波　夢のせて～千葉県　一宮市～」を見た。初めてＮＨＫオンデマンドを本格的に使用したが、かなり使いづらかった。私の所有する端末では、ＮＨＫオンデマンドのアプリを通じて視聴するために、まずウェブのＮＨＫオンデマンドのサイトから会員登録する必要があり、アプリだけで完結しない仕組みになっていた。ＮＨＫオンデマンドは、外出時など、タブレット、スマートフォンなどのアプリを通じて使うケースも多いはずなので、どうかと思った。番組の検索機能についても、カテゴリーの分け方が分かりづらく、もっと工夫の余地があると感じた。また、ＮＨＫニュース・防災アプリなど、他のＮＨＫアプリとの連携があってもよいのではないか。制度としては、過去のアーカイブ番組は有料でも構わないと思うが、見逃し番組については、無料にし、受信料に含んでほしいというのが視聴者としての率直な意見だ。受信料の契約と合わせ、視聴者ＩＤのようなものをＮＨＫが管理すれば、誰がいつ、何を視聴したのかというようなデータも蓄積でき、将来的にもよいと思う。見逃し番組を無料で開放することで、外部動画投稿サイトに掲載されている違法動画なども抑えることができるのではないか。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫの方向性に大きく関わる課題だ。ＮＨＫオンデマンドは 2008 年にサービスを開始した。当時、日本ではテレビのコンテンツを有料で配信することはあまりなかったが、ここ数年で世界中のメディアで放送と通信の垣根がなくなってきている。特に若い世代を中心に、放送番組も含めた映像コンテンツを、スマートフォン、タブレットなどを介してインターネットで視聴する習慣が広がっている。日本の放送局も、そうした環境で放送コンテンツにもっと触れてもらうようにすべきではないかという声が上がっている。ＮＨＫのテレビ放送の常時同時配信については、現在、総務省の検討会などで議論されているが、もしそうしたことが実現すれば、委員の言うようなＩＤ管理のようなことも必要になるかもしれない。ＮＨＫオンデマンドのサービスも、その位置づけ自体を再考する必要が出てくると思う。アプリなどのシステムやデザインも抜本的に考え直すことになるだろう。現行のＮＨＫオンデマンドのアプリに関する指摘については、ウェブのシステムが完全に構築された後のサー

ビスであり、視聴専用の位置づけということもあり、このような仕様になっているとご理解いただきたい。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２８年１１月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

１１月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、１８日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、８人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、前橋放送局の取り組みと今後の予定について報告があった。その後、ほっとぐんま６４０「秋のスペシャル～草津町～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

副委員長　伊藤由貴子（神奈川県立音楽堂館長・プロデューサー）

委　　員　大山　寛（サンファーム・オオヤマ(有)取締役会長）

岡田　芳保（元群馬県立土屋文明記念文学館館長）

国崎　信江（(株)危機管理教育研究所代表）

野老真理子（大里綜合管理（株）代表取締役）

藤木　徳彦（フランス料理店オーナーシェフ）

古澤　宏司（(有)古沢園代表取締役）

山口　晃平（(株)山口楼 専務取締役）

（主な発言）

＜ほっとぐんま６４０「秋のスペシャル～草津町～」

（総合　１０月７日(金)放送）について＞

○　草津は年に１回ぐらい行くが、夜の草津はあまりよく知らなかった。湯もみについては、「草津節」でよく聞いていた。女もみと男もみがあり、一般の人も参加できるということでおもしろかった。サッカーＪ２のザスパクサツ群馬の選手たちによる湯もみも、効果的でよかったと思う。草津温泉のオーナーから聞いたのだが、草津の湯は熱く、足し水のために水を買っており、お湯よりも水のほうが値が高いそうだ。それぐらいお湯が高温で、そのために湯もみがあるのだろう。そういう紹介もしてもらいたかった。湯畑については、昭和５０年に岡本太郎さんがデザインし、現在の形になったことは知らなかったので驚いた。私の知っている昔の湯畑は、

今と違い、本当の畑のような湯の棚があった。昔の湯畑の写真と現在の写真を出しており、懐かしく思った。夜の草津は、ライトアップで草津の自然をモチーフにデザインした行灯（あんどん）が４０か所に飾られており、効果的でとてもきれいに映っていた。海外の宿泊者に対しタブレット端末を使って対応しているというような、草津町のおもてなしについての紹介もよかった。ただ、生中継のキャラバンということで内容が盛りだくさんで、中途半端に終わった気がした。インタビューする人が多すぎて、１人あたりのインタビューが短すぎた。生中継なのでやむをえないかもしれないが、全般的に進行スピードが速く、湯もみの印象だけが強く残った。また「秋のスペシャル」なので、紅葉をはじめとした草津の自然の風景をもっと映してくれるとよかったと思う。

○　草津といえば湯畑だ。湯畑から番組がスタートし、昔は長方形だったのが岡本太郎さんのデザインでひょうたん型に変わったという説明もあった。それで昔の写真も見たいと思ったのだが、写真が出てきたのは番組の最後だった。湯畑の紹介のときに一緒に出してくれたらなおよかった。湯もみショーの新しい施設は、湯もみも見やすくもなり、好評のようで、ぜひ行ってみたい。テーマとなっていた「進化」の例として、手すりを低くする、スポットライトで明るくするという工夫を挙げていたが、以前の写真や映像と比較をすればもっとよく分かったと思う。草津では地域の皆さんが協力し、地域全体で活性化に向け取り組んでいることがしっかりと伝わった。地域の放送局が、地域で地道にがんばっている人たちを紹介することで、視聴者も地域のことがよく分かるし、何よりも取り組んでいる人たちの励みになると思う。もっとがんばろうという気にさせてくれる番組で、取り上げ方はよかったと思う。ただ、それぞれの取り組みについて、個人としてやっていることなのか、ＮＰＯなのか、町、あるいは県が主体なのか、国からの補助はあるのかといった、体系的な話を補足してもらうと、それぞれの取り組みの位置づけが分かり、もっと参考になった気がする。中継については、途中でカンニングペーパーが必要になる、スタッフの指示が映り込むなど、ハラハラする部分があった。スタジオからのニュースになったところで安堵した。

（ＮＨＫ側）

生放送で時間が読めなかったこともあり、昔の写真を見せるよりも、今の草津の様子を優先して映す演出を心がけた。幸いにも最後のところで時間ができたので、あらかじめ用意していた写真をご覧いただいた。草津には、これだけ多くの外国の方が来ており、ＮＰＯ、行政などさまざまな立場の人たちが一体となって取り組む機運が高まってきている。

○　このような番組はとても好きなのだが、湯もみショーの部分では映像の手ぶれが激しく、気持ち悪くなった。また締めにさしかかる部分での記者のカンニングペーパー読み、横にいるアナウンサーの不安そうな顔なども気になったが、よい意味で地方局らしい番組を制作されたと思う。観光協会を含め、地元の方からはあれもこれもとアピールしてもらいたいものが提案され、情報がすし詰め状態になっていたと思われる。しかしながら、前橋放送局の方々はそれらを真摯（しんし）に受け止め、県域放送の役割を果たすべく、懸命に番組を作っていると思った。毎回思うのだが、こうした番組は生放送よりも、収録して編集したほうがすっきりとし、伝わりやすいのではないか。

○　行政をはじめ、観光協会、企業の方、地域住民の皆さんが東日本大震災での落ち込みを何とかしようと、それぞれが取り組んでいる姿を見ることができ、うれしかった。石段の 1,200 のキャンドルが手作りということで、今度行ったときに見ようと思った。行灯は草津の店全体に飾られたらよいと思う。海外からの旅行者に対して英語、中国語を使う努力に頭が下がる思いだった。自分たちのできることを積み上げている一つ一つを丁寧に取材していたのはよかった。一方で、時代が情報性の高い観光ガイドを求めているのかと感じる部分があった。町づくりの番組は人にもっとフォーカスし、どんな思いでどんな形にしてきたのかを掘り下げてほしい。観光情報はネットで検索できる。全体の印象は上滑りしており、どれか一つを取っても物語になっていないことが残念だった。よい番組かどうかはもう一度見たくなるかという点で判断しているが、今回は一度見ればよいと思った。なお、番組中の気象情報については、草津を取り上げているので草津の天気から紹介するかと思ったが、全国の天気から入り、群馬県の天気は最後でした。何かセオリーでもあるのだろうか。

（ＮＨＫ側）

　中継をベースにする演出を選択したので、人にフォーカスするようにならなかった。散漫な印象を与えてしまったかもしれず、それは反省点だと思う。ただ、行灯づくり、外国人へのおもてなしの２つのリポートを通し、できるだけ取り組む方々の思いも込めたつもりだ。気象情報については、ふだんから最初に全国の天気から入り、次に群馬の天気、という順になっている。平日毎日放送している番組なので、いつもの順番を踏襲した。

「ほっとぐんま６４０」では、１８時５２分から２分間、全国放送の全国の気象情報を受けている。その後、前橋放送局に戻り、群馬県の気象情報を放送している。キャラバンでは前橋放送局から全ての放送を出しているので、工夫することはできたかもしれない。今後考えさせていただく。

○　群馬の草津はあまりよく知らず、観光客目線として、湯畑はこうなのか、夜に歩いて楽しめるのかと思って見ていた。ただ、これは地元の方が見る番組だ。地元の方はこういう情報を欲しいのだろうかと疑問に思った。群馬の地域性は分からないが、番組で紹介したものが本当に新しい取り組みなのであれば、地元の方にも新鮮に映るのかもしれない。草津は夜も外に出て、浴衣で歩こうという工夫をされている。地元の方がそれを楽しみに思い、地元の方が行ってみたくなるのであれば、よい番組づくりかと思った。県外の視聴者は番組を見られないので、地元の方にとって番組の内容がよいものであればよいと思った。私は地元目線でないのではっきりとは分からない。草津をあまり知らない県外の私にとっては、おもしろく、行ってみようと思った。

（ＮＨＫ側）

どこまでを地元と言うかにもよると思う。前の日に放送した東吾妻町のキャラバンもそうだったのだが、その地域でやっていることが、県内のほかの自治体の観光地などに参考になる事例があればよいと思っている。草津では夜をいかに充実させるかが課題になっている。ほかの観光地でも何らかの工夫をすれば夜の観光客を増やせるのではないかというヒントが、草津町にあるのではないかという思いで番組を構成した。ほかの地域の方々が自分たちも何かできるかもしれないと思っていただければよいと思った。すべてをまねすることはできないだろうが、番組を通じて何かのきっかけを見つけていただければよいと思う。

○　地域の放送局はスタッフが少ない中で、大規模な生放送をするのは大変なことだと思った。関東近郊の温泉地は集客にかなり苦戦していると聞く。日帰りになってしまうそうだ。今回の番組で紹介した湯もみショーでは、地元のサッカークラブの選手を使っている。地域の活動、地域資源をうまく表現していると感じた。地域を盛り上げることは住民だけではなかなか難しいが、行政、温泉組合、団体が地域とうまく連携し、盛り上げようとしている機運が伝わってきた。キャンドルを毎日

1,200 個つけるのに時間もかかるそうだが、そういう取り組みは盛り上がっても、時間や手間がかかって大変ということで、短期間で終わってしまうことも多い。地道な継続がだんだんと評価されることが表現できていたと思う。行灯は地域の人材、自然をうまく活用した町おこしにつながっていると感じた。外国人観光客へのおもてなしの取り組みも、よかったと思う。地方の温泉街が低迷している中で、今回の番組のような地方が活気づく事例や、成功例が表にどんどん出れば、自分たちは何ができるのか、ヒントにして何かできないか、新しいことにチャレンジしようという気持ちが出てくると思った。ただ、ライブの中にいろいろなことを取り上げすぎて、深掘りできていないと感じた。何かの機会に掘り下げた放送を計画しているのか、聞いてみたい。

（ＮＨＫ側）

今回取り上げたことが成果に結びついているのかどうか、継続的に、長く見ていくことが必要だろうと思う。

○　見ていてホッとする楽しい内容だった。草津は大好きな温泉の一つだったので、しばらく行っていない間にそんなに進化していたのかと新鮮だった。東日本大震災の後に観光客が減ったという話から、震災が草津にまで影響していたのかと驚いた。何とかお客さまを取り戻そうとがんばっている取り組みを取り上げた視点はすばらしいと思う。細かい点では、「夢あかり」のイベントの紹介部分で、リポーターが「ただキャンドルを並べているだけではない」と言うので、どんな仕掛けがあるのだろうと思ったら、ガラスのコップにキャンドルが入り、プラスチックでカバーしていただけだった。思わせぶりに強調することは必要だったのだろうか。キャンドルを毎回設置し、片づけないといけないことは大変だ。設置・片づけの映像を撮り、その過程をもう少し伝わるようにしたら、あれだけ苦労しているキャンドルライトを絶対に見なくては、という気持ちになっただろうと思った。あとは浴衣のモデルになったネパールの男性の草津へのコメントの引き出し方が、誘導的に感じた。ただ、全体としては、生中継でテンポよく、これだけの情報をスムーズに伝えた進行のすばらしさに感動した。地方局でもこれだけのことができるのかと思った。事前に打ち合わせを重ね、準備をしていたことがうかがえた。ハラハラ感や親しみもあった。草津の多くの関係者が出演され、華やかで、みんなでがんばろうという盛り上がりも感じられた。すぐに草津に行かなくてはと家族旅行を考えたぐらいで、よい番組だった。

（ＮＨＫ側）

苦労してキャンドルを設置していることを伝えたかった。

リポーターのコメントについては指示したわけではないので、
本人の思いがあふれ出てしまったのではないかと思う。

○　気になるところはたくさんあった。キャンドルのプラスチックは何なのかと疑問に思った。浴衣はこの時期だと寒そうだった。アナウンサーは上に着ていたが、後ろにいる人たちは寒そうだった。そういう細かいところを突っ込みながら、おもしろがっても見た。紅葉情報の豊富さもよいと感じた。生中継で苦労されているのは分かるが、最後のところで時間が余ったような気がした。「草津節」も事前に歌詞を覚え歌えるようにしておけばよいのにと感じた。ＮＨＫは打ち合わせをしすぎたためにコメントが堅くなりすぎるところもあるかと思うが、今回は、やけに自然な感じだった。そのバランスは今後の課題かと思う。これからもキャラバンをするのであれば、ほころびはないに越したことはないと思う。

（ＮＨＫ側）
日常の企画でスキルを磨いていきたいと思う。また番組に
込めるメッセージをもう少し明確にすることも必要だと思う。
「どう伝えるか」をもっと議論しなければいけないと改めて
思った。今後に期待していただければと思う。

＜放送番組一般について＞

○　アメリカ大統領選挙の関連番組を多く見た。特に１１月９日（水）の選挙当日の報道では、ＢＳ１ではアメリカのＡＢＣ制作の開票速報を同時に放送しており、食い入るように見ながら一喜一憂した。アメリカでは上院議員選挙も一緒にやっていたので、その結果もそれなりに挿入されていたが、そこまで興味を持てなかった。その部分は大統領選の解説に切り替えるなど、大統領選に絞って伝えてもよいのではないかと思った。大統領選の前後の特集番組を見ると、世界のほかの地域も含め、今までの常識ではいろいろなことが通用しないのだろうと思った。世論調査の結果と選挙結果との間にずれもあり、なぜ正しく調査できなかったのかと思う。深層心理にあるいろいろな思いまでは、つかみきれていないということで、そうしたことについて、ＮＨＫではさまざまな角度から番組にしてもらいたい。

○　１１月９日（水）のアメリカ大統領選挙の開票速報は、たまたま仕事が休みだったので、１日中つけっぱなしになった。とても長く、途中で我慢できず、２回ほど

テレビを消した。開票が始まってすぐにトランプ氏が優勢だったのに、なかなかそのことが報道されず、気になってしまい、テレビにかじりついていた。アメリカのことなので、日本がいち早く責任をもって報道する必要はないかもしれないが、事前の調査などの信ぴょう性といった面でも、納得できていない部分がある。報道機関の人たちは、今回のことをどのように受け止めているのか。長い時間の開票速報も一方的だったような気がする。選挙後の特集番組などを見るにつけ、事前に「そうなるかもしれない」という報道ができなかったのかと思う。

（ＮＨＫ側）

今回のアメリカ大統領選挙はアメリカのメディアの大方の予想から外れた結果になった。最初は泡沫候補かといわれていたトランプ氏が最後まで接戦を繰り広げ、結果的に当選することになった。全体として今回のアメリカ大統領選挙はトランプ現象にとらわれてきた。選挙前の１１月５日（土）のＮＨＫスペシャル「揺らぐアメリカはどこへ　混迷の大統領選挙」では、なぜトランプ氏を支持する人が多いのか、アメリカの社会の実情に迫る番組を放送した。日本のメディアには、アメリカの選挙を日本の選挙と同じように取材する態勢はない。日本の選挙の場合は、ＮＨＫとして緻密な事前の出口調査を行い、当日の開票所での調査も行っている。アメリカの大統領選挙になるとアメリカのメディアの情報に頼らざるをえない部分もある。アメリカのメディアも当日までクリントン氏が優勢と伝えており、それをわれわれも伝えていた。当日の開票速報は、中西部を中心に、もともとトランプ氏が強い地域が開票序盤に多くあり、最初はトランプ氏の票が多いのは予想どおりだった。都市部が開いてくると、クリントン氏が逆転するというのが当初の見通しだったが、結局、クリントン氏は最後まで挽回できなかった。トランプ氏が当選し、アメリカのメディアの予測は外れた。開票速報そのものは関心の高いニュースで、これからの日米関係、世界に与える影響も大きいため、できるだけ多くの時間を使い、充実したニュースを伝えようということで放送した。今後、どのような影響があるのか、その現実をしっかりと伝える報道を引き続きしていきたい。

○　アメリカ大統領選の開票速報を見た。テレビの前にいないときはラジオでも聴い

ていた。選挙前は非難合戦など劇場型の選挙戦で、クリントン氏有利という報道だった。開票から時間がたつにつれ、トランプ氏が大統領になったら日本にどういう影響があるのかと複雑な気持ちにもなった。イギリスのＥＵ離脱の話とも重なって見えた。国際情勢でも、視聴者が考えていることと違った結果が出るような時代になってきたとも感じた。その後の１１月１２日(土)に放送したＮＨＫスペシャル「“トランプ大統領”の衝撃」も見たが、これまでトランプ氏に関していろいろな報道がされてきたので、日本国民はかなり不安がっていると思う。ＮＨＫは公平、冷静な報道をこれからも続け、しっかりと検証していく必要があるだろう。韓国のパク大統領の問題もあり、国際的に不安定になっていると感じる。ＮＨＫではそういうことを劇場的に取り上げるのではなく、冷静な報道、視聴者が先を見通せるような報道をお願いしたい。

（ＮＨＫ側）　イギリスのＥＵ離脱にも、アメリカ大統領選挙にも言えることは、それぞれの国のマスメディアの予測が外れたことだ。既存のメディア離れというか、世の中の大きな流れの変化があるとも見られる。われわれ既存のメディアが触れられない部分、つかめない部分が出てきているとすれば、アメリカやイギリスだけの問題ではなく、われわれ自身の問題として深く考える必要があると思う。そういう現象についてどう捉えたらよいのか、メディアとしてどうあるべきなのかも含め、この問題を考えていく。

○　１１月６日(日)のＮＨＫスペシャル　廃炉への道２０１６「調査報告　膨らむコスト～誰がどう負担していくか～」に衝撃を受けた。東京電力福島第一原子力発電所の廃炉、賠償や除染にかかる費用も含めると、コストはこの時点の試算で１３．３兆円を超えるそうだ。債務超過は明らかで、すごい金額だ。原子力損害賠償・廃炉等支援機構を介して、実質的には全国の電気料金にも上乗せされることとなり、税と合わせその７割を国民が負担しないとやっていけないそうだ。私たちはこんなに無関心でよいのかと感じた。ＮＨＫは原発の問題について継続して放送してくれている。もんじゅについても、国民が負担しなければならないという点では、同様の問題をはらんでいると思う。この後もしっかりと見守り、放送してほしい。電気料金の設定がどうなっているのかも分かった。国民の目を覚ましたのではないかと思う。

○　１１月１３日(日)のＮＨＫスペシャル「終わらない人　宮﨑駿」を見た。宮﨑さんを継続的に取材した中の一部分を切り取ったような番組として見ていた。宮﨑アニ

メは子どもに絶大な人気がある。宮﨑さんがチェーンスモーカーであるあることは知っているが、子どもへの配慮としてたばこを吸っているシーンはできるだけ使用しないようにしてほしいと思う。番組の終盤に、あるＩＴ企業が宮﨑さんにＡＩの技術をプレゼンするシーンがあり、宮﨑さんは「僕はおもしろいと思って見ることはできないですよ。極めて何か生命に対する侮辱を感じます」と言っていた。その表現が心に残った。今後、人工知能の技術が進化すれば、アニメの作り手の感情などが入ってこない作品はどんどん増えるのだろうと思う。そういうことへの不安、恐ろしさ、障害者を配慮することへの感覚が鈍いクリエーターが増えるのかとも感じた。私たちは作品をどう求めたらよいのかと深く考えさせられた。

○　１０月２２日（土）の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」を見た。東日本大震災の特集で「急増する肥満児童　被災地で何が…」というタイトルだった。被災地では子どもの肥満が増えているということだった。番組で取り上げた被災地のとある小学校では、肥満児童の割合が３０％あまり、全国平均のおよそ３倍だそうだ。原因は子どもたちが歩かなくなったということだ。学校が終わるとスクールバスに乗り、仮設住宅に帰る。工事車両のダンプカーなどで沿線の交通量が激しく、危ないので子どもたちは家にいる。買い物は車だ。東日本大震災が起こったときにはそういうことは予測できなかったが、今になってそういう事態が起きているそうだ。この放送が、夜のゆっくりと見られる時間帯であれば見逃していたと思う。朝は今起きていることを見たいと思った。

○　１１月３日(木)の「元禄なう～尾張藩士８８８２日のツイート～」を見た。番組宣伝をかなりやっていたので興味を持っていた。元禄時代の尾張藩士がなぜか現代の日本に来て、ドキュメンタリー風に就活塾、海上保安庁などに行くという番組だ。とても不思議な番組で、緩くておもしろいと思った。尾張藩士を演じたのは板尾創路さんで、妙に役柄にはまっていた。ナレーションも番組に合っていた。「歴史秘話ヒストリア」や「ドキュメント７２時間」、それに時代劇が混ざったようで、不思議な時間感覚、ゆらぎ感覚がおもしろいと思った。ドキュメンタリーはドキュメンタリー、歴史ものは歴史ものとなっていたものを、融和させる方向性を出してみたのかという気がした。今後どうするつもりなのかと思った。

○　「ドキュメント７２時間」は大好きな番組だ。１１月４日(金)の「夢みる巨大画材店」を見た。来店する人の価値観、人生観までのぞけるおもしろさがある。現代社会に生きる人々の生々しい姿を映しているところに感動、悲哀がある。番組が終わった後に何となく感じる切なさ、その余韻から次回もつい見てしまう。引きつけられるよい番組だと思う。

○　１１月６日(日)のダーウィンが来た！生きもの新伝説「日本のイヌワシを守れ！子育て支援大作戦」を見た。イヌワシの生息数が減っており、絶滅の危機に瀕(ひん)しているということから番組が始まった。一番の原因は、森の環境変化で餌になる獲物を十分にとれず、ヒナを育てることができないということだった。その状況を改善しようということで、森づくりから取り組んでいるという内容だった。森づくりをしたところ、イヌワシの餌となる小動物が増えてきたということだった。イヌワシだけでなく、鷹匠のことなども出てきておもしろかった。そうした絶滅の危惧に瀕している動物は、生きていけない環境になったから絶滅するのだと思う。人工ふ化させ、放すだけというのはその場しのぎで、一時的に増えるかもしれないが、生きるための自然環境を根本的に解決しないといけないと思う。ニュースなどでは、人工ふ化させたライチョウが何羽いて、放した、死んだということの繰り返しを見ている気がする。番組を見て、森づくりはすごく大事だと感じた。今までも「ダーウィンが来た！生きもの新伝説」は見たことがあるが、今回は番組のテイストが違うと思った。

○　１１月９日(水) 放送の、「超入門！落語ＴＨＥ　ＭＯＶＩＥ」を見た。番組で取り上げていたのは、落語の代表とも言える「時そば」「三年目」だが、これらの演目は場面を空想するからおもしろいのであって、あてぶりの芝居をかぶせた演出では、映像が強く印象づけられてしまい、かえって興ざめした。演目によっては芝居があったほうが楽しめるかもしれないが、私には新しい落語の楽しみ方という視点がなじめず、落語は自分で聞いて想像するほうがよいと改めて思った。女房役を演じた女優の幽霊の姿が頭から離れなくなってしまい、今後「三年目」を落語で聞いたときにどうしようかと思った。

○　１１月１０日(木)のＳＯＮＧＳ「中島みゆき～歌姫の２１世紀～」を見た。中島さんの曲は心に染みるものが多いので大好きだ。またあまりテレビに出演されない方なので、とても楽しみにしていた。選曲も「麦の唄」など、私の好きな曲が多く、「ＮＨＫ紅白歌合戦」に出演したときの様子、ライブなどの貴重な映像もあり、見どころが多く大満足だった。残念だったのはナレーションの女優の声が中島さんのイメージと離れており、違和感があったことだ。むしろナレーションはないほうがよかったという印象を受けた。「ＳＯＮＧＳ」は大好きな番組の一つで、いつも期待を裏切らない満足度がある。

○　１０月３０日(日)のバリバラ「“見た目”の悩み」を見て驚いた。一石を投じたと思う。よくぞこういう番組を作ってくれたと思う。障害のある人たちの日常を、

ありのままに放送している。出演する側も大変だと思うが、視聴者の意識を一気に変えてくれたと思う。今後もこういう番組を放送してほしい。

この番組からは離れるが、７５歳以上からは後期高齢者と言われているが、ＮＨＫのニュースで、６５歳以上を高齢者という言い方をしているのが気になる。

（ＮＨＫ側）

ＷＨＯ、官公庁では６５歳以上を高齢者としている。それに準じ、ＮＨＫもそう伝えている。ＮＨＫが独自に決めているのではなく、官公庁との整合性でそう表現している。年金の支給開始年齢なども関係していると理解している。

○　大河ドラマ「真田丸」も最終盤になり、大坂冬の陣があった。毎回見逃さないようにしていて、引き込まれている。１１月１２日(土)のブラタモリ「大坂城・真田丸ＳＰ」でも真田丸の紹介があり、高いビルの屋上から地形を検証し、ここに出城があったという紹介もあった。「真田丸」もいよいよクライマックスになり、どんな結末を迎えるのか、期待している。楽しい番組にしてもらいたい。

○　１１月６日(日)の大河ドラマ　真田丸「築城」は、いつも冒頭にあるタイトルバックを含んだオープニングの映像が出ず、エンディングに出てきた。そんなことは初めてではないか。そこでテンションが上がるというか、おもしろいことをやると思った。定番化しているお決まり、お約束になっていることをたまに外すとすごく新鮮だ。それは「元禄なう」のようなジャンルを横断する番組のことでもあり、今回の「大河ドラマ」の手法でもそうだ。それはよいスパイスになるのではないかと思う。

○　１１月６日（日）の趣味の園芸　やさいの時間「冬じゅう収穫！　タカナ＆カラシナ」を見た。ゲストの渡辺満里奈さん、司会の川瀬良子さん、講師の藤田智さんなど、登場する方の語り口、リズム、タッチがとてもよいので、無理なく、心地よく見られる番組であると改めて感心した。土のつくり方、肥料のやり方など、誰でもできそうに思え、分かりやすかった。露地栽培の解説だったのでマンションの人はかわいそうと思ったが、プランターでの栽培についてもフォローされていた。最後にお便りのコーナーがあり、山間部の学校の先生が「子どもたちが学校で野菜を作っているが、シカが食べてしまって子どもたちががっかりする」という話だった。シカに食べられなさそうなエゴマ、トウガラシを作ることで、収穫の喜びを子どもたちと味わえるということだった。笑顔の写真が出て、万全な構成だと感心した。ＮＨＫの教養番組はすばらしいと思う。

○　「１００分ｄｅ名著」はときどき見ていたが、初めてまじめに見ている。１１月は「道元“正法眼蔵”」を特集している。難解な世界と思われている「正法眼蔵」を、講師のひろさちやさんが指南してくれる。この番組のよいところは、現代の視点に引きつけ、現代人ならばこう、という話にしてくれるところだ。悩める現代人にとっても分かりやすく、よい話を聞いていると思う。思わずテキストも買ってしまった。１０月に取り上げられていた「アドラー“人生の意味の心理学”」もよかった。難しいものと決めつけるのではなく、現代でどういうことが生かせるか、という視点で名著を読み解くことは続けていってもらいたい。

○　１１月５日(土)に放送した、ザ・プレミアム「京都人の密（ひそ）かな愉（たの）しみ　月夜の告白」（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 9:00～10:59)を見た。ドラマ仕立てで、京都の伝統、歳時記を紹介する番組だった。映像や音楽がすばらしく、きれいだった。ドラマの内容もコミカルな部分、しっとりとした部分があり、テンポよく見ることができ、引き込まれた。このシリーズは関心を持って毎回楽しく見ている。例えば「地域発ドラマ」などでも、このような地方の歳時記をテーマにしたすばらしい番組を作ってもらえるとありがたい。

○　１１月１２日(土)放送のザ・プレミアム「絶景にっぽん月の夜」（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 7:30～8:59)を見た。いろいろな角度から、日本の月のある景色、日本人の月との関わりを、松尾芭蕉の句なども使いながら紹介した番組だ。映像がすばらしく、きれいで、内容も知的好奇心を揺さぶられるもので、楽しく見た。ただ、最初のほうで出演者の女性が“国民の愛人”というコメントをし、その後の会話の内容も薄く、知的さが感じられなかった。色っぽいこととあでやかをはき違えているのではないかと感じた。よい流れで見ていた番組だったのだが、そういう部分で途切れてしまい、見る気が失せてしまった。“国民の愛人”というのが万人に親しまれるフレーズなのかということを考えていただきたい。また、最後のほうで東日本大震災を絡めたような締めの映像があった。東日本大震災を風化させないことは重要だと思うが、短絡的な部分が見え隠れした。必然性はあったのかと、すぐに現実に戻されるような感じだった。すばらしい映像で、時間をかけ、いろいろなところを撮影していたので、もったいないと思った。

（ＮＨＫ側）

「絶景にっぽん月の夜」の出演者については、広く親しんでもらえる方をということでお願いしている。出演者の選定はとても難しい。

出演者の選定については、これからも番組に合っているかどうかをよく判断するようにする。ただし、今回は、出演者にそのようにふるまってもらった制作側の問題だと思う。

○　ラジオはふだんあまり聴かないが、仕事の帰りに車中で聴いた１１月５日（土）の防災特番「“稲むらの火”を世界に～世界津波の日」（ラジオ第１　後5:05～6:50<一部ニュース中断あり>）はおもしろく、聴き応えがあった。

○　１１月６日（日）には「水俣病事件６０年　現代への問いかけ」（ラジオ第１　後5:05～6:50<一部ニュース中断あり>）を聴いた。当時の関係者の肉声が放送されており、まだ水俣病は終わっていないという印象を強く受けた。午後５時台の番組は聴いている人が多いと思う。とてもよい番組だ。再放送も検討してほしい。

○　１１月６日（日）の「水俣病事件６０年　現代への問いかけ」は、２時間近い番組で、本当に聴き応えがあった。ラジオ版の「ＮＨＫスペシャル」のような番組だった。水俣病に関する番組をＮＨＫはテレビでもたくさん放送してきた。これまであまり見ることがなかったが、今回のラジオを聴いて何らかの形で確認し直したいと思った。ＮＨＫ、マスメディアの役割の重大さを再認識させられた番組で、とてもよかった。

（ＮＨＫ側）

「水俣病事件６０年　現代への問いかけ」を聴いていただきありがたく思う。今年は公式確認から６０年だが、熊本地震の影響もあり、慰霊式が秋に延びた。そういう中で改めてこの６０年を振り返り、現代の私たちに何を問いかけているのか、ラジオならではの、じっくり語り合う形で放送した。出演者のお一人の元チッソ水俣工場第一組合委員長の岡本達明さんが、４０年以上かけて集めた膨大な証言記録を昨年発行したこともきっかけとなった。聴取者からは再放送の要望も寄せられており、これからもこうしたじっくりと語れる、聴取者と一緒に考える番組を作っていきたいと思う。

○　大相撲をラジオで聴く機会が多い。ラジオのアナウンサーはよく勉強していて、現場の状況が目に浮かぶような臨場感のあるアナウンスをしている。ただ、懸賞金の説明はあまりしない。民間の宣伝が絡むので話しにくいとは思う。ただ、テレビ

では何本かかっているのか数えることができるが、ラジオでは情報がないと分からない。「懸賞金の束を受け取りました」というコメントはあるが、どれぐらいあったのかも教えてくれればよいのにという気がする。懸賞金がどのぐらいかかっているのかは、聴取者にとってかなり重要なファクターになっているのではないかと思う。情報を正確に伝えるという意味でも、ラジオでは懸賞金が何本かかったと、さらりと入れてもらえば、相撲好きな人にはより分かりやすいと思う。

（ＮＨＫ側）　大相撲は立ち合いから勝負が決まるまでが短く、むしろ間合いが長い。その間の実況描写にアナウンサーは工夫のしどころがある。行司の軍配の動き、土俵を掃き、清める動きなど、さまざまな動きがあり、勝負の合間にそうしたことに触れることもある。懸賞金に触れないのは広告宣伝と深く関わっているので、ＮＨＫとしては扱いが難しいということを理解いただきたい。懸賞金が何本というのは、力士の人気の度合いを表すバロメーターのようなものかもしれないが、いつ立ち合うか分からないこともあり、触れたり触れなかったりということが出てくると不平等にもつながる。いつ立ち合うか分からない瞬間に備え、アナウンサーは準備しながら描写している。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２８年１０月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

１０月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、２１日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、横浜放送局の最近の取り組みと今後の予定を報告した。その後、特報首都圏「障害者殺傷事件　何が突きつけられたか」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　髙野孫左ヱ門（(株)吉字屋本店代表取締役社長）
副委員長　伊藤由貴子（神奈川県立音楽堂館長・プロデューサー）
委　　員　岩佐　十良（(株)自遊人代表取締役）
岡田　芳保（元群馬県立土屋文明記念文学館館長）
国崎　信江（(株)危機管理教育研究所代表）
野老真理子（大里綜合管理（株）代表取締役）
藤木　徳彦（フランス料理店オーナーシェフ）
古澤　宏司（(有)古沢園代表取締役）
山口　晃平（(株)山口楼 専務取締役）

（主な発言）

＜特報首都圏「障害者殺傷事件　何が突きつけられたか」
（総合　９月９日(金)放送）について＞

○　番組を見た視聴者は、ひと事と言うか、自分のことのように思えなかったのではないか。私の身近に障害者がいないこともあるのかもしれないが、いざ障害のある方たちと接することになったら、自分に何ができるのかという部分が、見えにくいように感じた。犯人の気持ちについても、なぜそんなことをしたのか、仕事につい

て理解できているのか、施設の方にどういう気持ちで接していたのか、分からなかった。最近では高齢者に席を譲らないなど、助け合い、お互い様という精神が日本全体でだんだんと見えなくなってきたように思う。番組を通じて、自分たちは何をどうすべきか、というところまで視聴者に響いていれば、次につながると思った。子どもの教育、人に優しくするという道徳的な部分はどうなのか。老人ホームや介護施設で働く人はどうなのか、雇用の問題はどうなのか。番組の作り自体はよかったが、こういう事件を繰り返さないためにも、その先のことをもっと考えるべきだと思った。障害者を一人の人として見られるようにならない限りは問題解決が難しいと感じた。

○　以前、重度障害者のいる施設でボランティアをしていたことがある。寝たきりで、自分で食事もできないが、ちょっとした表情の変化にうれしさ、悲しみなどを感じ取り、一生懸命に生きていると受け止めてきた。障害者の方と接していないと、社会的な理解はなかなか深まらないと思う。点字ブロックの上に自転車を置くような、障害者への理解が低い社会において、そういう意識の積み重ねが事件となって現れたのではないかと思う。ホームドアのない駅で、過去に何人も目の見えない方がホームに転落して亡くなるということを放置してきた社会、そんなことを広く取り上げたら、社会がどれほど障害者を理解していないかの背景も伝えられてよかったと思う。どうすれば障害者への理解が深まるのかという点について、横浜市栄区の施設の地域のふれあいを紹介していたのはすばらしい。同様の他の地域の方にとっても参考になると思った。栄区の地域の方々の障害者への対応を見ていて心が温まった。ただ、中学生が生徒会の活動で障害者を自宅まで送っているシーンで、なぜ生徒のコメントを使わないのかと思った。障害者と触れ合っている生徒の率直な意見も聞きたかった。

オープニングで、重度障害のある女の子を持つ母親が、車中にその子を残して買い物をするというシーンが気になった。エンジンをかけたまま、施錠もしていなかった。撮影で中にスタッフがいるからということかと思うが、誘拐や車の盗難のリスクを鑑みると、オープニングでそういう状況を放送することに違和感を覚えた。やってはいけないことなので、そういう放送はしてほしくなかった。

（ＮＨＫ側）

生徒のインタビューも撮影していたが、全体の流れの中でどちらかというと住民の話のほうを重要視したため、編集の過程で紹介するに至らなかった。また、オープニングの、障害のある子どもを車に置いて買い物にいくシーンについては、取材チームでも議論した。今回、障害者の家族がそうせざる

を得ない状況にまで置かれているというのは、事件後１か月で一番象徴的なシーンと思い、冒頭で使用した。頂いたご意見については、今後に生かしたい。

○　１９人が亡くなるという前例のない惨劇という印象で事件を見ていた。「障害者は社会悪」と言った犯人のコメントも衝撃的で、忘れることができない事件だ。事件の性質上、取材は大変だったと思う。番組では、事件の直接的な影響が深掘りされるのかと思ったが、後半は横浜市栄区の障害者施設が、地域の方とうまくコミュニケーションを取ることで、障害者に対する住民の理解を深めている事例の紹介だった。初めて知ったが、すばらしい内容だった。今に至るまで３０年の年月がかかったという話があったが、きっとそういうことなのだろうと思う。子どもの頃から触れ合っていると当たり前に近い存在になる。それが大人になってから突然出会うと、奇異に感じたり、いろいろなことが起きてしまうのだと思う。とにかく偏見をなくす、差別をなくすためには、なるべく当たり前に近い状況を作らなければいけない。そのためにはこうした機会をたくさん作ることだ。今回の番組で取り上げた地域のように、学校が絡むことはとてもよい取り組みだ。全国的にうまく展開できればよいと思った。タイトルのイメージからすると前半部分をもっと掘り下げるという期待もあったが、後半部分で将来の方向が示された感じがして、バランスのよい番組になったと思う。

○　この事件は単に障害者を殺傷したというだけでなく、番組で平野方紹教授が言っていたように「効率性、生産性に欠ける者に対する社会の風潮を強く反映した事件」と感じていた。しかしながら、番組では障害者との共生について精神性を説くものばかりで、平野教授が話していたことの答えになっていなかったように感じた。また障害者差別解消法を紹介していたが、視聴者を納得させられる材料になっていなかったと思う。生活弱者が社会への不満から、さらに自分よりも弱者に対して差別意識を抱いてしまうような問題があるとするならば、障害者だけでなく、高齢者なども含め、誰もが標的になるおそれがあるともっと表現するべきだと思った。資本主義社会、情報化社会が成熟する中で、誰もが弱者になる可能性があると思う。その中で人権がどれだけ大切なものかを、丁寧に伝える必要があるのではないか。とは言え、２８分という時間で伝えきるのは大変であろうというのが正直な気持ちだ。問題提起としてはすばらしい番組で、続けてもらいたい。

（ＮＨＫ側）

今回の事件は単に異常な犯罪者が犯行に及んだということでなく、容疑者に賛同するようなインターネットの書き込み

も相次ぎ、背景にある障害者、弱者に対する社会全体の不寛容さのようなものが如実に表れたとも感じた。そういうことが感じられるような番組にしたいと思って放送した。知識として障害者のことを知るのでなく、体感し、目を合わせ、感じることの大切さを紹介したいと思った。

○　事件以降、障害者の置かれている現実が短時間でよく理解できた。ふだん接していない、全く知らない世界だったのでインパクトがあった。番組で、献花に訪れた濱屋康成さんはダウン症の子を授かる前、高齢者の介護施設で働いていた時に犯人と似た考えが頭をよぎったこともあったと言う。施設で働く職員の労働条件の厳しさと環境に多くの問題があるという現実を考えさせられる、鋭いインタビューだったと思う。障害者支援施設で働く職員の不安感もよく伝わった。番組で紹介していた千葉県の障害者施設の施設長は「職員は宝物で、財産です」と言っていた。施設の職員の責任の重さがよく理解できた。障害者差別解消法については、当事者が声を上げ、法案が通ったということで、現実に変化が生じていることがよく分かった。横浜市栄区の施設の、地域との共生・交流の部分もよかった。障害者を身近な人として理解することの大切さを初めて強く感じた。障害者が身近に普通の生活をして共生していることをテレビやラジオでもっと放送したらよいと思う。テレビは分かりやすく伝えるために情報をパターン化し、視聴者が見たがっている現実を描いている。放送に携わる人は、視聴者が見たい現実でなく、日常にある現実を映し出したほうがよいのではないだろうか。そういうことを痛感した。厚生労働省のデータでは、国民のおよそ７４万１千人が知的障害者で、そのうち施設に入居しているのは１６．１％ほどだという。そういう社会の中で、今回の問題を鋭く突きつけたことに感謝している。

○　事件以降、重いテーマと受け止めてきたので、その答えのヒントを出してほしいと思って見た。無残に殺傷することは決して許されないというのは当然だ。そのうえで、重度の障害でコミュニケーションもとれず、何年も寝たきりの人々の意思を我々はどう受け止め、どう理解するのか。また機械作業のように進める介護・看護の現状のなか、心ある人たちが納得して答えを出す余裕もないままに無理やり押しつけられているのではないか。そういうことを思って見た。以前犯人と同じような思いに駆られたこともあった父親が、障害のある自分の子どもに触れ、かけがえのない命を実感するという構成は分かりやすい。しかし、それはその子どもを持ったから分かることで、私を含めたそうではない人たちは、置いていかれてしまった気がする。今回のテーマに対し自分なりに結論を見つけたいと思い続け、縁があって重度障害のある溝呂木梨穂さんという人が自らの心の内を描いた詩集を手にした。

外から見たら何の反応も見えず理解できなくとも、人は誰もが精いっぱい生きていて、たまたま健常者である自分が偉そうに軽はずみに判断してはいけないと分かった。今回の番組は問題の深掘りに物足りなさは感じたものの、こうした気づきのきっかけにはなった。後半に出てくる横浜の施設の取り組みは地域と施設の当事者たちが知り合い、つながり合い、生かし合う事例の一つだと思う。高校生のときのボランティアがきっかけで、そこで働くことになったという施設の職員の声はうれしかった。

○　今回の番組は私にとって重すぎた。事件の後に障害者の家族の方がさらに追い込まれていることを報道し、そうではない社会を作らないといけないと知らせることは重要だと思う。その裏で一抹の不安も感じた。というのは、テレビは世の中の風潮を映し出していると視聴者は思って見るわけで、犯人に同調する書き込みのシーンなどを見て、犯人と同じような思想を持つ人が自分の考えを正当化させかねないという恐怖を感じた。番組を見て、そんなに障害者に対して厳しい世の中なのか、そんなに追い込まれている立場にいるのかと思った。そんなことはない、そうではないという意見の拾い上げもないと、見ている人間の心のバランスも保てないのではないか。後半部分はそうした取り上げ方だったのかもしれないが、もっと多面的な、健常者から見た今回の事件、障害者との接し方があった方がよいと思った。

（ＮＨＫ側）

見る人によっては犯人の思想を正当化させかねないというご指摘は重い。今回の事件がなくても差別意識のようなものは潜在していたと思う。報道で伝えることによって、寝た子を起こすではないが、そういう側面もあるかもしれない。事件後、障害者とその家族がどのような状況に置かれているのかという、番組の主となるメッセージを込めた時に、２８分という時間の中でバランスを欠いていると受け止められる部分もあったかもしれない。今後も多面的に伝えていきたいと思う。

○　副題の「何が突きつけられたか」は、私たちが新たにどういう視点を持たなければいけないのかという意味でつけたのだろうと思った。日本では障害や社会的弱者を隠しがちだったのを、開いていく方向にしようとしていると思う。障害者差別解消法もその一環で生まれた法律と理解している。そうして開かれようとしているところを、もう一度隠す方向に持っていきかねないのが、今回の事件の大きな傷跡だと改めて感じた。知らないことが最も大きな問題だ。テレビを通して、現在の状況

が少しでも分かり、何かが変わるきっかけになる。その意味で、この番組は機能していると思う。冒頭で、インターネットの書き込みの例が出てきた。事実なのだろうが、模倣する人、おもしろがってやる人がいる以上、大きな字でそうした書き込みを出す必要があるのか疑問を持った。こうしたシーンがなくても、きちんと伝えることはできたのではないか。リスクを減らす努力は、放送全体で必要だと思う。そのうえで、事実を隠さずに社会へ伝える方法を考えることが大事だ。このタイミングで、最大限に考えた番組だと思うし、特に事例の紹介などはよかったのではないかと思う。

○　「何が突きつけられたか」という問いかけのタイトルに対し、答えは見る人が見つけなさいという作りの番組なのだろうと思った。障害のある子を持つお母さんが語っていた「この子よりも１日でも長く生きる」ということが答えなのだろう。障害のある子とその家族への支援のあり方、社会の関わり方に対する家族の心情が凝縮し、ひと言にまとめられていたと思った。人口が減少し、税収が減る中で、今まで行政が担ってきた公共の役割を、市民が分担しなければいけない局面に入っている。より理解を深めるための事例は、もう少しあってもよかったと思う。障害は特別なことでなく、日常の中にいつも背中合わせにあるものであり、支援、手助けをする事例の紹介、３０年にわたる地域社会とのコミュニケーションの積み重ねの事例は意味のある内容だったと思う。

○　この事件の報道があったとき、強い衝撃を受けた。私たちの世代では子どものころに障害のある子どもも同じクラスに通学し、勉学をした。その中には多少の差別などがあったものの、多くは助け合い、仲間意識があった。子どものころから障害のある人と関わることで障害者を理解する機会となっていた。番組では障害のある子どもを持つ親と家族の揺れる気持ち、それでも前に進もうとする様子を丁寧に取材していた。事件後の障害者差別解消法の施行などの政策を説明し、後半部分では地域住民と障害者との共生を、長い時間をかけて実現した障害者施設の現場の紹介があり、今後の取り組みの参考になった関係者も多くいたと思う。番組を視聴し、多くの健常者が障害者を見守り、障害者と関わる活動に関心が高まる機会になればよいと感じた。また、このような社会問題は時間が過ぎると記憶が薄れてしまうので、今後も取り上げる機会があればよいと思った。

（ＮＨＫ側）

貴重なご意見をありがたく思う。生産性や効率性重視の今の社会の中で、社会的弱者への不寛容さがより強く表れていると思う。横浜では点滴異物混入事件などもあり、横浜放送

局としてはそうしたことも継続的にきちんと伝えていきたい。今回、伝え方によっては逆に犯人のような思想を助長させる危険もあるという意見も聞き、そのあたりのバランスを取りながら、頂いた意見を生かし、これからも番組を制作していきたい。

＜放送番組一般について＞

（ＮＨＫ側）

前回の番組審議会で委員より、７月１７日(日)のサキどり↑「新鮮よりおいしい！？広がる“熟成”食品」について指摘を頂いた。一般家庭でまねをすると危ないのではないかということで、改めて検証した。番組の中で、出演者の山口もえさんが「自宅の冷蔵庫でも熟成食品を作れるのですか」と質問し、ゲストの専門家の東京農業大学の前橋健二准教授が「危ないので自宅ではお勧めできない。熟成食品はしかるべき施設で一定の温度管理をし、衛生的な管理のできるところでないと難しい。一般家庭の冷蔵庫では温度が一定でなく、微生物もいるので危ない。やめたほうがよい」と答えていた。とは言え、番組の方向としては熟成食品のブームとその理由、うまみに力点が置かれており、最初からその危険性について触れているわけではなかった。委員の懸念のとおり、専門家からの注意喚起の部分を見逃すなどした場合は、うっかり一般の視聴者がまねてしまう可能性はある。食品の安全性については慎重でなければならず、今後も取り上げ方、伝え方には十分に留意し、制作する。

○　熊本地震から半年ということで、ＮＨＫでは熊本地震に関するさまざまな番組を企画していた。その中で１０月９日(日)のＮＨＫスペシャル「あなたの家が危ない～熊本地震からの警告～」を見た。建物の耐震基準について取り上げており、内容がすばらしかった。最新の耐震技術を満たした木造住宅でも熊本地震では倒壊した事実、法律の穴というか、知られざる盲点を鋭く指摘していた。東日本大震災以降、都心では免震装置のある高層マンションがかなり売れた。しかし免震装置が長周期の地震では共振し、かえって揺さぶられるという事実と、被害想定に切り込んでいたのはすばらしい視点だ。将来の南海トラフ地震、首都直下地震を前に真実を明ら

かにし、有益な課題を社会に提起したと高く評価したい。ＮＨＫではＮＨＫスペシャル「巨大災害　ＭＥＧＡ　ＤＩＳＡＳＴＥＲ」のシリーズなど、災害についてよく扱っている。被災から半年の節目のときだけということでなく、ＮＨＫでは引き続き企画をしていってほしい。

○　１０月１６日(日)のＮＨＫスペシャル　マネー･ワールド　資本主義の未来　第１集「世界の成長は続くのか」を見た。難しい学説、論文内容を、きわめて分かりやすい漫画仕立てにしており、大変よい工夫だったと思う。番組の後半にヨーゼフ・シュンペーターの創造的破壊について触れていた。このことは９月２５日(日)のＮＨＫスペシャル「縮小ニッポンの衝撃」という番組ともつながってくる。こちらの番組では、高度経済成長期の反動で日本社会のさまざまな設備や仕組みが過剰になっており、そのことに起因する悲劇について、豊島区や夕張市などの実例を出して解説していた。創造的破壊とは、２１世紀の社会は今までの延長線上にはなく、これまで自治体任せにしていた公共について、市民自らが関わることで、新しいフロンティアが開けるということなのだと思う。２つの番組を併せ見ることで強く感じることができた。

○　９月２７日(火)の「あさイチ」で、西表島のイノシシの生食について紹介していた。厚生労働省のガイドラインに、野生動物の生食をしてはいけないとしっかりとうたわれている。地域の食文化が消えてしまうのではないかという声もあるが、今はいけないことなのだと思う。ＮＨＫがなぜそんな初歩的なミスを犯したのかと不思議だ。食品なので十分に気をつけるべきで、二度とこういうことがあってはならないと思う。

（ＮＨＫ側）

ご指摘の「あさイチ」について、番組で西表島のイノシシの刺身を紹介した。事前に担当者が地元の八重山の保健所に確認した際に、「一部の店舗ではイノシシの生食が可能」という回答を得て、それに基づいて放送したということだった。しかし放送後、視聴者の声を受け改めて確認したところ、それが正式な許可ではないことが分かった。地元の保健所だけでなく、複数のところに確認を行い、入念にチェックしなければいけなかったと反省している。２９日の放送で司会の有働由美子アナウンサーがおわびした。

○　１０月５日（水）のひるブラ「世界に誇る“長野ワイン”～長野・塩尻市～」を

見た。コメンテーターが渡辺徹さん、司会は長野放送局の井田香菜子アナウンサーで、塩尻の老舗のワイナリーを訪れていた。「世界に誇る」という副題だったのでおもしろそうだと思った。しかし、ぶどうの収穫から醸造までの流れを紹介する中で、どのあたりが世界に誇るのかが、よく伝わらなかった。長野のワインは世界に誇る理由がある。例えば、塩尻には世界最優秀ソムリエコンクールにおいて、世界のソムリエに味見をさせるのが認められたワインもある。この品種を知らなくては世界のソムリエとしてふさわしくないというようなワインに上り詰めたことが地域としての誇りなのだ。また長野のワインの歴史として、長野県原産地呼称管理制度により、質の高いワインを作る生産者とそうでない生産者のすみ分けを進めたことなどもあるが、そういった情報があれば「世界に誇る」ということがよく分かると思った。進行では、アナウンサーと渡辺さんが同時に発声し、聞き取りづらい部分があった。生放送なので仕方ない面もあるかもしれないが、どうかと思った。

（ＮＨＫ側）　「ひるブラ」について、頂いたご意見は制作現場にきちんと伝える。

○　１０月１６日(日)の小さな旅「僕らの波　夢乗せて～千葉県　一宮町～」は私にとって身近な地域を映した番組だった。ふだん同じ波や海、地域の人たちを見ているはずなのに、全く違う捉え方で、それぞれを生き生きと美しく見せていて驚いた。なぜ今までこんな見方ができなかったのだろうと思った。番組では、波から海を映し、海から町を映し、景色を切り取るアングルが違っていた。改めて世界に通じる魅力ある地域であると感じることができた。ぜひこの番組を国際放送でも取り上げ、広げてほしい。番組に出てくる人も、こんなにすごい人なのかと改めて思った。この地域も外国の人たちが来てもよいのだと思えるような、よい番組だった。

（ＮＨＫ側）

「小さな旅」は首都圏放送センターが所管し制作する番組だ。１０月１６日(日)の「僕らの波　夢乗せて～千葉県　一宮町～」は千葉放送局のディレクター、カメラマンが制作した。映像についてお話があったが、「小さな旅」は新しい実験的な映像の撮り方にも挑戦しており、その一つの例だったと思う。４Ｋ・８Ｋでの制作も行っている。国際放送でも取り上げたらという話があったが、これまでも国内で放送したさまざまな番組を国際放送へ展開しているので、実現できるように国際放送局に伝える。

○　ちまたで言われる住みたい県ランキング、行ってみたい県ランキングなどでは、最近、地域間の格差がすごく激しいと思う。外国人の行ってみたい県ランキングでは京都、大阪が上位に来る。関東甲信越では、東京、神奈川は高い位置で、長野は悪くなく、北関東と新潟は苦戦している。魅力的な地域であるはずの北関東、新潟はどんなランキングのデータを見ても下位にへばりついている。本当に深刻で、何とかしないといけない。こうした地域の魅力、住みやすさを、外国人へのアピールも含め、新しい形でＰＲし、地域間格差をなくすような番組ができないのかと最近感じている。そうした番組は地域の中でしか放送されないことが多いので、もっと外に発信する仕組みがないのかと思う。

（ＮＨＫ側）

地域の魅力の発信はわれわれの使命の一つである。ＮＨＫでは経営計画の重点方針の一つとして、地域の魅力や話題、課題を、地域に全国に、世界に発信し、地域の活性化に積極的に貢献することを、地域放送局の役割として掲げている。首都圏放送センター所管の「小さな旅」、「特報首都圏」、「金曜ｅｙｅ」などの番組では、引き続き北関東や新潟も含めた地域の魅力を発信し、全国にも展開していく。新潟放送局でも、「金よう夜きらっと新潟」という番組の「にいがた国際旅行社」という企画で、インバウンドにもつながる番組展開にチャレンジしている。地域の魅力の発信は、関東甲信越の９つすべての放送局で取り組んでいる。

○　「小さな旅」の映像に関連して、４Ｋ・８Ｋの放送についてだが、音響の話はあまりでてこない。その場所に行ったときの感覚、滝の音、風の音、波の音などがある。映像では４Ｋ・８Ｋで人間の目よりもきれいに見える。音響については、５．１ｃｈ、７．１ｃｈ、９．１ｃｈとスピーカーがすごく多くなっている状態だが、テレビの電波は５．１ｃｈ、７．１ｃｈを乗せられないのだろうか。テレビの電波に５．１ｃｈ、７．１ｃｈが普段の放送に乗れば、より臨場感も出るのかと思う。

（ＮＨＫ側）

８Ｋは最大で２２．２ｃｈの、包み込むような立体音響を表現できるのが特徴だ。「小さな旅」でも８Ｋでの収録にチャレンジしている。アンブレラマイクという傘のようなものにマイクを付けた集音方法も試み、超高精細な映像と組み合わせ、立体的な音響を表現することに取り組んだ。なお、今の

地上波・衛星放送でも、最大５．１ｃｈでの送出が可能で、オリンピックをはじめさまざまな番組を５．１ｃｈサラウンドで放送している。家庭でご覧いただける８Ｋの受信機の販売はこれからになるが、ＮＨＫ放送技術研究所では、テレビの周りの枠にスピーカーを埋め込むなどし、少ないスピーカーで２２．２ｃｈの立体音響を再現する技術を開発している。今後、家庭でご覧いただく際にはそういう仕組みでも聞いていただけると考えている。

○　外部の音を遮断するなどきちんとした環境があれば、そうした音響を楽しむことが可能だと思う。しかし、映像を見ればきれいだと分かるが、音については、スピーカーがいくつあるという話でなく、それなりの環境がなければ、その魅力をきちんと受け取れないと思っている。４Ｋ・８Ｋを普及させるために試験放送をやっているが、特に音に関しては、どうやって享受すればよいのか、一般の人は知るチャンスがあまりないのではないかと思う。現状では８Ｋのコンテンツは各地の放送局ぐらいでしか普通の人は視聴できない。身をもって体験しないと、そのすばらしさは実感できないと思う。そのための環境づくり、映像を流す場所の選択は今後考えてもらいたい。そうしないといくら技術が進歩しても、なかなか普及まで至らないのではないかというのが正直な思いだ。

○　１０月１２日（水）の探検バクモン「“巨大ジェット機”整備場」を見た。出張で飛行機をよく利用するので関心を持って見た。飛行機の安全は多くの技術と努力があって維持されていることを改めて感じた。本来は見ることができない世界を見せてくれたのはＮＨＫの力だと思った。300 万ものパーツをミリ単位の精度で整備する職人の技術もさることながら、すごい数の工具を現場に残しっぱなしにしないための管理体制にも驚いた。人命に関わる業務をしている多くの企業の人に、今回の航空会社の高い安全意識を見て、参考にしてもらいたいと思うほど、よい番組だった。

○　１０月１９日(水)から始まった「超入門！落語　ＴＨＥ　ＭＯＶＩＥ」について、落語が大好きなのでどんな番組になるのかと思って見た。落語は頭の中で想像し、自分なりに世界を膨らませ楽しむのが価値のある文化、芸術と思っていた。それを映像にしてしまったらどうなるのか、プラスとマイナス両方の面でとても興味があった。まずこうした番組を作ろうと思ったことがすごいし、おもしろいチャレンジだと思う。キャスティングもすばらしかった。落語家の噺（はなし）に合わせ俳優がずっとあてぶりで口を動かしているので大変だったろうと思う。落語家はそん

なに速いスピードで話しているのかと分かった。落語のベースとなる時代背景などを、映像を通じて理解してもらうという意味で、入門の番組としては成功していたと思う。ただ、ある程度、落語に親しんでいる人間からすると、自分が頭の中で思い描いていたものと違う映像が出てきて違和感があったことも事実だ。また、落語家は、顔の向きなどを使い分けて女性と男性をそれぞれ表現するわけだが、テレビで女性の映像を見ながらだと、男性落語家の声がより太く低く感じ、違和感があった。ブラッシュアップし、落語の層を広げるチャレンジをし、さらによい番組にしていってほしい。

○　１０月１９日(水)の「超入門！落語　ＴＨＥ　ＭＯＶＩＥ」を見た。内容はとてもおもしろいと思った。入門、初心者用とする必要がないと思う。実際の長屋の幅など細部にまでこだわり、「超リアル落語入門」のようにしたほうがおもしろいと思う。冒頭で、「落語というと敷居が高い、楽しみ方が分からないという方も多いと思います」というようなコメントがあったが、こうした言い方はやめてもらいたい。伝統芸能やクラシック音楽に対し、テレビは往々にしてそういう入り口を先に作ってしまいがちだ。それは先入観を与えすぎると思う。おもしろいと言えばそれですむ話で、ああいう前振りは改善してほしい。伝統芸能、クラシック音楽が身近でなくなっている。身近でない人たちに向けてかみ砕いて紹介する番組を作ってもらいたい。テレビはブームを作る力がある。ブームを作ることによって多様な芸術文化を広げ、多くの人に届けることができる。楽しい試みで、新しい発見、新鮮な魅力を発信していってほしい。

（ＮＨＫ側）

担当者に、ご指摘いただいたことを伝える。

○　１０月１９日(水)の「超入門！落語　ＴＨＥ　ＭＯＶＩＥ」を見た。同日の前の前の番組で、クローズアップ現代＋「“平成落語ブーム”とかけて　若者と解く　その心は！？」を放送していて、違和感のある１日だった。「クローズアップ現代＋」では、「落語家の噺を聞きながら、自分のペースで自由に想像力をかき立てられるのが落語の魅力」というようなことを言っていた。その後の番組で「超入門！落語ＴＨＥ　ＭＯＶＩＥ」を放送するという編成のねらいを教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

「クローズアップ現代＋」は放送日がよく変わるため、ねらってそういう編成にしたわけではない。偶然だが、結果的にはよかったと思っている。

○　土曜ドラマ「夏目漱石の妻」を見た。漱石の妻は悪妻と言われてもいるが、妻の側から漱石を見たら、という立場で描いており、とてもおもしろかった。あの大文豪が、日常生活ではだらしない夫だったなど、家庭の事情が分かり、見応えがあった。ＮＨＫは歴史ドラマが多すぎるので、現代的なドラマをもっと放送してほしい。

○　連続テレビ小説「べっぴんさん」が始まった。前回の「とと姉ちゃん」に対しては辛口だったが、「べっぴんさん」は物語も興味を引くし、ストーリー展開のテンポもよく、毎朝楽しく見ている。新しく連続テレビ小説が始まると、オープニングがどんな曲だろうと楽しみにしているが、「べっぴんさん」のオープニング映像は「とと姉ちゃん」と構成が似ていて、新鮮さを感じず残念だった。２作続けて似たような構成なので現場での情報共有ができていないのかと思った。制作者が似ていると感じなかったのか、疑問だった。

（ＮＨＫ側）

連続テレビ小説「べっぴんさん」のオープニングについて、
スタッフは内容も含め、前作のことをきちんと分析している。
東京と大阪、両方のスタッフが目を光らせてやっているが、
似ているという指摘があったことを重く受け止める。

○　９月２９日(木)から１０月２日(日)に行われた「第４９回日本女子オープンゴルフ選手権」と、１０月１３日(木)から１６日(日)「第８１回日本オープンゴルフ選手権」を見た。ＮＨＫは総合テレビとＢＳ１で、それぞれ４日間しっかりと中継をしていた。女子では１７歳の畑岡奈紗選手が史上初めてアマチュアで優勝するという歴史的な瞬間を見ることができた。男子では松山英樹選手と石川遼選手という人気のあるトッププロが出て、松山選手が優勝した。一部のホールだけでなく、ほぼ完全中継と言えるような形で見せたのはよいと思った。インターネットで結果を知ることはできるが、スポーツ中継はテレビの魅力の一つだと思う。丁寧に作り、時間をじっくりとってくれるＮＨＫの姿勢は大切なことだと思う。今後もいろいろな競技中継を丁寧に作り、テレビにおけるスポーツの役割、位置づけを強固なものにしてほしい。

○　日本のプロバスケットボール、Ｂリーグが華々しくスタートした。県域放送でも、各県のチームの試合を積極的に中継してほしい。Ｂリーグは大都市でない地方にまんべんなく分布し、始めることができたので、地方活性化の観点からも重要なコンテンツだと思う。ホームゲームだけでなく、アウェイであっても、地方同士の

相互中継ができるとおもしろいと思う。Ｂ２リーグも含め、積極的に放送してほしい。

（ＮＨＫ側）

Ｂリーグについては、９月２４日(土)に宇都宮放送局と秋田放送局が「栃木ブレックス」対「秋田ノーザンハピネッツ」（総合 後 1:50～4:10 栃木県域、秋田県域）を相互に中継するなど、地域放送局でも地上波で放送している。

○　Ｅテレの新しい語学番組に感心した。旅をしながら実践的なフレーズを一から学ぶスタイルで、今までにはなかった語学番組だ。旅人は「旅するドイツ語」が別所哲也さん、「旅するイタリア語」が東儀秀樹さん、「旅するフランス語」が常盤貴子さん、「旅するスペイン語」が平岳大さんだ。放送が深夜なので録画しないと見られないが、とてもおもしろい。普通の語学番組では文法、単語、発音に重点が置かれるが、これらの番組はその国の文化とともに覚えられるので飽きがこない。旅人のキャラクターもよい。体験して覚えられることば、旅先でよく出てくることば、文法を解説する時間もある。朝にも放送してもらいたい。今のところは先に挙げた言語だけのようだが、中国語、ハングルもあれば視聴者がもっと増えるのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

制作現場の励みとなる。新番組としては４つの言語でスタートしている。中国語とハングルはまだこのシリーズは放送していない。「テレビで中国語」、「テレビでハングル講座」をそれぞれ放送している。

今回のシリーズの評判がよいのであれば、こういう形をもっと広められることもあると思うので、制作現場に伝える。深夜の放送で見づらいということだが、早朝の５時台、６時台にも再放送している。

○　９月２４日(土)のザ・プレミアム「限界に挑め！天空の超人たち～激走！日本アルプス・２０１６～」（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ　後 9:00～10:59)を見た。「ＧＲＥＡＴ　ＲＡＣＥ～グレートレース～」の派生のような番組だと感じた。今回は個人の情報、人物像の紹介のボリュームが大きかった。それらがあることで番組に入り込んで見ることができた。放送時間をもっと長くしてもらえれば、もっとおもしろく見ること

ができたのではないかと思った。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２８年９月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

９月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、１６日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、水戸放送局の最近の取り組みと今後の予定を報告した。その後、平成２８年度後半期の国内放送番組の編成について説明があり、平成２９年度の番組改定について意見を伺った。続いて、特報首都圏「豪雨と闘う～鬼怒川決壊から１年～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１０月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　髙野孫左ヱ門（(株)吉字屋本店代表取締役社長）
副委員長　伊藤由貴子（神奈川県立音楽堂館長・プロデューサー）
委　　員　岩佐　十良（(株)自遊人代表取締役）
大山　寛（サンファーム・オオヤマ(有)取締役会長）
岡田　芳保（元群馬県立土屋文明記念文学館館長）
国崎　信江（(株)危機管理教育研究所代表）
野老真理子（大里綜合管理（株）代表取締役）
藤木　徳彦（フランス料理店オーナーシェフ）
古澤　宏司（(有)古沢園代表取締役）
山口　晃平（(株)山口楼 専務取締役）

（主な発言）

＜特報首都圏「豪雨と闘う～鬼怒川決壊から１年～」
（総合　９月２日(金)放送）について＞

○　とても興味深く見たが、自分が問題意識として持っていることとは少しずれていると感じた。まず、副題の「闘う」ということばは、ふさわしいのだろうか。災害に対しては、共存というか、災害とともにどうやって生きていくのかという捉え方

のほうがよいのではと考える。また行政の対応を中心とした番組の作り方はどうかと思った。何かあれば行政が避難指示を出し、住民はその指示通りに行動するという図式が、この先も通用するのかという問題意識を持っている。住民がもう少し主体的に自分のこととして動いている様子をもっと映してほしかった。地域の住民一人一人が自分のこととして考え、そうした具体的な取り組みを一つ一つ示すことが励ましになるのではないかと思う。

○　２８分という放送時間の中で、常総市の鬼怒川氾濫から１年たっての行政の防災への取り組み、住民の今を、事細かに、丁寧に切り取って伝えていたように思う。現在の常総市は、市長を先頭に気概を持って防災に取り組んでいるように聞いている。住民の避難、移住による人口流出により、町が少し疲弊していると感じられるが、そういう部分もよく伝えていたと思う。番組の最後には住民の生活の中での笑顔が映し出され、前向きな気持ちになることができた。地元の人たちにとって、テレビに映してもらうことがとても力になるし、それがＮＨＫの役割の一つだと思う。常総市、市民をこれからも取り上げてもらい、１、２回で済ますことなく、過程もきちんと追って、復興への力添えをしてほしい。

○　当時は、市の対応についての報道もあり、１年たって今の常総市がその教訓をどう生かし防災に取り組んでいるのかということが、冒頭のテーマだった。興味深く市の取り組みを見たが、あの大災害の最前線の当事者にしては、やや緊張感が足りないような印象を受けた。昨年の災害を検証した報告書も作られているようだが、専門家との連携など新たな態勢作りの部分などをもう少し掘り下げてもらえると安心できたかもしれない。新潟県長岡市で住民が主体的に避難経路をチェックしているという紹介は参考になってよかったと思う。一方、東京都の荒川流域の５区が連携し対策を検討しているという話は、画期的なことで大事だとは思うが、常総市のことをもっと知りたかったので、今回の番組には盛り込まなくてもよかったのではないか。常総市の水海道地区の人口流失の話は初めて知り、関心を持って見た。ただ、流出した人がどのようなタイプの人たちで、どのような事情で町を出ざるを得なかったのか、もう少し具体的に見せてほしかった。番組の最後にゲストの群馬大学の片田敏孝教授が、「川の近くは水害、山の近くは土砂崩れ、海の近くは津波など、土地にはそれぞれ特有の災害のリスクがある」と話していた。昔の人は当然それを考え、家を建てていたと思う。災害はいつでも起こることを個々が自覚し、対処する必要があるという思いを改めて強くした。

（ＮＨＫ側）

常総市は、実際に災害の担当者を増員し対策にあたってい

る。また番組で紹介したタイムラインは、いつ避難準備情報、避難指示を出すかなど、自分たちでシミュレーションする工程表のようなもので、常総市では１年前の教訓を経てそうした取り組みを導入している。取材の中で、行政の力だけでは限界があることも見えてきた。今後は、今の行政の態勢が十分なのかという検証、また住民１人１人の防災意識をどう高めていくのかという視点も盛り込まなければいけないと考えている。

○　熊本地震もあり、今年の夏もいろいろな地域で災害、大雨があった。今回、この番組を見て、災害の当事者ではない一般の人がどう感じるのかが気になった。ひと事のように思うのか、あるいは自分のこととして捉え、危機感を抱くことができるのか。いまは大きな災害を前に、行政の指示をただ待っていればよいということではなくなってきていると思う。しかし、現実では、自分で考え行動し、自分で策を練ることができる人は、ごくわずかだと思う。番組を通じて、自分だったらどうするのか、１年前の災害から何を学ぶのか、視聴者に危機感を持たせ、もっと自分のこととして考えさせる作りにしてほしいと思った。テレビでも、こうしたらよい、こうするべき、こんなことが必要と、視聴者に向かって言い切ることも時には大事だと思う。テレビには紙では伝えられないような訴え方があると思う。全国どこでも災害は起きる可能性があるので、今回のような番組はいろいろな地域でやってもらうとよい。

（ＮＨＫ側）

番組の中では前半のＶＴＲで、新潟の長岡市のケースを取材しているが、あの地区も以前から水害、土砂災害のリスクがとても高い地域だった。行政による防災ハザードマップを、住民の皆さんが自らの目線で検証し、改めて危険な場所や避難ルートを主体的に考えた取り組みを取材した。このようなパートを通じ、できるだけ視聴者に自らのこととして考えていただくようにしたつもりだ。それがどこまで十分に伝わったか、いろいろな見方があると思うので、頂いた意見を参考にし、今後に生かしていく。

○　今の日本人が漠然と恐怖を感じる最たるものとして、人口減少と災害の２つが挙げられると思う。この番組は、その２つが同時に起きるとどうなるのかという、日本人が直面する重要な問題提起をしていると思った。昔は、地震や洪水、大火事で

町がなくなってしまうことがあったと思うが、日本人はそのようなことを久しく忘れていた気がする。しかし、この時代、特に地方においては、災害が起こったその先に現実に人口減少まで起きるということ、そうした視点をもっと掘り下げてもらうと、さらに深みが出たと思う。昨年の水害の後、空き部屋が埋まらないアパートの話があったが、本当に水害だけが理由なのか、どうして常総市から出ていったのか、市に残っている方は水害をどう考えているのか。２８分という短い放送時間なので限界もあるだろうが、そうした部分をもっと掘り下げてほしかった。災害による一時的な被害だけではない、その先にあるいっそう怖いものを感じさせる番組であり、さらに警鐘を鳴らすような続編ができるとよいと思った。

（ＮＨＫ側）

誰がどのような理由で市から出ていかざるを得ないのかについても取材していたが、当事者のＶＴＲ出演も含め、もっと放送で紹介できれば、人口流出の問題についてさらに掘り下げることができたかもしれない。常総市は、人口流出にどう対処すればよいのかについても、復興計画の中で議論を始めている。具体化するのはこれからだと思う。継続して伝えられればと思っている。

○　鬼怒川の氾濫があった日には、川上の栃木県でも大きな被害が出た。栃木の県域放送でも、９月９日(金)に「逃げ遅れをどう防ぐか～関東・東北豪雨１年～」という番組を放送していたが、やはり最初の大きなポイントとして行政の対応がクローズアップされていた。今までの経験を超える、想定外のことが起きたとき、どう対応するかが重要だ。今回の水害から学ぶ教訓について、いろいろな地域で対策していると思うが、想定外の大きな災害があったときに、入ってくる情報をどのように生かし、住民に伝達するのかということについては、まだ課題があると思う。そうした流れを理解できるような番組構成であればよかったと思う。自治体の職員が災害の情報を適切に読み取り、判断できるような仕組み、そして住民に効果的に伝達する仕組み作りが、国土交通省や気象庁、報道機関との連携などでできないものかと感じた。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫでは、視聴者の暮らしと安全を守ることに最大限の力を入れている。災害の情報を視聴者に伝達する仕組みということで言えば、６月から「ＮＨＫニュース・防災アプリ」のサービスを始めている。災害情報、天気、ニュースなどが

スマートフォンやタブレットで見られる。テレビのＬ字スーパーによる災害の情報もアプリで同じものが見られるし、大きな災害の時には、態勢を組んでライフライン情報なども提供する。例えば熊本地震などの大災害時には、全国から分厚い広域の応援態勢を敷いて報道にあたるが、特にライフライン情報は、現地でなくても取材することが可能なこともあり、ふだん報道に携わる職員だけでなく、ドラマを作っているディレクターなども一緒になって手厚い態勢で情報を出している。このアプリをダウンロードしてもらえれば、大災害時にそうした情報をスマートフォンで得ることができる。さらにより見やすく、分かりやすく、より早く情報を提供できるように日々検討を重ねている。誰でも、無料でダウンロードいただけるので、ぜひ使っていただきたい。

○　今の話はＮＨＫ独自の取り組みかと思う。自治体の担当者と話をしていて、一番の課題は、雨雲レーダーを見ても避難などの対応をどうするか適切に判断ができない、それだけのノウハウがないということだと感じた。大雨があったときに、国土交通省、気象庁を含め、しかるべき機関がもっと詳しい情報を提供したり、注意を促したりすれば、市町村もいち早く判断できるのではと思う。報道機関としての役割とは異なる問題かもしれないが、さまざまな機関の連携は必要だと感じる。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫが独自に避難準備情報、避難勧告、避難指示を出すわけにいかないが、そうした情報を行政が出した場合には、あらゆる手段で速やかに伝えている。そして、いっそうきめ細かに伝えられるよう努めている。なお、「ＮＨＫニュース・防災アプリ」では、自分の住む地域を設定できるようになっており、雨雲データマップで自分の住む地域に雨雲がどれだけ近づいているのかも分かるようになっている。

今回の「特報首都圏」でも取り上げているが、国土交通省は、携帯電話事業者と連携し、エリアメール・緊急速報メールという形で、地域を指定して災害の情報がユーザーに自動で届くような仕組みを作っている。番組で紹介したように、河川の氾濫など洪水情報についても、常総市などでこの仕組みを使った配信が始まり、順次、拡大されることになってい

るなど、国の取り組みも広がっているようだ。自治体とＮＨＫの連携ということで言うと、災害情報共有システム・Ｌアラートというシステムを通じて、ＮＨＫは自治体が出す避難情報などを受信し、Ｌ字放送、データ放送、インターネットなどでも迅速に伝えていて、視聴者がさまざまな手段でより早く防災・減災のための情報を得られるようにしている。

○　命が失われた、避難指示が遅れた、逃げ遅れたという印象的なオープニングがあり、１年前の被害の教訓を踏まえた防災対策の話があるのだろうと期待した。しかし、最後まで常総市の被害を教訓とする十分な対策を見いだすことができなかったように思う。番組ではタイムラインの導入を伝えていたが、肝心なのは情報収集と、その情報に基づいて適切な判断ができるのか、という点で、番組で紹介していた市の担当者のコメントを見ても課題を克服できているとは思えなかった。その点についての対策も、国土交通省の緊急速報メールの紹介だけで残念だった。住民の避難検証の動きでは、常総市民がどう動くのかと期待したが、番組では新潟県長岡市の蓮花寺地区の取り組みを紹介しており、常総市の対策の検証には至らなかった。東京都の荒川流域５区の広域避難の連携も、何が壮大なプロジェクトなのかという具体的な説明を、ゲストの片田教授からもっと引き出すべきで、もったいなかった。人口流失については、空き地、空き部屋の活用の話も出たが、地域の再生にどう役に立つのかが説明不足だった。またゲストの羽田美智子さんからも発言があったが、企業は何をするべきなのかについてもあいまいだった。全体的に、明確な対策を伝えきれぬまま、最後は住民への安易な励ましで片づけているような気がして、何を伝えようとしているのか分からなかった。なお、静岡市の職員が常総市の教訓から学ぼうと現場視察に訪れている部分で、防災の分野で有名な牛山素行教授がその場にいて発言されていたが、何の紹介もなかった。牛山教授が静岡市の職員であるかのような誤解をされてしまうのではないかと懸念した。

（ＮＨＫ側）

牛山教授の部分は、時間の制約もあり最終的な分量調整で短くなってしまったこともある。そのような受け取り方をされる方もいるかもしれないということで、もう少し丁寧に紹介するなど工夫が必要だったかもしれない。またほかにもご指摘いただいたご意見を生かし、今後はいっそう具体的に、分かりやすく伝えられるようにしていきたい。

○　常総市の被害の状況が、当時ニュースで見たもの以上に、まるで初めて見たかの

ように、リアルに伝わってきた。人口流出など負の連鎖についてもよい問題提起だったが、さらに具体化して掘り下げてくれるとよかった。タイムラインの取り組みの紹介については、気象庁との連携も含めもう少し具体的にしてほしかった。ゲストの群馬大学の片田教授は、よい問題提起をしてくれたが、もっと具体的なコメントもほしかった。こうした大規模な災害を前に、個人がいかに判断し、行動したらよいのかを、ふだんから番組を通し伝えることは重要なことだ。ただ地方の場合は、東西南北に大きな市町村も多く、同じ市町村でも地域ごとに雨や被害の状況、避難のあり方も変わってくる。そうしたきめ細かな情報の出し方も今後は大事になってくると思う。ＮＨＫでも、もう少しきめ細かく情報を放送してくれるとありがたい。

○　ほかの委員の意見を聞きながら、「特報首都圏」とはどのような位置づけの番組なのか考えた。“特報”だから、そのタイミングで、今ある課題を、ある程度、目次的に提示し、視聴者にとっかかりのようなものを作るという意味では、今回の作りは致し方ないかと思った。構成の面で、分かりにくさは散見された。なぜ新潟県や静岡県などほかの地域の例が出てきたのか、いろいろな角度から災害への取り組みを紹介するという意味があるのだろうが、もう少し整理して伝えることが必要だとも思った。災害が引き金となった人口流出の問題については、災害がそもそもの原因ではなく、その前からまた別の要因が根底にあったのではないかとも思う。そのあたりはもっと突っ込み、検証したらよかった。人口流出や高齢化など負の連鎖については、羽田美智子さんの「もうひと事ではなくなった」ということばに集約されると思う。今回の番組は、ひと事ではない大きな問題を、できるだけ多くの人に感じてもらおうと、短い放送時間に情報を集約した目次的なものだと理解した。今後は個別に、別の番組で詳細に検証してほしい。ゲストの片田教授、羽田さんのコメントは分かりやすくてよかった。スタジオで男性が３人で話すよりは、羽田さんのようなやわらかい女性が１人いるのは身近に感じられた。

○　「豪雨と闘う」という副題が、ギャップを生み出しているのだろうと思う。実際は、「豪雨の爪痕」、「豪雨の残したもの」というような内容だったように感じた。最後、頑張ろうという精神論でまとめられていたのは残念だった。　“想定外の出来事”という逃げで片づけられている節がところどころに出てきている感じがした。原因の究明は必要だろうと思う。また災害への対策は、行政が与えるものではなく、住民と行政が一緒になって作るものだという、公共についてのパラダイムが変わってきたという切り口を持ってもよかったのではないか。想定外を想定外でなくすためには、災害から１年という節目に限らず、さまざまな番組で取り上げていってもらいたい。今回の番組の解説で、避難勧告、避難指示の違いをきちんと知ることが

できた。こうした用語の理解を深めるためには、例えばバラエティー番組などでも取り上げ、印象深く意識づけるなど、さまざまな方法があると感じた。

（ＮＨＫ側）

本日は貴重な意見をありがたく思う。走りながら考えたことが多い番組だ。こういう視点が必要だった、あるいは掘り下げ方が足りない部分があったなど、皆さんからの意見で分かったことがあり、感謝している。今回の番組は災害から１年というタイミングでの企画だったが、被災地の皆さんからすれば、依然として苦しい生活を送っている方がたくさんいる。また災害の教訓がどう生かされていくのかも、ずっと追っていかねばならないことだと思う。常総市は今後、具体的な訓練を増やす予定だと聞いている。住民参加型で、特に水害を意識した訓練を考えているようだ。そういうことも継続的に、県域のニュースはもちろん、さまざまな場で伝えることが必要だと思う。人口流失については、背景をより深く掘り下げ、住民や行政がどのような形でこの問題に向き合うのかも、丁寧にフォローし伝える責任がある。今日頂いた意見を踏まえ、今後も継続的に取り上げていく。

＜放送番組一般について＞

○　リオデジャネイロオリンピックは、出てくる選手たちのはつらつとしたひたむきな頑張り、喜び、涙に、どれほど励まされ、勇気をもらえたかと思う。ＮＨＫ以外の放送局でも放送していたが、ＮＨＫの放送がよいと思った。おもしろおかしくではなく、きちんと競技や選手を捉えていた。リオデジャネイロパラリンピックも、はつらつと競技に向き合うところをきちんと映していることがよかった。選手一人一人の顔をしっかりと映しており、優しさを感じる。

○　リオデジャネイロオリンピック・パラリンピックについては、正直、当初はあまり興味がなかったが、実際に始まると各種目の選手たちの活躍で毎晩のように感動した。ＮＨＫのオリンピックの関連番組はよくできていた。事前の関連番組で、競技の前に選手のバックグラウンドを知っていたことで、より競技中継を感情移入して見ることができた気がする。パラリンピックは今回大幅に放送時間が増え、いろいろな競技を堪能した。特に走り幅跳びの中西麻耶選手の豪快な跳躍に魅了された。

車いすバスケットボールの放送には注文がある。この競技は、障害の度合いによって選手ごとに持ち点が決められ、コート上で合計１４点以内の選手たちでチームを構成する。持ち点の低いローポインターがハイポインターの選手に向かっていくなど、そうしたところも見どころの一つとなっているので、試合中に選手の持ち点をテロップでもっと出してほしい。そうすることで、選手の個性が鮮明に映し出されるのではないだろうか。

関連番組で言うと、８月３日(水)放送の「監督メシ～サラメシ・リオ五輪応援スペシャル～」(総合 後 10:25～11:14)は、選手だけではなく、監督のお昼ごはんも特集するなど、オリンピックの開催前に興味を引き付けたのは効果的だったと思う。

○　４年に一度のオリンピックは子どものころからずっと楽しみに見ている。今年も日本選手の活躍があり、とてもよかった。ＮＨＫさいたま放送局で、スーパーハイビジョンの試験放送でも見たが、迫力と臨場感がすばらしいと感じた。2020 年のころには普及するとよいと思った。パラリンピックについては、放送時間を拡充していた。ニュースで結果だけを知るよりも、中継で競技を見るとその印象が大いに変わり、テレビの力を再認識させられた。パラリンピックに関係する選手の中からスターが生まれるのではないかという気がした。障害者スポーツに対する理解が、今回のリオデジャネイロパラリンピックで深まったのではないかと思う。ボッチャ、ゴールボールなど、よく見るとおもしろく、興味深い競技がたくさんあることを知った。長時間放送した効果はあると思った。

○　リオデジャネイロオリンピック・パラリンピックが始まる前には、不安材料も報道されていたが、いざスタートすれば、見応えがあり、日本人のメダルラッシュもあり、くぎづけになった。ＮＨＫは解説がうまいと感じた。特に水泳の岩崎恭子さん、柔道の山口香さんは、練習の工夫、練習量、選手の心理面など、われわれが分からない部分をうまく解説しており、競技に引き込まれた。

一方でこの８月、日中は第９８回全国高等学校野球選手権大会の中継もあった。オリンピックの陰に隠れて栃木県の作新学院の５４年ぶりの優勝が薄くなってしまったのは少し残念だった。県域放送では、８月２６日(金)に放送した「作新学院５４年ぶり頂点　決勝ダイジェスト」(総合 後 7:30～8:43)を見た。決勝戦だけでなく、そのほかの試合も紹介できればなおよかった。地域のスポーツで言うと、男子プロバスケットボール「Ｂリーグ」の栃木ブレックスの試合も中継があるとのことで、県域での放送が少しずつ増えてきた印象を受けている。

○　リオデジャネイロオリンピックでは、2020 年の東京オリンピックを見据えて経験を積ませる意味で、若い人が多く現地に入っているのではないかという印象を受

けた。例えば開会式と閉会式の中継はしどろもどろの感じがした。視聴者は真剣に見ているので、もっと訓練をしっかり積んでもらえるとよいと思った。

○　パラリンピックは過剰な演出もなく、落ち着いて見ることができ、選手の戦いそのものに引き込まれ感動した。その一方でオリンピックの放送は、にぎやかすぎた。民放とほとんど変わらないテンションで、疲れてしまうところがあった。現地にいるキャスターは、興奮冷めやらぬ会場の雰囲気を、日本の視聴者と共有したいということかもしれないが、「すばらしい」、「感動した」というコメントには、感動や興奮を押しつけられているように感じた。またメダルを獲得できた選手とそうでない選手の報道格差を感じることもあった。４年後の東京オリンピックの放送を見据え、演出、コメントについて改めて検証してもらいたい。視聴者それぞれに感動のポイントは違うと思うので、一方的に押しつけるのではなく、視聴者それぞれが自分の感動するポイントを見つけ堪能できるような放送をお願いしたい。

（ＮＨＫ側）

放送では最終的には一つの伝え方しか選べないので、テレビを見ている大多数の方に受け入れられるであろう伝え方を模索しながら放送している。さまざまな価値観の視聴者がいる中で、すべての方に満足いただくことは難しいと思う。競技によっては日本の放送局ということでＮＨＫと民放のアナウンサーと一緒になってやっていたりもするので、伝え方も似たように感じられたのかもしれない。今回オリンピックの見られ方の調査をしたところ、３０代から下の世代では、オリンピックの放送よりも、ふだん自分たちが見ている番組のほうをリアルタイムで見ている人が多いことが分かった。その人たちの多くは、インターネットの動画サイトなどでハイライトなどを見ていたようだ。情報を受け取る方法も、時間も、場所も、多様化している。視聴者の受け取り方がいっそう多様化している中、こちらの伝え方も多様に研究していかなければならないと痛感した。前回のロンドン大会の時は、ＮＨＫもインターネットではそこまで多く競技のもようを伝えていなかったが、今回はロンドンに比べ格段にインターネットサービスを充実させたこともあって、そうしたことが明らかになった。４年後の東京オリンピック・パラリンピックは、時差がなく平日の日中にもリアルタイムで多くの競技を伝えることになるが、視聴者がどのような形で視聴するの

か、初めて体験する。今回のオリンピック・パラリンピックを通じて得たことを基にさらに想像力を膨らませ、選手の活躍の感動を素直に伝えたい。押しつけなくても十分に感動できると思うので、そういった伝え方の研究をこれからしていく。４年後を楽しみにしていてほしい。

○　８月の戦争関連番組を注目して見た。８月６日(土)のＮＨＫスペシャル「決断なき原爆投下～米大統領　７１年目の真実～」は、トルーマン大統領が戦争を早く終わらせるために原爆を投下したと聞かされてきたが、アメリカの軍部主導による原爆の効果検証の意図があったことなどが、さまざまな資料で明らかになり驚いた。また８月２０日(土)のＮＨＫスペシャル「沖縄　空白の１年～“基地の島”はこうして生まれた～」も見応えがあった。1945 年から１年間、沖縄住民の約９割が１２の収容所に押し込められ、そのうち 6400 人がマラリア、飢えで死んだ事実や、アメリカでも国務省側と統合参謀本部とで沖縄の扱いに関する対立が起きていたことなど、初めて知った。８月１３日(土)のＥＴＶ特集「加藤周一　その青春と戦争」もよかった。加藤さんが１７歳から２２歳のころに書いたノートを、現在の立命館大学の学生たちが読み、討論していた。加藤さんが訴えていたことは、知識人の役割だ。みんなが戦争に反対と言っていても、実際に戦争が始まると、流れに逆らえなくなってしまう。今の憲法９条の問題、学生の生き方、知識人の生き方に警告を発していると思う。もっと早い時間に再放送するなどし、若い人にも見てもらいたい。

○　８月２０日(土)のＮＨＫスペシャル「沖縄　空白の１年～“基地の島”はこうして生まれた～」には大変驚いた。今になって機密文書が公開されるなど、今だから明らかになる事実もあると思うので、これからもそうした事実を生かした番組を作ってほしい。また８月４日(木)の「あさイチ」で、「平和はどのようにして失われるのか？」という特集を放送していた。シリア、イラク、ミャンマーで実際に戦争を体験し、今日本に住んでいる外国人が、自ら体験した戦争について語っていた。私の世代は戦争を知らないが、「あさイチ」という身近な番組での放送ということもあり、リアリティーをもって見ることができた。まさに今、世界で起きている戦争をリアルに感じさせてくれた。柳澤秀夫解説委員が、「その事実は本当なのか、今言われていることは本当なのかとチェックすることがわれわれの役割である」ということを言っており、その発言とともによい番組だと思った。特に戦争関係の特集では、リアリティーを大事にしてほしい。

○　９月３日(土)のＮＨＫスペシャル「ドラマ　戦艦武蔵」を見た。シナリオにはも

の足りなさを感じた。またフィリピンで戦艦武蔵が７１年ぶりに発見された、という現実の報道があったので、ドラマの中でももっとそのことにフォーカスすればよかったと思う。役者がよく、特に石原さとみさんがすばらしく、全体としてはよいドラマであったと思う。

○　８月７日(日)のＮＨＫスペシャル　大アマゾン　最後の秘境　第４集「最後のイゾラド　森の果て　道の人々」を見た。現代において、いまだに文明社会と交わらない原住民が存在し、また村を襲うという行為をしていることは衝撃的だった。最初は映画を見るような感覚で見ていた。常識の範囲で対話をすることができないような原住民と取材者がコンタクトするシーンなど、手に汗を握るような場面の連続だった。

○　８月８日(月)のＮＨＫスペシャル「象徴天皇　模索の歳月」(総合 後8:00～8:55)を見た。この日の午後に、天皇陛下のお気持ちの表明の放送があったが、ちょうどその夜に特集していた。天皇陛下のおことばを受け止めた後ということもあり、何度も涙がこぼれる場面があった。番組は天皇陛下の人となりをしっかりと映し出していた。そして、おことばの裏にあるものをしっかりと伝えてくれたことに感謝している。

○　９月４日(日)のＮＨＫスペシャル　ＭＥＧＡ　ＣＲＩＳＩＳ　巨大危機　第１集「異常気象との闘い」を見た。異常気象が起こる現象をうまくとらえた番組だった。温暖化によって水蒸気の量が多くなり大雨が降るとはよく言われているが、今回は北極圏の永久凍土に着目していた。永久凍土が温暖化によって溶け出すと、堆積していたメタンが発生し、温暖化の加速がさらに予測を超えて進むだろうということだ。全体的にＣＧ、グラフなどをうまく使い、臨場感があった。地球温暖化を食い止め、異常気象を防ぐために、今後の生活をどうしていくのか、考えさせられた。異常気象の中で日本人がどのように今後を考えていくのかを訴えた、中身の濃い番組だった。

○　７月１７日(日)のサキどり↑「新鮮よりおいしい！？広がる“熟成”商品」は、視聴者に誤解を生じさせるおそれがあると感じた。熟成食品ブームということで、２週間熟成させたブリを刺身で提供する飲食店などを紹介していた。素人には難しいと注意喚起はしていたものの、視聴者が安易にまねをしないよう、細心の注意を払う必要があると思う。熟成は腐敗と近いという会話もあったが、確かにそのとおりで、危険な部分ももっと伝えたほうがよいと思った。

（ＮＨＫ側）

一般の人がまねをすると危険だという注意喚起については、程度が適切だったかしっかりと検証する。

○　７月２５日(月)のクローズアップ現代＋「私はＡＶ出演を強要された～“普通の子”が狙われる～」が印象に残った。あの問題はほかのテレビ、雑誌、新聞では話題になっていたのだろうか。ＮＨＫが初めて切り込んだ話題とすればすごいと思う。被害件数の報告があったが、表面化していないものも含めると１０倍以上あるのではないか。事件の性格として、表になかなか出てきづらいと思う。契約書も、もっといろいろな内容があるのだと思う。振り込め詐欺についてはありとあらゆるところで警鐘が鳴らされているが、今回の問題についても、継続的に取り上げてもらいたい。それほど重大なテーマだと思う。警察はこうした事件すべてを取り締まるすべはないと言う。そうであれば、マスコミが注意を促すことは重要なことだ。久しぶりに背筋が寒くなり、衝撃を受けた番組だった。

（ＮＨＫ側）

番組でもあったように、被害者を支援する団体にここ３年間で 150 件の相談があったという。広がりのある重大な問題であり、断片的にはこの番組よりも前にニュースなどで報道されている。ただ、すべての番組を見たわけではないが、この番組のように２５分という時間をかけ、裏にある契約の実態、なぜそういうことが広がっているのかというＡＶ業界の裏まで掘り下げたものは、ないと思っている。

○　「キッチンが走る！」は魅力的な番組だと思うが、　９月４日(日)放送の、キッチンが走る！にっぽん全国食材図鑑　第２集「豚肉」(総合 後 4:45～5:00)もおもしろかった。放送時間が１５分と短いこともあり、ふだんの「キッチンが走る！」とどこが違うのかと思って見ていたが、一つの食材“豚肉”にスポットを当て、沖縄、茨城、宮城、それぞれの産地の豚の魅力を紹介していた。また出来上がった料理を紹介するだけでなく、料理人が豚をよりおいしくするポイントを、短く分かりやすく説明していた。ちょっとした知恵だが、プロの料理人が作るすごい料理ではなく、家庭で料理する人にとって分かりやすく、身近なポイントを伝えており、よかった。

○　８月２８日(日)のバリバラ　生放送「検証！＜障害者×感動＞の方程式」を見た。タイトルの印象とは異なり、多様性を認める社会の形成について、障害者の視点を

通じて正面から考えさせる、おもしろい番組だった。健常者の障害者に対する非日常的な見方や価値観を、いかに修正していくかという意味で、メディアの責任と役割を問いかけた番組だと受け止めた。なお、ＮＨＫの制作の現場には、このような番組を作る役割を持つ、障害のある職員はいるのか。

（ＮＨＫ側）

Ｅテレの「ハートネットＴＶ」をはじめとした文化・福祉番組のセクションなど、障害のある職員が番組制作の場で活躍している。また東京パラリンピックに向け事務局を立ち上げているが、その中心部分で障害のある職員が元気に働いている。

○　７月３０日(土)のザ・プレミアム「寅さん、何考えていたの？～渥美清・心の旅路～」（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 9:00～10:29)を見た。自分の両親が大好きなので一緒に見た。国民的スターの情報を、没後２０年たっても伝え続けてもらえるのは、ＮＨＫならではと感じた。

○　ＮＨＫ千葉放送局で、スーパーハイビジョンの試験放送を見た。技術の進歩について考えさせられ、美しい映像を堪能させてもらった。

○　スーパーハイビジョンは、その超高精細な映像により、医療関係や教育関係、広告などはすぐにでも波及効果が期待されているという話も聞いた。ＮＨＫは放送番組だけでなく、そうした先端技術の面でも大きな役割を果たしていることは、いろいろなところでもっとアピールしてもよいのではないかと思った。

○　豊洲市場問題について、連日のように新しいニュースが報道されている。石原慎太郎さん、猪瀬直樹さん、舛添要一さんという歴代の都知事の時には問題にならなかった事案を、どうして新都知事の小池百合子さんが明らかにできたのかという視点で、ＮＨＫには取材してもらいたい。これは豊洲市場だけではなく、今後の都政、わが国の地方公共団体における行政のあり方の検証に資する問題だと思う。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２８年７月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

７月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、２２日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、７人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「平成２８年度国内放送番組編成計画（スーパーハイビジョン試験放送)」について説明があった。続いて、ＮＨＫニュース　おはよう日本　シリーズ「セーフティーネットの模索」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、視聴者意向報告と放送番組モニター報告、８月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　髙野孫左ヱ門（(株)吉字屋本店代表取締役社長）
副委員長　伊藤由貴子（神奈川県立音楽堂館長・プロデューサー）
委　員　岩佐　十良（(株)自遊人代表取締役）
大山　寛（サンファーム・オオヤマ(有)取締役会長）
岡田　芳保（元群馬県立土屋文明記念文学館館長）
古澤　宏司（(有)古沢園代表取締役）
山口　晃平（(株)山口楼 専務取締役）

（主な発言）

＜ＮＨＫニュース　おはよう日本　シリーズ「セーフティーネットの模索」
（総合　６月７日(火)～１０日（金）放送）について＞

○　「ＮＨＫスペシャル」などでもたびたび企画されているように、高齢者の貧困が問題になっている。その一方で、若い人においてもいろいろな意味で貧困で苦労している人が増えているという現実がある。今回シリーズでまとめて取り上げたことは、そうした現状を伝える意味でよかった。それぞれの現場で、自治体やＮＰＯ法人の皆さんが地域の課題に向き合って親身になり対応されている姿がとてもよく伝わってきた。「“相棒”とともに地域を守れ」では１人１人の生活、生きることにまで踏み込んでしっかりと対応している様子が目を引いた。民生委員の協力者が

高齢者を後ろから見守るようにしているシーンがあり、それを肩越しに映すカメラマンの気遣いに感心した。「貧困連鎖を断て　カギは“気づき”」では貧困の連鎖を断ちきろうと子どもたちをサポートする川崎市のＮＰＯを取り上げていた。相手の気持ちになって丁寧に対応していて、すばらしい活動という印象を受けた。テーマが重いためじっと見入ってしまったが、番組作りの視点から見ると、貧困の状況におかれている子が実際にどのぐらいいるのかというような比率、推移のような前提条件を示すグラフなどが冒頭に示されればもう少し分かりやすかったと思う。「子どもたちの学びの場　どう確保？」では、空き会議室などをフリースクールのスペースとして提供している企業が紹介されており、新しい地域貢献の方法の一つだと思った。こうした企画をＮＨＫで放送することによって、関わっている人たちの励みにもなり、事業を応援する人も増えると感じる。それぞれの地域のすばらしい活動をたくさん拾っていただいたことはよかったと思う。

○　いろいろな形でセーフティーネットについて啓発しており興味深く見た。気になったのは、貧困の若者へのアドバイスが“進学”を重視しすぎているように感じたことだ。大学を卒業しても貧困の方はいる。働き方・職業の多様性をもう少し幅広く紹介してほしかった。今の子どもたちは、親の視野が狭いことなども影響し、正規雇用でなければいけないという重圧で心の病にかかってしまう事例も多々あると聞く。そういう点にも気をつけてほしいし、幅広く多様な働き方があるということを、多岐にわたって提案していってもらいたい。こうしたシリーズを続けることがセーフティーネットの構築につながるので、今後もぜひ続けてほしい。

○　最近は格差、高齢化、少子化など、いろいろな社会問題があり、その一つ一つを取り上げたのかと思う。民生委員協力員制度を紹介した「“相棒”とともに地域を守れ」については、この取り組みが全国的に広がり、民生委員や自治会などの方の仕事の負担が少しでも軽くなればと思った。心のこもった活動ができるような環境づくりが必要だと感じた。また、若者支援の企画については、親が自分の枠の中に子どもをはめこもうとするのではなく、自由に職業の選択ができるような環境、夢を追えるような就職の仕方があれば、若者と地域とのつながりも広がると思った。全体として課題をうまく伝え、視聴者に知ってもらう工夫をしている点がよかった。ほかにも介護の問題などいろいろあると思うので、こうした社会問題を続けて取り上げ、共通の理解を持てるようにしてもらいたい。貧困からなかなか抜け出せない、進学ができないなど様々な事情で苦悩する若い世代にとって、番組で取り上げた成功例は参考になると思う。社会問題をうまく取り上げ、元気に前向きになれるような番組を作っていってほしい。

○　深刻な問題がたくさんあったが、短い時間のなかでよくまとめて問題提起していたと思う。「“相棒”とともに地域を守れ」では高齢化に伴う地域の課題、現状をよく取材していた。自分のそばに民生委員が住んでいても意外と知らず、どう相談すればよいのかが分からない。私の家の周りにも救急車が来ない日はないぐらいに高齢の方が住んでいて、民生委員はずいぶん活躍していると思うが、地域の民生委員の顔はあまり見えてこない。民生委員が地域でどのように活躍されているのかはもっと具体的にやってほしかった。「貧困連鎖を断て　カギは“気づき”」では小学校時代から１日３食は食べられない、学費が出せないなど、貧困の格差が相当出ていることを伝えていた。そうした子たちを支えているＮＰＯの取り組みはもっと評価されるべきだし、もっと具体的に紹介するとよいと思った。「子どもたちの学びの場　どう確保？」では企業や居酒屋などの空いているスペースを借りてフリースクールを運営しているＮＰＯの取り組みを紹介していた。企業の経営者と地域の人の声が具体的に紹介されていて実情がよく分かった。「児童養護施設から自立へ若者を支援」も見応えがあった。児童養護施設で育った女性が「過去があるから今につながっているということに気づき始め、自分を受け入れられるようになった」と言っていたが、重いことばだと感じた。短い時間だったが、いずれも現実をリアルに伝えていたと思う。現代社会の抱える問題を４回にわたって提起したことは、マスメディアとして行政と民間の橋渡しになると思った。

○　どの回も中身がとても濃く、短い時間の中に内容が詰まっていると感じた。朝の時間ではどうかというぐらい深刻で重い話だった。朝は忙しいので歯磨きをしながら、ごはんを食べながらなど、いろいろな動きがある。夜の「ＮＨＫスペシャル」などの番組と連動し、そのさわりとしての予告編、というような形でもいいのではと思った。「“相棒”とともに地域を守れ」の視聴後、民生委員がどういう仕組みになっていて、どういう問題があるのかをインターネットで自ら調べた。そうしたことを考えても、もっと長い放送枠で、視聴するのに余裕のある時間帯がよいのかと思った。「子どもたちの学び場　どう確保？」では子どもたちの学び場としてスペースを開放していた居酒屋の企業名が出ていた。通常は企業名が出てこないと思っていたが、よいことであれば企業名をどんどん出すという方針なのか。

（ＮＨＫ側）

ご指摘のとおり、長い時間で放送する、また夜の時間帯での放送なども大いにありうると思う。こうしたシリーズ企画を発展させ番組にすることもあるので、今後は「特報首都圏」などまとまった番組として放送することも含め検討したい。「おはよう日本」の７時４５分からの関東甲信越の地域放送

枠では、重いテーマのものだけでなくさまざまなテーマで企画をやっている。今回は、関東甲信越の各局のディレクターたちがこうした問題を広く伝えたいという意思もあり、一緒になって発信できたことは大事だと思っている。

企業名については、コメント上では居酒屋と言っていたが、視聴者が「この店はどこなのだろう」という疑問や関心を持たれるだろうということで、必要な情報提供という意味でテロップを入れた。企業名の表示については、公共放送としてＮＨＫ放送ガイドラインに従って、それぞれの編集責任者の判断で行っている。

できるだけバラエティーに富んだ内容でいろいろなものを伝えたいという思いがあった。「おはよう日本」の７時４５分からの関東甲信越の枠では、重いものだけではなく、各地域からその季節ならではの魅力を中継で伝えるシリーズ企画などもあり、地域の朝の雰囲気を伝えている。首都圏放送センターでは「金曜ｅｙｅ」という７３分の番組を年に８本程度制作しており、「おはよう日本」の地域の企画と連動させ、７３分で詳しく伝えるというようなこともやっている。

企業の固有名詞については、視聴者への情報提供の意味で出したほうがよいだろうということがある。今回は場所を探しているＮＰＯの方や、同様の活動をしている方などにとって有益な情報になるという判断があった。そのあたりは、ケース・バイ・ケースで判断している。

○　ちょうど朝食の時間と重なっていることもあるが、「おはよう日本」のこの時間の地域の企画はよく見ている。朝忙しい時間帯なので何かをしながら見ていることがほとんどで、じっと見ていることはたぶんありえない。その中で気になるもの、引っかかるものがあれば、それがその後で考えるヒントになる、というたぐいの番組なのだと思った。「ちょっとした援助、アイデアで人々の生活、世の中が変わることもある」ということを、少しずつ伝えていくために意義がある企画だと思う。こうした事例は日本中、首都圏だけでもごまんとあると思うし、４回では描ききれない分量があると思うので、４回で完結する話ではなく、小出しにして続けていってほしい。またそれらをまとめてゆっくり見られる時間帯で編成してもらえるとよいのでないかと思う。毎日、悲惨なニュースは山のように流れているわけで、むしろ明るい希望の見える話だったと思う。「こういった取り組みが世の中にあるなら

ば自分も大丈夫かもしれない」と思わせるような、ちょっとしたヒントにつながればよい。

○　地方創生に向け新しい公共のあり方が問われている。そのような大きな時代環境の変化を知らせる内容だった。そして、「崩壊の後に何が生まれるか」ということを伝えていたと思う。「“相棒”とともに地域を守れ」では過疎と高齢化による地域社会、コミュニティーの崩壊を、「貧困連鎖を断て　カギは“気づき”」では貧困やさまざまな事情による親子関係の崩壊を伝えていた。「子どもたちの学びの場どう確保？」は何の崩壊なのかがよく分からなかったが、「児童養護施設から自立へ　若者を支援」では家庭の崩壊を取り上げていた。いずれも何かが壊れようとしているときに人々が立ち上がることが、新しい公共を作っていくのだと感じた。４つの事例は成功事例と言えると思うが、よく見つけたと思う。みんなが困って模索している課題に対してのヒントを、楽しいものも重いものも含め、短時間でショーケースのように見せる手法はよいのではないか。またあの居酒屋がこんなに変わったのかという感慨があった。同時に、そういう変化、対応ができなければ企業は地域社会の中で生きていけないというメッセージにもとれた。漫然と日々努力するのではなく、大きな変化をとらえ自分の足元で変化、実行している企業の一例としても見ることができた。

（ＮＨＫ側）

貴重なご意見をありがたく思う。一つの価値観を最良のゴールと決めつけるのではなく、多様な生き方、多様な働き方、多様な人生への模索に目を配っていきたい。今後もタイムリーに伝えるべきことがあれば、できるだけ地域に根ざした企画を視聴者に近い目線で伝えていければと思う。夜の番組との連動ももっと柔軟にやっていきたい。私は異動で部署が変わったが、いただいた意見は首都圏放送センターの後任にしっかりと伝える。私が担当している番組でも今回頂いた意見をうまく反映させるよう励んでいきたい。

○　短い時間だったが、全国どこでもある課題を正面から受け止めており、情報が凝縮されていた。「“相棒”とともに地域を守れ」では核家族化や多種多様なニーズなどでたいへんな思いをしている多くの民生委員、行政職員に一つの光を与えたと思う。「貧困連鎖を断て　カギは“気づき”」では貧困の連鎖を食い止めようと一人一人に寄り添い、進学をサポートしている事例をありがたく受け止めた。「子どもたちの学びの場　どう確保？」では昼間の居酒屋、会社の空き会議室などを利用し

たフリースクールの運営について伝え、同じ問題を抱える心ある人たちの頼もしいヒントになっただろう。「児童養護施設から自立へ　若者を支援」では心ある人たちの支えのおかげで自分の環境を受け入れ、乗り越えようとする若者の姿を伝えてくれた。今回のシリーズではＮＨＫが地域再生の一助になるという経営方針を、映像を通して受け止めることができた。

＜放送番組一般について＞

○　参議院選挙や、イギリスのＥＵ離脱、トルコのクーデター未遂、バングラデシュの人質事件など世界的にも大きなニュースがあり、報道番組やニュース番組を見る機会が多かった。参議院選挙は選挙権年齢の引き下げがなされる中で、若者に対していかに政治への関心を向け投票行動に移すかということが、いろいろな番組で取り上げられていた。その一方、東京都知事選の話が出て、マスコミ全体で参議院選挙のイメージは薄くなった印象があった。ＮＨＫの選挙番組などを見ているとＮＨＫらしさがあり、公平・公正、正確に発信されていたと思う。昨今のマスコミは劇場型でおもしろおかしく取り上げがちだが、ＮＨＫはＮＨＫらしい番組作り、ニュースを出していると感じる。いろいろな面でマスコミが取り上げることで世論が傾きがちになることもあるので、そのあたりはしっかりした放送を期待している。

○　参議院選挙の特集番組については、民放と比べながら見た。７月９日(土)に放送した「党首は何を訴えたのか～密着　１８日間の戦い～」(総合　後 8:00～9:10)はよかった。７月１０日(日)の「参議院選挙２０１６　開票速報」では、地域の放送局も含めたＮＨＫのネットワークで、具体的に伝えていたのでとてもよく分かった。今回の参議院選挙から選挙権年齢が１８歳に引き下げとなり、「ミレニアル世代」の選挙動向がどうなるのかと注目していた。そういう意味で、７月３日(日)の激動の世界をゆく「若いチカラと政治（前編）寛容な世代の怒り／（後編）変わる民主主義のかたち」をたいへん注目して見た。インターネットが普及した環境に生まれ情報収集能力が高く、共同体への帰属意識が強い世代といわれている「ミレニアル世代」について、大越健介キャスターが伝えていた。欧米の若者たちの考え方、行動に迫っており、政治に無関心といわれた若者たちが世界各地で声を上げていることが分かった。スウェーデンでは２０代の国会議員が全議員の１０％を占めているという。政治は酸素と同じぐらい大事と若者が捉えているそうで、非常に感心した。総務省がまとめた今回の参議院選挙の投票率は、１８歳は５１．１７％、１９歳は３９．６６％という結果だったという。１８歳のほうが多いのは高等学校での教育

が徹底していたからだと思う。親元を離れ１人暮らしをしている大学生や社会人で、住民票を実家から移していないために投票できない人も多くいるようで、そうしたことも選挙の問題として取り上げるとよいと思った。

（ＮＨＫ側）

選挙権年齢の引き下げについては、ご指摘いただいたような選挙関連番組や、日々のニュースの中でも、学校での取り組みなど含めいろいろな動きを取り上げた。投票率が１８歳に比べ１９歳が低いことはニュースで伝えているが、どこにどういう問題があるのかも含め、引き続き取材していく。また選挙報道の伝え方について、公共メディアとしては、有権者の投票行動に資するようなニュースを続けていきたい。まずは視聴者が多角的に判断できる材料になるような情報を取材・提供していければと思っている。

○　参議院選挙の前日、民放のある番組では、最後に「明日は選挙に行きましょう」と言ったそうだ。選挙は行かないと意味がないもので、投票に行くことが大事だと思う。ＮＨＫは投票を呼びかけたのかと気になっている。

（ＮＨＫ側）

「投票に行こう」という呼びかけ、公民権・選挙権行使が大事ということはＮＨＫでも伝えている。選挙権年齢の引き下げのことも含め、参議院選挙では「首都圏ネットワーク」などでお伝えした。関心の高い東京都知事選に向けても、「みんなで投票に行きましょう」と、投票直前の金曜日、「首都圏ネットワーク」で伝えようという話をしている。

○　編成の事情もあると思うが、神奈川、千葉、埼玉などテレビの電波を持っていない県についても、電波を持っている局と同じ程度に、行政や議会に関する番組を作ってもらえるとよい。深夜の放送でも、録画という方法もあるし、選挙権の年齢が下がったこともあり、若い人が興味を持ってそれなりに見るかもしれない。

（ＮＨＫ側）

デジタル総合テレビについては水戸、栃木、茨城、群馬で地域向けの放送を行っている。神奈川、千葉、埼玉についてはテレビの電波を持っていないので、相対的にほかの放送局

よりも番組の発信は少ないのが現実だ。全国放送の番組、あるいは「特報首都圏」といった関東向けの番組やニュースの中で、３県の話題についてもたっぷりと伝えられるよう体制を敷いている。深夜帯での放送については、ご指摘いただいたようなことも念頭に置きたい。

○　６月２６日(日)のＮＨＫスペシャル　古代史ミステリー「“御柱”～最後の“縄文王国”の謎～」は、かなり集中して見た。「この地域の方たちにとってこの祭りにはどういう意味があるのか」という視点で地元の人にお話を聞いていた。外から見える祭りの姿と、実際に関わっている地元の人たちとの意識の差が大きいと感じさせられた。こうした伝統を続けていくのは大変だけれども、明確に人々の生活の中に染みこんでいる祭りはそう簡単に変わるものでないという印象を持った。番組の構成として、今年行われた祭りの様子を見せる部分、祭りの起源となる神話の部分、そして考古学による解説部分が交互に出てきておもしろかった。地域の中で生まれたさまざまな歴史の積み重ねが、地元の人たちにとっての“ハレ”としての祭りを支えており、祭りの原点というべきものを見ることができた。

○　御柱祭については、木を引く道の映像や木落しのシーンなど、ＮＨＫらしい映像の美しさ、迫力を感じた。小宮祭で小さな子どもたちが「木遣り」を歌っている姿をきちんと撮影しており、伝統がきちんと受け継がれていることが感じられてよかった。

○　御柱祭の映像を見てそのリアルさに驚いた。ただ、巨木に込められた意味、なぜ諏訪大社にこの祭りが残っているのか、といった印象はあまり強くは残らなかった。

○　６月１８日(土)、１９日(日)のＮＨＫスペシャル シリーズ　キラーストレス第１回「あなたを蝕(むしば)むストレスの正体～こうして命を守れ～」第２回「ストレスから脳を守れ～最新科学で迫る対処法～」を見た。インパクトのあるタイトルが中身をうまく表現しており、視聴者の気持ちをつかんでいると感じた。スタジオも癒やしに満ちた空間のようで工夫が感じられた。放送後、すぐに番組ホームページでストレスチェックをしたほどで、とても勉強になった。われわれ現代人は常にストレスにさらされており、番組で得た情報を今後に生かせる点がよかった。

○　「ＮＨＫニュース　おはよう日本」の気象情報で気象予報士が「今日は雨がザーザー降りになるでしょう」と言っていた。「雨がザーザー降る」「どしゃ降り」とは言うと思うが、「ザーザー降り」と言うだろうかと引っかかった。ことばはどんどん

変わっていくものではあるが、ＮＨＫは情報を流すと同時にことばの標準軸を作るという機能も果たしていると思う。メディアとして配慮してことばを選んでもらいたい。

（ＮＨＫ側）

ふだんあまり使われないことばをＮＨＫが率先して使うかというと、私たちは保守的な考え方ではないものの、社会の大きな流れに少し後からついていく、ぐらいのことを基本的には考えている。「ザーザー降り」ということばについてはいろいろな受け止め方があると思うが、「本降り」「強い雨」など、幅広い年代の方に分かりやすい表現はほかにもあると思うので、研究していく。

○　ＮＨＫスペシャル「ＭＩＲＡＣＬＥＢＯＤＹ（ミラクルボディー）」を見た。７月１６日(土)に放送した第１回「世界最強の人魚たち～シンクロナイズドスイミング　ロシア代表～」では、オリンピック２連覇をかけたロシア代表の驚異的な人体に驚いた。これからも「ＭＩＲＡＣＬＥＢＯＤＹ（ミラクルボディー）」のシリーズを放送する予定とのことだが、仮に薬物問題に関連してＩＯＣがロシアを排除したときに何か対応は考えられるのか。

（ＮＨＫ側）

番組ではリオデジャネイロオリンピック代表として伝えているので、仮にオリンピックに出られないことになった場合は、コメントを差し替えるなり、いろいろと対応しなければいけないと思う。

○　７月３日(日)のＮＨＫスペシャル「私は家族を殺した～“介護殺人”当事者たちの告白」を見た。暗く、深刻な番組だったが、現実に私たちの周りで起きていることだ。介護を始めてから１年以内に殺害が起きる事件が頻発しているということで、悲しくなった。たいへんな問題だと思う。

○　７月１１日(月)プロフェッショナル　仕事の流儀「革新は、チームで起こす～デジタルクリエイター・猪子寿之～」について。猪子さんは孤高の天才といわれていたそうだが、独創性は個人のものではなく、チームで発揮されるものということに感心した。

○　７月１８日(月)「海洋アドベンチャー　タラ号の大冒険」(総合 後11:15～11:59)では、俳優の西島秀俊さんがタラ号に乗り地球環境の調査に出るのだが、見ていて絶望的な気持ちになった。海水温の上昇など、大きな地球環境の変化が起こっていることが分かり、温暖化はひと事ではない、現実に起こっていることなのだと感じた。

○　７月１９日(火) のクローズアップ現代＋「“ともだち　あなた　戦う心”～永六輔・最期の言葉～」を見た。亡くなった永六輔さんを取り上げており、黒柳徹子さん、加藤登紀子さんなど、青春時代にラジオ、テレビによく出ていた人たちがＶＴＲに出てきて懐かしかった。永六輔さんが作詞した「上を向いて歩こう」も流れていて、時代を感じさせる番組だった。「テレビよりもラジオのほうがことばで人を動かせる」という永六輔さんのこだわり、生きざまが心に残った。テレビ草創期に活躍した人がマスコミになかなか出てこなくなっていることもあり、今回の「クローズアップ現代＋」は興味深く見た。今後も、時代の変化を捉え、過去に活躍した人などを取り上げた番組を放送してほしい。

○　６月２５日(土)の「学び続けたい～夜間学校　１５歳の春～」(総合 後 4:35～5:03)を見た。「特報首都圏」で５月に放送され、評判がよかったので全国放送されたと聞いている。埼玉県川口市で２０年前から開催されている自主夜間中学の生徒と先生を丁寧に描いていたのが印象的だった。主として取り上げられたのが、経済的な事情などで高校受験を一度見合わせたものの、どうしても学校に行きたいと勉強し直している中学３年生の生徒だった。苦しい経済状況のなかで、生徒のモチベーションが下がらないよう応援したり奨学金を探してくれたりする先生の様子、また進学するにあたり父親を説得するところなどよく取材されていた。たいへんな取材だと思うが、信頼関係がきちんとできていると感心した。重いテーマのなかで、桜がつぼみから満開になる描写など、季節感とともに展開を表現している点や、やさしい語り口のナレーションなど、番組全体を丁寧にうまく作り込んでいる気がした。

○　６月１９日(日)のサキどり↑「だまされてニッコリ！“錯覚”最前線」は、人間の錯覚をうまく利用し社会に役立てようというテーマで、興味深く見た。トンネルの急カーブで事故が起きないよう、壁面の模様を変えてドライバーに錯覚を起こし、スローダウンさせたいという阪神高速の事例や、最近はやりの、小顔に見えるようハイライトのつけ方を工夫した化粧など、最先端の技術や生活に役立つ情報もたくさんあって興味深かった。

○　６月２４日(金)の美の壺「和の美の理想郷、小津映画」で小津安二郎作品の美に

ついて紹介していた。これまで小津安二郎さんの映画をあまり見たことがなかったが、「美の壺」を見たこともあって、小津安二郎さんの映画に引き込まれた。紹介のしかたがうまいと思った。

○　７月１３日(水)のＭＬＢオールスターゲーム２０１６「ナショナルリーグ」対「アメリカンリーグ」(ＢＳ１　前8:30～後0:45)を見た。前日の７月１２日(火)のワールドスポーツＭＬＢオールスター特集「データで迫る　スーパープレーヤーの魅力」(ＢＳ１　後11:00～11:50)でオールスターゲーム特集をしており、見どころをたいへん楽しく紹介していた。これを見た人はＭＬＢのファンでなくてもオールスターゲームを楽しく見られたのでないかと思う。

○　Ｅテレの英語の語学番組をよく見ているのだが、そういった番組をスマートフォンなどで見られればと思う。ＮＨＫワールドはアプリで見られるが、国内放送についてもネット配信の環境がいっそう整い、多種多様な番組の楽しみ方ができるようになってほしい。関東ローカルの番組は関東地方でしか見られないが、東北でもよい番組を作っていて、九州でもよい番組を作っていると思うので、ほかの地域の番組もネットを活用して見られるようにはできないのだろうか。

（ＮＨＫ側）

テレビのネット配信に関するご要望は数多くいただいている。現行の放送法では、ネット上で全ての放送番組を同時配信するわけにいかないので、今はネットで配信するための検証実験をしている段階。ＮＨＫオンデマンドではスマートフォン、タブレットなどの端末でも番組を見ることができるので、そちらを利用していただければと思う。またラジオ第２のさまざまな語学番組は「ゴガクル」というサイトで、過去の番組も含めお聴きいただくことができる。

ニュースで放送した内容は「ＮＨＫ　ＮＥＷＳ　ＷＥＢ」でスマートフォン、パソコンで見られる。ニュースに限らず、多彩にネット、スマートフォンで情報を提供している。公共放送から“公共メディア”に、ということで、テレビ、ラジオだけではなく、ネットの分野でも接触率を高めていこうと現状でも努力している。

委員からご要望いただいたようなことは、法改正が必要な

どの課題があるが、将来的にはサービスとして提供したいと思っている。ネットで見ていただければ、興味を持っていることが分かり、関連番組を紹介することもできるなど、双方向性が生まれ視聴者との距離がいっそう近くなると思う。われわれもそのように変えていければと思い、努力を続ける。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２８年６月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

６月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、１７日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、甲府放送局の最近の取り組みと今後の予定の報告について説明があった。続いて、ヤマナシＱＵＥＳＴ「討論ヤマナシＱＵＥＳＴ　人口減少×学生」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、７月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　髙野孫左ヱ門（(株)吉字屋本店代表取締役社長）
副委員長　伊藤由貴子（神奈川県立音楽堂館長・プロデューサー）
委　　員　岩佐　十良（(株)自遊人代表取締役）
大山　寛（サンファーム・オオヤマ(有)取締役会長）
岡田　芳保（元群馬県立土屋文明記念文学館館長）
国崎　信江（(株)危機管理教育研究所代表）
野老真理子（大里綜合管理（株）代表取締役）
藤木　徳彦（フランス料理店オーナーシェフ）
古澤　宏司（(有)古沢園代表取締役）
山口　晃平（(株)山口楼 専務取締役）

（主な発言）

＜ヤマナシＱＵＥＳＴ「討論ヤマナシＱＵＥＳＴ　人口減少×学生」
（総合　５月２０日(金) 後7:30～8:43 山梨県域)について＞

○　討論番組にありがちな中だるみや、話があちらこちらに飛ぶということもなく、テーマも明快でテンポもよく、時間があっという間に感じるすばらしい番組だった。人口減少というテーマは山梨県だけではなく、全国で抱える問題なので、山梨県向けだけの放送ではもったいないし、続編も見てみたいと思った。甲信越地方に向けての放送にして、甲信越全体の問題として考えてもよいのではないかと思った。枠を広げて

全国から集まる形でこうした番組をたくさん作ることは、市民が参加できるという面で重要だと思う。夜７時３０分からの放送は、よい時間だが、どれだけの人が見たのかと気になった。討論番組なので視聴率がよいとは思わないが、視聴率にとらわれずに長く続けほしい。

（ＮＨＫ側）

甲府放送局で作った番組をさらに発展させ、甲信越地方向けの番組や、全国でも共有するような番組の制作も検討していきたい。

○　北関東、甲信越も人口がかなり減少しており、特に若い人が東京圏に流出している。地の利、交通の便などを考えると関東甲信越では東京集中型になっていると実感している。後藤斎山梨県知事をはじめ、地元出身者、日本総合研究所、コンサルタントなど、いろいろな立場の人の発言があり、バランスがよかったと思う。番組に参加した若い人たちの気持ちもうまく伝えられており、番組のつなぎ方や構成もよかったと思う。地方の魅力は大規模な農業という部分もあり、若い人たちの農業に対する考え方も変わってきた。関東甲信越地域の活性化においては農業もひとつのキーワードになると思う。農家でレストランを経営している成功事例があったが、研究、コンサルタントと違い、地元に根づいた成功事例は地域の活性化の参考になると感じた。これからは人口減少と一極集中が進む中で自分たちの地域のよさをうまく表現し、この番組のようによいものが表に出れば地方の活性化につながるという印象を受けた。司会の進行がよく、飽きることなく見ることができた。

（ＮＨＫ側）

今回は山梨県向けの放送だが、インターローカルという複数の局が協力してそれぞれの地域で放送する番組の作り方や、関東甲信越向けの放送、全国放送などいろいろな出し方がある。東京一極集中の中で地方の人口減少などの共通の課題について、広域的に一緒に考える番組や共通のテーマでさらに深めていくという番組も検討していきたい。

○　番組を見て、チャレンジしているし、組み立てがしっかりしていると感じた。どの地域にもまちづくりをしている人がいるので、こういう番組が取り上げられたことはよかった。できる人ができることを行っていく以外に解決することはないと思う。参加した学生が番組を通して気持ちに変化があれば札をあげるという番組の作りは、ずさんだったのではないかと感じた。司会が番組の中で「番組が長い」と表現していた

が、これくらいの時間で人の気持ちが変わることはないと思う。そうした現実を加味したうえで発言してほしかった。大学生がこの過程を経て、どのような心境の変化があったのかが大事なことだと思う。そのためには大学生が体験して、どのように思ったのかを司会が少し補うことで導くことができるし、必要なことだと思う。発言されたことが流れて終わってしまったので、図式化したり文字にすることで、大学生にもう一度落とし込むようにしてほしかった。長い時間をかければ人の意見から考えが変わるということはあるかもしれないが、例えば大学生が成功事例のあるところで実際に体験し、どう感じたかという事例が紹介されないと、簡単には気持ちは変わらないと思う。そうした配慮があればよかった。

（ＮＨＫ側）

山梨の人口減少について、次代を担う学生たちに自分たちの問題であると身近に感じてもらうことを番組のねらいとして立ち上げた。短時間で学生に本音を語ってもらい、学生自身がよりかみ砕いて伝えるように工夫することはできたと思う。放送後に何人かの学生から「あの時間では自分の意見をまとめることができなかった」という声を聞いたし、その後は学生たちだけで討論会をするなどの形で波及している。学生から「県域放送で自分たちの意見をもう一度言わせてもらいたい」という話ももらった。県内向けの夕方６時台の「まるごと山梨」という報道番組の中で、学生の目線で人口減少の課題を取材するシリーズを立ち上げようかという話をしている。これで終わりではなく、今後に続くきっかけになるような形で展開していきたい。司会の「番組が長い」という発言は県内向けの放送の中で７３分の番組を作ること自体が普段にはない経験だったので、思わず出てしまった表現だったが、もう少し工夫する必要があったかと思う。

○　人口減少は全国的にも重要なテーマなので、どのような内容になっているのかと興味を持って見た。山梨県は富士山やブドウ、ワイン、モモなどさまざまな観光資源や特産物があるのでうらやましく思う地域だが、かなり急激な人口減少や高齢化を迎えていると知り、驚いた。７３分というのは番組として長いと感じていたので、どのようにテレビから離れないように作るのかというあたりに興味があった。記者が解説し、設定したテーマを順番に展開するなどの、工夫がされており、よい構成だったと思う。学生は“よい子”という感じで、おとなしく、引っ込み思案のように感じられた。マキタスポーツさんの発言はよかったが、一方で発言のタイミングの問題や、気

分が落ちこみがちになる発言もあったが、そこを司会の明るい進行で救っていた。日本総合研究所の藻谷浩介さんは安心感のある、切れ味のよいコメントだった。後半には山梨に移住してきた青木はるひさん、いちばんの成功例でインパクトがあった水上篤さんなどの事例が紹介され、番組全体がよい構成になっていたと思う。甲府放送局記者の肩書が人口減少プロジェクト班と出ており、以前から甲府放送局では取り組んでいた経緯での表現なのかもしれないが、詳しく知らない人は違和感を感じたのではないかと思う。事例紹介の中で都留市のアクティブシニアの話が出ていた。高齢者が移住してくると地元の介護負担などが増えるのでないかという議論はどこにでもあり、「住所地特例があるから大丈夫」という短いコメントで終わって、次の話題に進んだが、それほど簡単な問題ではないと思う。大丈夫であるならもっと具体的にどのぐらいの人がそうした施設に行っていて、税負担がどうなっているのかというところを丁寧に説明しないと誤解を生むと感じた。耕作放棄地が増える中、そこをうまく利用し、企業を誘致しているという北杜市の例は興味深かった。こういうテーマの番組をしっかりとした形で作ったことはすばらしいと思う。大学生も話を聞くよりは、実際の事例を見ると感じることが多いとの発言もあったので、コメントを多くするよりも成功例をもっと提示するとよかったのではないかと思うが、全体としてまとまりはよかったと思う。

（ＮＨＫ側）

記者の肩書については、甲府放送局では年間シリーズで人口減少プロジェクトとして取り組んでおり、山梨県民にはテーマが認知されているので違和感がないのでないかと思い、あのように表現した。しかし、ほかの地域の人や夕方の報道番組を見ていない人、学生や若い人たちにも見てもらおうという企画だったので、表現は工夫する必要があったと思う。住所地特例については指摘の通りだと思う。あのコーナーは学生、視聴者とともに山梨の強みをもう１度見直そうと考えていた。高齢者の移住のみならず、耕作放棄地ですら強みになる、宝になるという話も含め、時間の中でバランスを取ろうとしたが、補足にしては中途半端になったのでないかと感じている。

○　山梨が移住先として人気があり、１位、２位を争っているというニュースを見ていたので、そのまま移住していると思っていたが、今回の番組で実際の移住者が少ないと知り驚いた。大学生から生の声を聞くという構成はよかったと思う。討論する場と大学生を集めているスタジオを分けていたが、同時進行しているにもかかわらず、すばらしい展開ができていた。大学生も参加していると分かるようにテロップを出して

おり、討論のときも大学生対大人という構図を打ち出していた。スタジオが分かれていながら一体感のある作りをしていたのがすばらしかった。番組を見ている側にとっては、そのとき大学生がどう思っているのだろうと思うところをしっかりととらえていた。討論者の紹介テロップには出身地だけでなく、その人の主張も書いてあり、この人はこういう立場で話をすると最初からわかるようになっており、討論者の役割分担がはっきりとしていてよかった。細かいところまで気を使った工夫や番組の進め方、たくさんのデータを出していたので、山梨がどういう現状なのかもよくわかる完成度の高い討論番組だった。大学生が就職という問題をどう解決するのか、自分のこととして今後どう考えていくのか、その解決策という意味ではもう少し本音の部分や深掘りがあったほうがよかったと思う。

（ＮＨＫ側）

　大学生の本音を引き出すには苦労した。一緒に制作したメンバーの中に、仕事を始めてまだ２年目、４年目という２０代のディレクター２人に入ってもらった。彼らの感覚を参考にし、日々ブレーンストーミングを行った。パネリストがいる空間に学生の席を設けることはできたが、その場所にいると本音はなかなか言いにくいという意見が強く出た。そのため隣の部屋を使うことにしたが、席をきれいに並べると普段の感覚での本音が出にくいだろうということで、ネットカフェのようなイメージにした。本音を引き出すという意味では人口減少というテーマが大学生には身近ではなかったので、事前に想定される質問について考えを深めておいてもらうという仕掛けをしておけば、もっと建設的な本音が出たのでないかと思う。

○　番組のテンポが速すぎたのでないかと感じた。司会のゲストへの話の振り方にも、もう少しゆとりがほしかった。学生が別室から参加するのはあまり意味がなかったのでないか。むしろ同じ場所に参加させたほうがおもしろかったのでないかと感じた。出演者のマキタスポーツさんの冒頭の発言で「山梨は嫌い」というのがあった。ひとつの切り口としては理解できるが、番組冒頭であのような発言をすると後の人が話しづらくなるのでないかと感じた。藻谷さんは各種の状況の調査分析を興味深く具体的に発言してくれたので、とてもよかった。人口減少は全国的なものだが、山梨の数字が突出している理由は、東京に目を向けすぎているからでないかと思う。山梨における就職難や人口流出は、富士山の噴火の恐れなど、自然災害も要因としてあるのではないか。そうした点にはほとんど触れていなかったのが気になった。成功例として水上篤さんの例が出ていたが、「東京で生活する人は下を向いている」「一つの駒になっ

ている」などの発言には違和感を覚えた。東京で起業し、成功している人もたくさんいると思うので、東京に住む人、東京での生活を否定するような発言が気になった。３０分以内のコミュニティーでの循環については、よい面もあるが、柔軟なコミュニティーにしておかないと県外からは入りにくいのではないかと思う。若者が将来の不安を抱えない条件として正社員雇用を希望するのは当然だと思う。起業できる能力と財力があれば問題ないが、必ずしも恵まれた環境で仕事を組み立てることはできないし、失敗の可能性のほうが多いと思う。新聞の記事に奨学金を返済できない学生がかなりいると掲載されていたが、そうした点も学生から出てくればよかった。企業誘致で自然の景観が損なわれていく問題は、将来に大きな失敗としてツケが回ってくる気がする。後藤山梨県知事は農地に戻すというような話をしていたが、気がついてみたら取り返しのつかない状況になっているのではないかと思う。太陽光パネルが広がってきている現状もあり、景観はどんどん壊れている。新しいエネルギーが発見されれば別だが、元に戻すのはかなり難しいのでないかと思う。大学誘致で大きな未来像を考えられるのが、シニア世代を大学に取り込むというアイデアであり、おもしろかったが、シニア世代が流入してくると、介護という面で施設、病院の行政問題が出てくると思う。７３分だったが飽きることなく、集中して見ることができたのは作り方がよかったのだと思う。何県かが共同で問題提起をしてくれるとよいと思う。

（ＮＨＫ側）

タレントにパネリストとして参加してもらうかどうかについても議論をした。単純に盛り上がるからという理由での起用はやめたいというのが発想の原点で、マキタスポーツさんは山梨の雇用の事情も認識しており、本人も東京の大学を卒業した後に山梨に戻り働いていた。そうした中で感じてきた山梨の現場感覚を話したいということだった。収録のときにはドラマの撮影の真っ最中だったが「そういう話であれば山梨の役に立ちたい」ということで参加してくれるという気持ちを聞き、山梨県民の感覚を代表し話してもらいたいとお願いした。「どうせ山梨」という発言もあったが、山梨での取材でいろいろな人に話を聞くと多くの人が皮肉も込めて「どうせ山梨はそんなにおいしいお土産もない」というような言い方をするが、本当は自信があるのだと感じる。自分の家で作るほうとうにもとても自信を持っており、マキタスポーツさんらしい表現であったと思う。山梨県民で共感した人は少なからずいたのでないかと期待している。自然災害やほかの側面についての話はご指摘のとおりだと思う。山梨は特に若い女性の転出が多く、全国的にも突

出している。その点は議論の中に入れるべきだろうという話もした。女性の就業機会、女性の活躍の場、少子化の話も、それだけで７３分にするべき内容だが、多くの世代、女性と男性にかかわらず抱えている問題ということで雇用という一つのテーマに絞ることにした。

○　番組を見ると就職難、人口減少といろいろな問題が山積みだと感じた。北杜市、都留市、甲州市それぞれの地域で成功した人たちの例が出ていた。討論なので結論はなかなか難しいと思うが、この問題はどこに落とし込めばよいのか、どうすればよいのか、結論を出してはいけないものなのか、導くところで終わらせ、後は考えてほしいとしたほうがよいのかということを、視聴者として思うことがある。日本の場合は結論を導くぐらいまで言わないと、自分たちで考えるのは難しいと思う人が多いと思う。明日からでも役に立つような、こうしようということまで手を差し伸べないと難しいと思う。番組で言われていること、行っていることはよくわかるが、２回目、３回目と回を重ねる中で結論が出てくるとおもしろいと思う。後藤山梨県知事は、立場があるのできわどい発言は難しいかもしれないが、山梨県の代表として踏み込んだことを発言してくれると県民が見ていて知事の考えがわかると思う。例えば、エコノミストたちが導いてくれるような番組は安易に答えを求めるようでいけないかもしれないが、見ていて分かりやすくなると思う。

（ＮＨＫ側）

番組のねらいは人口減少を自分の問題として考えてもらおうというものだ。「人口減少はまだ痛くない虫歯のようなもの」という話を聞いた。あるのは分かっているが、まだあまり痛くないので深く考えることがないということだが、まさにそのとおりだと思った。多くの人がそういう感覚なのではないかというところからの出発だった。まずはきっかけづくりというのが今回の番組の目指したところだった。番組に関わった担当者の中で自分たちも実行しはじめているのが、帰りに飲み物を買う場合は、地元の商店で買おうというものだ。県民が１人でもそういう行動に出てくれれば今回はよかったと考えている。第２回、第３回と制作する中では、こうしたことが県民としてできるということをいくつ出せるかはねらうべきだと思っている。

○　７３分という長さを感じさせないすばらしい番組で３回見た。いちばん印象に残ったのは、非正規で働くことがそれほど悪いことなのかということだ。正規で働くこと

を否定するわけではないが、個人に合わせたいろいろなライフプランがあってもよいのでないかと受け取った。最近は正規社員になったものの、社会保険料が負担になり、手取額も少なく、家から自立できず、それが足かせとなって奨学金の返済などもあり、会社を辞めてしまう。もっと自由に稼げる非正規として仕事に従事する若者たちが実際に増えている。そのことも踏まえ、しっかりと議論されていた。この番組は、関東甲信越や東京も含め、ほかの県でも放送し、国民の多角的な仕事の探し方の提案にもしてほしいと思った。

（ＮＨＫ側）

今回はタイトルで「人口減少×学生」としたが、仮に第２回を制作する場合には「人口減少×女性」や「人口減少×サラリーマン」とする方法もあり、どういう目線で人口減少を切り取るのかは工夫できると思う。今回は学生目線なので２０年、３０年以上先を見据えた抽象的な部分もある討論だった。正規雇用を求め、県内で働いている人もたくさんおり、そういう人たちに共感してもらう番組にするためには「人口減少×学生」でなく、別の方法を考える必要があると思う。その場合は５年ぐらいで実現するようなことを基に議論できればと考えている。

○　多角的な問題なのでそう簡単ではないと思った。数字やデータで最初に今ある危機をしっかりと出したのはインパクトがあってよいと思ったが、学生を生かし切れていなかった気がした。立派な成功例もあり、世の中を見えている大人が学生を諭すような感じを受けた。それでは学生も「考えが変わった」と札を上げてしまうことになる。学生たちに人口減少を自分のこととして考えてもらうということだったと思うが、そこがうまく機能していなかったと感じた。学生たちがあらかじめこのテーマで話し合いをしておいて、事前に自分はこう考えよう、自分の意見はどちらにしよう、どういう方向で話そうということを考えておいてから出てもらいたかった。学生は少しおとなしかった印象を受けた。こういう番組は視聴者にどれぐらいインパクトを与え、どう考えさせるのかが大事だと思う。夜７時３０分からの放送は、親子で見て話し合うような視聴環境なのかについて、どのように考えているのかと思った。自分に照らしてみると、まだ家に帰っていない時間なので見られないと思う。食事をしながら見るという想定なのか、大学生はその時間にいるという前提がデータとしてあるのか疑問に思った。もう少し遅い時間のほうがよいのかもしれない。マーケティングを活用し、的確な時間での放送をしてもらいたい。発想を変えるために成功者の話をまず聞き、そこから考える時間を持たせるためには、視聴者へのインパクト、学生にインパクトを与えるための最適な時間帯、議論のための準備が必要ではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

自分たちの意見をあの時間の中でしっかりと話す仕掛けを作るという意味で、第２回では学生たちに準備をしてもらう点を確実に行いたい。番組の時間帯については、７３分の放送枠を地方局で放送するには時間帯が限られてしまう面もあるが、じっくりテレビの前で議論しながら見る時間帯ではないかもしれない。夕方６時台の報道番組の枠との連携や、もしくはその時間帯に合った提示の仕方も今後考えたい。

○　郷土愛や郷土に対する誇りをどのように伝えるかというテーマ、課題があったのだろうと思う。若い人たちに地域社会において取りうる選択肢を知らせることができていたかと考えると、不十分なのだろうと思う。雇用のミスマッチと言うが、有効求人倍率などの数字を見ると、正規と非正規の問題はあるにせよ、求人をしても人がなかなか採用できずに困っている中小企業が多い。中小企業で働く魅力づくりをもっとアピールしなければいけないと感じた。県の政策もあると思うし、紹介されていた地方銀行の制度の中でベンチャーの支援ファンドが生まれ、地域の変革のきっかけづくりは進みつつある。次回はそうしたものも紹介し、若い人たちに東京だけではない選択肢、可能性が山梨にもあることが実感できような情報を提供してほしい。特に水上さんの発言は、ある意味で人生哲学でもあり、生きることの意味、豊かさとは何かをどうとらえるか、かなり奥深い話だったと思う。それらを含め、単純に目の前にある就職やどう選択することが自分に有利かだけではない、長い人生の中での選択という切り口も入れてもらいたい。

（ＮＨＫ側）

人口減少というテーマで作るにあたり、過去にＮＨＫで放送された人口減少のさまざまな番組を参考にした。県域放送の中で人口減少というテーマを討論するというチャレンジをしたが、人口減少は地域放送局でこそ、議論するべきテーマだと思う。山梨の事情に合わせた人口減少の対策が必要だ。山梨の場合は東京から近いことによる流出も起こっている。学生、親の意識もそこに引っ張られる部分があることは大きな発見だった。高齢者移住の政策にしても、東京に近いということでほかの都心から離れた地域と比べればより現実味を持つのかということも含め、地域の事情に合わせ議論すると建設的なものができるのでないかと思った。甲信越で連携する場合は、全国放送

で１回放送する番組とは違った目線で、より具体的な議論ができるのでないかと感じた。視聴者の数が多かったかは分からないが、人口減少について考えてくれたことには喜びを感じている。得てして番組を作ることが終わりになってしまうことは多いが、今回は放送後に、自分に何かできることはないかと相談に来てくれた視聴者もいた。そういうきっかけづくりになれたことは刺激を受けたし、地域放送局なのでそれをつなげることもできる。簡単には答えの出ないテーマを地域放送局で討論するのは新鮮だと感じた。

＜放送番組一般について＞

○　５月２９日(日)のＮＨＫスペシャル　廃炉への道２０１６「核燃料デブリ　迫られる決断」は衝撃的だった。福島第一原発のことが少し風化していると感じる中、デブリを取り出す困難さの現状を生々しく伝えていた。ニュースでも取り上げられていたが、東京電力と政府が「炉心溶融」ということばを使わないよう指示していたということで、これから問題になると思う。福島を風化させないためにも、メルトダウンの危険性を継続して報道してほしい

○　６月５日(日)のＮＨＫスペシャル　スクープドキュメント「北朝鮮“機密ファイル”　知られざる国家の内幕」は衝撃的だった。北朝鮮の情報は入ってこないものだが、脱北者の動向や核開発の情報が出てきた。今回はＵＳＢメモリで莫大なデータ情報が流れてきた。そういう情報の出方があるのかと真剣に見た。３、４年前、キム・ジョンウン体制に替わるころの軍の動向、最高司令官の揺れる戦略がかいま見えた。軍の名簿、軍の動向、クーデターへの恐れ、ピョンヤンへの射程距離が及ばないような仕組みなどの普段表にはデータとして出てこない情報が見えてきて驚いた。よく放送したと思う。こうしたものを出すことで外圧やほかからの厳しい意見もあったのではないかと思う。拉致問題、核、ミサイルなど、日本としても近くて遠い国で分からなかった部分が番組で少しずつ分かってきたと感じた。決断のいる番組だったと思う。

（ＮＨＫ側）

外部からの圧力などはない。あのファイルが本物なのか、肉付けで証言している脱北者たちが本当のことを言っているのかは念には念を入れ、裏を取った。その辺りは揺るぎないもので

あると思う。

○　６月６日(月)の「謎の狩人バショウカジキ　カリブ海大集結を追う」(総合 後 10:25～11:14)と６月１２日(日)のＮＨＫスペシャル　大アマゾン　最後の秘境　第３集「緑の魔境に幻の巨大ザルを追う」を何かをしていた手を止めて見たが、よく取材されており、番組を通してそうした情報に触れられたのがよかった。

○　６月１１日(土)のＮＨＫスペシャル　私たちのこれから「＃不寛容社会」は、自分たちがなぜイライラしているのか、なぜ許せないのかを理論的に解明してくれたおかげで、周りにも伝えられるし、自分もそこから影響を受けることのないようにしようと意識することができ、とてもよい番組だった。

○　６月１２日(日)のＮＨＫスペシャル　大アマゾン　最後の秘境　第３集「緑の魔境に幻の巨大ザルを追う」は、巨大ザルがとても迫力があり、おもしろかった。まだ人の入ったことがないところがずいぶんあるということに驚いた。第４集「原初の人々イゾラド」は７月に放送されるようなので、期待している。

○　６月３日(金)の歴史秘話ヒストリア「熊本城　４００年の愛」は、よいタイミングで熊本城を取り上げていた。４月の熊本地震で大きな被害を受けた熊本城は、熊本県民にとってシンボルなので、その惨状は大きなショックを与えた。これからお城がどうなるのか、本当に立ち直るのかという心配をしている県民も少なくない。築城からの秘話や 400 年の間に熊本城は戦争、地震で何度も被害に遭っていることを知った。復元には大きな費用がかかる。今回は石垣の復旧費用だけで 354 億円といわれている。過去にも修復には莫大なお金がかかったが、そのたびに歴代の城主や市民の力で復元されてきたことを紹介していた。熊本県民や熊本城を愛する全国の人たちにとって、この番組でまた復元できるのでないか、熊本城の復興が自分たちの生活も立ち直らせることができるという大きな励みにもなるのでないかと思った。熊本地震で被災した人たちへの支援はさまざま形があるが，ＮＨＫらしく放送で励まし、元気づけるよい番組だったと思う。

○　６月５日(日)の福井県勝山市からの「ＮＨＫのど自慢」では、音声にタイムラグがあり、数分間２つの音声が同時に出ていた。ミスもたまには起こると思うが、看板番組なのでなぜそうなったのかと疑問に思った。もっと早く復旧できたのでないかと感じた。

（ＮＨＫ側）

福井県勝山市の「ＮＨＫのど自慢」では、長い間視聴者にご迷惑をかけ、申し訳なかった。東京の放送センター内設備障害が原因で、ステレオ右音声が 10 秒遅れで送出された。中継現場から衛星経由で東京に信号を送り、東京から全国放送するという仕組みだった。生放送の場合は何が起こるかわからないので、設備の二重化、予備回線の確保など、バックアップ体制を取っているが、今回はリハーサルまで全く現象が起きていなかったので、どこで障害が起きたのかの判断に時間がかかった。別ルートの回線に切り替えて救済した。音声の不具合の時間が長かったので、東海・北陸地域向けには６月１８日(土)(総合前 10:05～10:50 中部　ﾌﾞﾛｯｸ)にあらためて放送する予定だ。原因を究明し、二度とこういうことがないようにしたい。

○　６月１４日(火)のうたコン「山梨発！燃えあがる情熱ソング」は、地方からの放送だった。生放送の現場を視察したが、放送前後の時間を含め、放送される時間帯の中身づくり、舞台装置の造り方、東京と現地の局が一緒に制作しているということで地方局のさまざまな技術、発想の刺激にもなっていると思う。作る番組の発信力、質の向上にそうした経験が生きるのだろうと感じた。地方局でも対象や目線、自分たちの発信先は全国であり、世界であるという価値観や視点を埋め込むにはとてもよい経験だと思う。そうした機会を増やしてほしい。番組の前後は放送には映らないが、衛星放送受信料の支払いや契約について触れており、周りへの伝播（ぱ）という意味でもそうした機会はとても有効であると現場で実感したので、続けてほしい。

○　６月３日(金)の特報首都圏「オリジナルって何だ？～揺れる表現の現場～」は、東京オリンピック・パラリンピックのエンブレムが白紙撤回となったのは記憶に新しく、パソコン、インターネットにいろいろなデザインがあり、似たようなものが簡単に見られるような時代になった中で、どのようにオリジナルのデザインを作るかというのが最初の切り口と思って見た。著作権がどこまでがよくて、どこからが駄目なのかについて詳細に解説してくれることを期待し、興味を持って見ていたが、結論はよく分からなかった。スマートフォンを振るだけで次々と新しいデザインが出てくるソフトが開発されている。このデザインがよいと思うとそれをチェックし、そのまま申請してオリジナルにするようで、人間をサポートすると言えば聞こえがよいが、人間が考えたとはとても思えないようなソフトもあるようで、とても勉強になった。今回採用された東京オリンピック・パラリンピックのエンブレムは小さな四角が並んで

できているが、配置を微妙に変えることで全体のイメージを変えずに数十億のパターンができる。極端に言えば日本人全員に新しいデザインはこれだというものを配れるという話があり、とても刺激になった。幅広い取材がよい番組で形になったと思う。

○　プレミアムよるドラマ「最後のレストラン」は、織田信長、ジャンヌ・ダルク、マリー・アントワネットなどが現代にタイムスリップし、死ぬ直前に食べたい料理を出すというドラマだが、自分は何のために死ぬのだろう、歴史の中で自分の行ったことは必要だったのだろうかと悩みながら死んでいく偉人たちが、料理を通じて気付かされる、お皿を通じて感じさせる部分がおもしろかった。

○　プレミアムドラマ「奇跡の人」は、ヘレン・ケラーとサリバン先生の実話をモチーフに、日本風にアレンジしており、見応えがあった。全８回を最後まで見たが、おもしろかった。総合テレビでも放送してほしい。視聴者に衝撃と大きな力を与えると思う。久しぶりによいドラマを見た。

○　５月７日(土)のＥＴＶ特集「お墓のゆくえ～弔いの社会史～」は、葬送に対する価値観の変化、物理的な問題を含め、お墓がこれからどうあるべきかということをうまく解説していた。昭和４０年代のころは６人以上の家族が日本世帯ではいちばん多かったが、２０１０年のデータでは単身世帯がいちばん多く、続いて２人世帯、３人世帯だ。１人暮らしの人は亡くなっても埋葬する人すらおらず、親戚が来ても遺骨の引き取りを遠慮するケースもある。役所も苦慮している実情が報告されていた。寺院も檀家制度が壁になっており、その制度に対応するお寺の姿も紹介されていた。お墓をどうするか、人が亡くなった先をどうするかについて考えさせられるよい番組だった。

○　６月６日(月)のハートネットＴＶ　ブレイクスルー　Ｆｉｌｅ．５４「僕だけの音を奏でる～ピアニスト・西川悟平～」は、指に障がいのあるピアニストに焦点を当て、とても興味深い内容だった。衝撃的だったのが、西川さんが「障がいがあるから売れたのです」と発言したことに対し、司会の風間俊介さんが「それでいいではないですか」と言っていたことだ。さまざまなことを乗り越えたからこそ「いいではないですか」という発言に結びついており、それをテレビで言えることがすばらしいと思った。どうしても気兼ねをし、おもんぱかることが先行してしまいがちになると思う。当事者にすればピアニストは売れるほうがよいし、たくさんの人に知ってもらうことがよいと思う。しっかりと深く考えたうえで、自由に発言できているのはすばらしいと思った。福祉をテーマにした番組だが、福祉だけではなく、発想を転換する機会や新しい視点を与えることは大事だと思うので、幅広い視聴者に見てもらえるようにし

てほしい。

○　「モーガン・フリーマン　時空を超えて」を毎週見ている。６月１０日(金)のアンコール「“時間”は存在するのか？」は、アインシュタインとニュートンの時間論を比較し、さまざまな分野の学者の時間はある、ないという意見が紹介されとても興味深かった。

○　６月１０日(金)のにっぽんの芸能「現代のことばで踊る　現代詩と舞踊」は、詩の世界を日本舞踊で踊っており、とても新鮮だった。谷川俊太郎さんの「みみをすます」と「水」という詩を日本舞踊でどのように振り付けし、どのように歌うのかと思ったが、とても分かりやすかった。詩の世界、短歌の世界に大きな影響を与えるのでないかと思う。このような番組はもっと放送してほしい。振り付けと古典音楽の一体感があり、古典舞踊はあまりよく意味が分からないのだが、現代詩をよく日本舞踊に合わせたと感心した。

○　６月４日(土)のスープの魔法「タイ・トムヤムクン」（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 5:45～6:00）は、よくある料理番組のようなレシピがあり、作り方があり、食べるという構成とは違い、なぜそのスープがその地域から生まれたかなどについて紹介していた。トムヤムクンの詳細な作り方は分からなかったが、なぜあれほど酸っぱいのか、香りがあり、辛いのかということを、その地域で体が求めている味なのだとひもといてくれ、納得できるよい番組だった。その料理を作るだけではなく、調味料も作っており、こういう食材を使っているなど、地産地消の部分も出ていた。ほかにも各国のスープを紹介しているようなので見たいと思った。

○　ＢＳに加入したのは「ワンス・アポン・ア・タイム」と「プレミアムシネマ」が見られるからと言っても過言ではない。映画を選定する基準があれば教えてほしい。これから先も「宇宙戦争」、「ゴジラ」シリーズなど、親子で見たい映画がある。週に１回ぐらいは親子で楽しめる映画を入れてほしい。ホームページでは「映画をリクエストする」という投稿ページがある。子どもからリクエストしてほしいと頼まれるが、ディズニーやジブリ映画、「映画妖怪ウォッチ」「映画クレヨンしんちゃん」「映画ドラえもん」などは、民放で放送しているものを映画化しているので、難しいのでないかと思い、リクエストはしていない。リクエストをしても無理という映画があれば教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

映画の直接の担当ではないが、購入を行っている部署の観点

でいうと、基本的に親子、家族で見てもらえるもの、楽しんでもらえるものを中心に選びたいと思う。市場の値段との相談で、コストに見合い、楽しいものや、人気のあるものを放送したいと思っている。日中の映画は年配の人に懐かしいと思ってもらえるものを放送したいということもある。時間帯によって仕分けをし、購入している。民放で放送した番組の映画版でも、民放が権利を持っておらず、購入できるのであれば、人気のある映画については、特にこだわらない。民放が手放さないキャラクターもあるのでそう簡単ではないが、今民放で放送しているものでなければ、人気のあるものを放送したいと思う。

○　インターネット時代にメディアはどうあるべきなのか、健全な世論をどうやって作るのかということをよく感じている。今回の舛添要一東京都知事の辞任にあたり、果たして健全な世論なのかと強く感じている。インターネットが作る世論でなく、今までのテレビ、ラジオ、新聞、雑誌がどうやって世論を作るのかと考える。ドキュメンタリーのようなものは編集が大幅に入るが、どこまで編集をするかだ。今回は、新聞、雑誌、テレビも編集によって自分たちの言いたい方向にあまりにも近づけていた。インターネットではリアリティを市民が求めるようになり、視聴者のリアリティと作りたい編集の接点がどこにあるのかだと思う。ヤマナシＱＵＥＳＴ「討論ヤマナシＱＵＥＳＴ　人口減少×学生」を見て、インターネット時代に健全な世論を作るメディアのあり方の一つの形ではないかと感じた。討論の番組を編集するのは多種多様な人たちの意見を編集し、一つの方向性に結びつける価値のある方法だと思った。ゴールデンタイムに放送したが、深夜であれば見たい人だけが見る。テレビをつける時間帯に放送するのは世論形成のためにも、健全な思考回路の材料を与えるためにも、よい方法だと感じた。

（ＮＨＫ側）

　インターネット時代にメディアがどうあるべきかという問題はわれわれにとっても切実な問題だ。インターネットによる発信をどうするべきなのか、メディアの新しい時代はどういうものなのかと常々考えている。インターネットを中心とした情報提供は若い人たちに浸透している。若い人たちがテレビをあまり見なくなっている、新聞を読まなくなっているという現状もある。ネットには匿名性という特徴があり、意見が過激になりがちだ。６月１１日(土)のＮＨＫスペシャル　私たちのこれから「＃不寛容社会」(総合 後 9:00～9:50)を放送したが、さ

まざまな意見が過激に飛び交う危険性があると常日ごろから痛感している。われわれとしてはさまざまな考え方、立場、意見や見方があることを幅広く提供し、考えるきっかけを持ってもらうことを目指したい。高齢化社会についても、人口減少にしても、地域の再生にしても、難しい課題であり、解を見いだすことは難しいが、問題意識を持つきっかけになるような番組づくりをしたい。一見地味かもしれないが必要な問題はこれからもしっかりと取り上げる。

○　舛添都知事の民放での報道は、いじめのような、あることないことを言ってその方向に持っていこうとしており、得られた情報によってよくないという判断がされてしまい、つらいものを感じた。ＮＨＫの報道はインタビュー形式で行うことがあるが、こう言っているということで終わりにしている。舛添都知事はどのような人なのか、なぜそのようなことをしたのかというプライベートな情報については民放から得ていて、ＮＨＫから得ていない現状がある。いじめのような内容の放送は嫌だが、知りたい情報がもらえていない。その狭間（はざま）で苦労していることは推測できるが、舛添都知事の報道をどのように扱おうとしているのか聞きたい。

（ＮＨＫ側）

政治資金などをめぐる疑惑が、週刊誌報道がきっかけになって始まった。公私混同、公金の使い方がよいのかなど、さまざまな問題があった。ＮＨＫはプライベートな問題は扱わないが、不適切な公金の使い方をしていた、公私混同をしていたということなどは「首都圏ネットワーク」や全国のニュースなどで詳しく取り上げている。今夜の特報首都圏「緊急報告　舛添都知事辞職」でも内容を差し替えて放送するなど、５月以降、詳しく伝えている。

視聴者の知りたいことはいろいろな面があると思うし、難しい面もある。端的にいうとプライバシーの部分だ。今回は政治資金の公私混同など、違法ではないが世間の常識から見るとどうなのか、この美術品についてはどうか、この公用車の使い方についてはどうかということはわれわれも伝えている。民放はお昼の時間に会見をそのまま放送しているところもあったが、われわれも特設ニュースなどで伝えている。東京都議会では自民党、民進党、共産党など、いろいろな会派が質問しているが、

その一部の質問者だけを切り取るのも平等の観点から難しい。インターネットでは会見を最初から最後まで配信したが、あとはバランスを取って放送した。人間の尊厳、プライバシーの問題、犯歴などはいろいろな判断があると思うが、公職の人、一般の人の扱い方は違うので、総合的にいろいろなことを考え、悩みながら伝えている。

○　最近のライフスタイルの変化の中で、視聴率は本当に気にしなければならないものなのかと疑問に思っている。周りの人に聞いても早い時間には帰れない人が多い。２０代の会社員は家に着くのが夜１０時、１１時で、「サラメシ」が早い時間帯に移設されたので見ることができず、高齢の経営者は「クローズアップ現代」が遅い時間帯に移設されたので、起きていられないと聞いた。「サラメシ」のファンの人は録画で見るが、それでは視聴率に反映されない。一方、高齢の人は録画をする気がなく、見られなくなる。これは視聴率に直結しているのではないかと思う。見逃したらＮＨＫオンデマンドや録画で見るという視聴形態の中で、視聴率を気にした番組づくりをする必要性がどこまであるのか疑問に感じている。ＮＨＫはスポンサーが関係なく、良質な番組を日々作っており、私は録画したものを休みの日に朝から晩まで見ている。単に視聴率が取れないから番組がなくなってしまうようであれば残念だ。

（ＮＨＫ側）　世帯視聴率だけがすべての指標であるとは考えていない。トータルリーチと呼んでいるが、世帯視聴率だけではなく、録画でどれぐらい見てもらっているのか、インターネットでどれぐらい接触してもらっているのか、番組の質をどのようにとらえてもらっているのかなど、さまざまな指標で番組を評価している。世帯視聴率は気にしていないわけでなく、できるだけ多くの人に見てもらいたい、接触してもらいたいので、そのことも考慮して日々編成をしている。社会の中核となって働いている人の在宅率が低い夜７時台、８時台はどちらかというといろいろなことをしながら見る、ザッピングしながら見るなど、専念視聴する時間ではないことなども考え合わせ、今年度から「クローズアップ現代」を「クローズアップ現代＋」として夜１０時台に移設した。視聴者の反応を見て考えたいと思う。世帯視聴率だけを考えているわけでなく、さまざまな側面から番組を評価しているので、視聴率が低いからという理由のみで番組がなくなるということはない。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２８年５月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

５月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、２０日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、新潟放送局の最近の取り組みと今後の予定の報告、平成２７年度関東甲信越地方向け放送番組の種別ごとの放送時間について、金よう夜きらっと新潟「にいがた国際旅行社　＃１　私が愛する NIIGATA」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、６月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　髙野孫左ヱ門（(株) 吉字屋本店代表取締役社長）
副委員長　伊藤由貴子（神奈川県立音楽堂館長・プロデューサー）
委　　員　岩佐　十良（(株)自遊人代表取締役）
大山　　寛（サンファーム・オオヤマ(有)取締役会長）
岡田　芳保（元群馬県立土屋文明記念文学館館長）
国崎　信江（(株) 危機管理教育研究所代表）
野老真理子（大里綜合管理（株）代表取締役）
藤木　徳彦（フランス料理店オーナーシェフ）
古澤　宏司（(有) 古沢園代表取締役）
山口　晃平（(株)山口楼 専務取締役）

（主な発言）

＜金よう夜きらっと新潟「にいがた国際旅行社　＃１
私が愛するＮＩＩＧＡＴＡ」（総合　５月６日(金)放送）について＞

○　海外に向けて日本のよさをアピールする際に、日本人が考える魅力と外国人が考える魅力は違うことが新鮮だった。外国人が日本で訪れたい場所の調査で新潟県は５０か所中４７位と紹介され、外国人の訪れるニーズが少ないのかと心配したが、実際は湯沢町にタイ人が観光に来ていることが後で紹介されていた。訪ねたい場所と実際に観光で来ている人のニーズのギャップはどの程度あるのかの説明が丁寧

にされていたら、新潟県在住の外国人３人がナビゲーターとして出演する演出にすんなりと入って行けたと思う。いきなり３人が登場した感じがあり、３人の位置づけと調査結果とのつながりが乱暴な気もした。３人のナレーションは日本人である私以上に日本や新潟のありのままの文化、生活を楽しんでいる様子を映しており気持ちが和んだ。また、何気ない景色に日本のよさが詰まっているという説明にハッとさせられた。外国人の目を通して見る日本のよさを気づかされ、興味深かった。外国人が日本を訪れることは単に経済的な面だけではなく、日本人が日本のよさに気づくことができるメリットもあるのかと番組を見て思った。地方各局でこういった番組が制作され、東京オリンピック・パラリンピックに向け世界が日本に注目している中で地方のＰＲができればおもしろいのではないかと思った。３人の外国人が本当に日本を愛してくれていることは、日本人として大変うれしかった。そういった外国人がもっと増えてほしいと思った。これからも期待している。

（ＮＨＫ側）

調査はインターネットで海外に住んでいる方を対象に行われたものだ。この調査で基となる母数と、実際に来ている人との比較が直接的にできるものではなかった。番組の冒頭でもう少し丁寧につながりを説明できたらよかったかもしれない。

○　大変心地よい番組で、見終わってよい気持ちになった。最近日本に来る外国人観光客が急激に増加している。平日などは、外国人観光客のおかげで観光地として持ちこたえている印象すらある。以前のように、ゴールデンルートと呼ばれる、東京、富士山、京都を見るというルートだけではなく、いろいろな意味でこなれてきており、外国人観光客の誘致は次の段階に入ってきたという印象だ。そのタイミングでこの番組はよい切り口、よい内容で制作されていると思う。繰り返し日本を訪れている外国人に聞くと、日本人が「えっ」と思うような場所を好む。農村風景や町並み、地形など、日本人が喜ばないような場所に魅力を感じるようだ。今回は外国人を起用して、そのことを上手に紹介できていてよかったと思う。海外向けにメッセージを発信するために、地方の公共団体や観光団体が外国人を多く採用するなどさまざまな集客作業をしているが、その１つの典型例で３人を紹介したという感じもした。大変すばらしい人たちで、日本に愛情を持って、あれだけ熱く語る外国人がいるとうれしくなる。しばらく前にフランスのワインを熱く語る日本人がいたが、日本もそのレベルになったのかと感じた。観光関係者はもちろんだが、外国人をたくさん受け入れるためにこの番組を多くの人に見てもらいたい。第２回以降も制作するそうだが、ぜひ見たい。

○　番組を見て大変勉強になった。私たち日本人が感じる新潟のよいところと外国人が感じる新潟のよいところはずいぶん違うと分かった。海外の人は日本のアニメを見て日本の生活スタイルを想像し、日本にあこがれを持っていること、縁側でひなたぼっこをする、こたつに入ってミカンを食べるなど、逆に今の日本にはあまりないような体験が外国人に喜んでもらえることが番組を見ていてよく分かった。実際に外国人に新潟に来てもらい、その魅力を伝えることによって、楽しみたいものを伝えられるのだろうと思う。３人の外国人はナレーションこそぎこちない日本語だったが、一生懸命さが伝わってきてよかった。一生懸命に日本酒造りに取り組んでいる人がいたが、日本酒の飲み方は変わりつつあるにしても、日本特有の酒を飲んで酔っぱらう文化とは違い、日本酒と料理を合わせて楽しんで食べるというところも新鮮だった。外国人に向けて、地域の調味料や食材と酒を合わせるマリアージュを楽しむ方法を提供してくれていたのもよかった。２回目、３回目の放送も期待している。

○　新潟在住の人間にとって今回の番組は力強く、励まされる内容だったと思う。新潟県民は昔からＰＲが下手だと言われているが、外国人観光客誘致において、どうやってＰＲしていくかが盛んに言われている。実際に新潟を訪れる外国人観光客は、山菜料理や田んぼの景色など、素朴な事柄に感動し帰っていく。そういう点からいうと今回の「にいがた国際旅行社　＃１　私が愛するＮＩＩＧＡＴＡ」のテーマは納得できるものだった。新潟の景色はもっとすばらしく輝く瞬間もあり、時間帯によっては大変美しく見える田んぼや町並みの風景、日本海の風景などもある。せっかくのテレビ番組でもあり、美しい映像でさらに紹介してもらえるとよいと思う。また、新潟県だけではなく、関東甲信越、全国、海外にそういった美しい風景を見てもらえたらと思う。

（ＮＨＫ側）

今回はトークスペシャルということで、映像よりも中身の話を重視し番組を構成したが、ご指摘はごもっともと思う。新潟の人には分かっている美しい景色かもしれないが、外に発信する際には新潟の美しさが映像的にもきちんと分かる形にすることが大切だと思った。

○　よい番組だと思った。そこに住んでいると意外と分からないことが多いが、今回の番組ではそこをテーマにしていてよかったと感じた。昔は日本海側というと「雪が多い」「冬は太陽が出なくて暗い」というイメージがあったが、そこを逆手にとって、海外に向けて、また日本国内にそのよさを上手に発信したと思う。日本の若い

世代は農家の生活を嫌がり、近代的な環境の住宅に住むようになっているが、逆に海外から見ると日本らしくてよいということもある。日本酒の飲み比べなどは私たちも最近あまりしないが、外国人が好むという話はすばらしいと思う。日本酒の紹介の中で、「ぶりかまとぬる燗(かん)がすばらしい」ということがあったが、逆に日本人である私はそういう発想がなかった。お酒のラベルにはこの酒が合うレシピが紹介されており、そういった発想を番組で取り上げたのはすばらしいことだ。日本はどうしても国土が狭いため集合住宅が多いが、そのため地下室を使う、屋根裏部屋を使うなど、日本の住宅の工夫は外国から見ると新鮮に感じることがあると思う。地方の人は自分たちのよさをことばに出してアピールすることが下手だ。外国人旅行者だけではなく、日本国民にも地方のよさを伝えるにはこういう番組作りがよいと感じた。地方では若い世代が都会に出ていき、高齢化がかなり進む問題もある。今回の番組は地方のよさをアピールし、われわれにも訴えるものが感じられた。星野知子さんの語りはとてもやさしく、地域の紹介も分かりやすかった。気づきの部分をもっと発信できるように考えなければいけないと考えさせられた。

○　全体的にやさしいバラエティ的な感じで作られていて幅広い年齢層に見てもらえる番組だったと思う。キャプションで使用している文字について、大きさや書体、色が急に変わったり、クエスチョンマークが大きいなどがあった。美しい景色や人の表情が重要だと思うときに文字等が顔にかかるときもあり、その部分は気になった。カメラの手ぶれやズームが速いため、見ていて気持ち悪くなる部分も若干あった。その程度しか指摘するところがないぐらい、大変楽しい番組だった。ぜひとも続けていってほしい。

○　好感を持てた番組だった。外国人が訪問したい場所で４７位ということだったが、新潟はおよそ２０年前から「大地の芸術祭」を開催しており、どこの県よりも外国人が訪れる場所では有名な場所だと思っていたため、こういう捉え方で本当によいのかと思った。筒石の街並みをすてきな場所だと思う、床下収納、屋根裏部屋を地下室、４階、５階として捉えるなど、その人たちの美しい目を持った心がそう見せていると思った。セオドア・ブラウンさんも含めた皆さんのやさしい日本への目を感謝する側面があったらよいのでないかと思った。

○　番組はおもしろかったが、知られざる日本がいっぱいあると思った。われわれも欧米などの外国を訪ねると知られざる場所をたくさん発見できると思う。そういう目では同じレベルだと思う。お酒の好きなカナダ人は地酒を飲んで人生が変わったと言っていたが、日本人もワインやフランス料理などを知って人生が変わった人がいるのと同じで、お酒はそのぐらい大きなものを持っていると思う。お酒をつぎ、

返杯を行う習慣は日本文化の基底にあると再認識させられた。日常の当たり前が珍しく、おもしろいという発見は外国人の目を通し、出てきた感じがする。似たような番組は民放にもかなりあるが、観光旅行から体験型の旅行に目をつけた視点がこの番組のおもしろかったところだ。全国でワーストと言うとその県の人は落ち込むため、あまり言わないほうがよいのではないか。あまり順位にとらわれないほうがよいと思う。３人の外国人の目線を紹介するのに２８分という放送は中途半端だった。よい視点はたくさん出ていたと思うが、１人か２人に絞って、具体的な内容にしたほうがよかったと思う。星野さんの社会的な問題を含めた解説は親しみが持てたし、説得力のあるよい番組だった。

○　私自身も日本酒と出会って人生が変わった部分もあり、「ぶりかまとぬる燗(かん)が最高だ」とマシュー・ヘッドランドさんがコメントした途端にぜひ会いたいと思うぐらい感覚が似ている。日本人はこういうもの、お酒の飲み方はこういうものという固定観念を崩すことが国際化であると思うが、３人の外国人は観光客ではなく、新潟在住で、魂がほぼ日本人だと思った。日本語も丁寧で、同世代の日本人の日本語よりも美しく感じられ、真摯(しんし)な雰囲気があったのも好感を持てた。日本人らしさを外国人に移し替え、外圧に弱い日本人がその姿を見てもう一度新発見をするというような番組がたくさん作られているが、そういう中でも上質な、当たりの柔らかい、共感の高い番組だった。筒石の町歩きや妙高高原など、日本人にとって新しい発見という作りになっているが、見方を変えればその魅力は普通の日本人でも発見できる。ずっと住んでいる人には分からないが、首都圏から移住した人や若い世代は発見できるかもしれない。違う世代、違う国のコミュニケーションがうまくできたときに発見が生まれるのだと思う。ほかの番組でもそうだが、外国だから、地方だからという固定観念だけを発端として番組を作ると共感性は薄れるのかもしれない。今回はそれがうまく浮かび上がっていた。われわれも外国に行けばありふれたものを写真に撮って喜んで帰ってくるが、結局はそういうことと一緒ではないか。特別なことと言い過ぎるのでなく、相手の視点に立ったらどうだろうという考えで番組を作ることで新たな発見ができ、それが私たち日本人旅行者にとっても大変楽しいことかと思う。全国的にもこういった番組で新潟をアピールすることはよいのでないかと思った。

○　引き込まれるように視聴し、時間がたつのを忘れた。視聴してから、いくつか気になったことがあった。放送されなかった収録の部分に結構おもしろい話題が詰まっているのでないかと思った。特に３番目のセオドアさんは、外国人だから聞きにくいことも平気で聞け、答える側も外国人だから答えるという場面で、町のいろいろなよさをさらに深める材料があったのではないかと思った。そこをもっと紹介

するとよかったと思う。３人のうち２人が役所の職員、１人が外国語指導助手だった。役所の２人はともかくとしても、外国語指導助手のマシューさんをよく探してきたと感心した。日本酒と食べることへのこだわりを感じ、もっと拾い上げてもよかったのでないかと思うことが１点ある。番組で、日本酒に合う料理として、「笹川流れの塩」が紹介されたが、「笹川流れの塩」とは何なのかについても踏み込んで紹介してほしかった。また、出演していた外国人は、３人とも上越在住だと思うが、新潟は上越、中越、下越とあり、シリーズでそのうち取り上げると思うが、同じようなペースで中越、下越を見せるのではないとすると、３人の選び方もバランスをとったほうがよかったのではないか。広い面積の県を扱う場合、ある程度バランスよく配慮することも必要ではないかと思う。もう１つ番組作りに期待したいこととして、新潟を含めた地域放送局が地域を応援する際に、短期的に応援することもあるが、長期的に種をまいて水をやり育てるという意味で、子どもたちに新潟のよさをどう伝えるかという切り口を入れてほしい。それが最後のセオドアさんの部分に求められると思った。本当に楽しく、あっという間に時間が過ぎる番組だった。

（ＮＨＫ側）

外国人の話はなかなか見てもらうのが難しく、新潟でも取っつきにくい部分もあり、どうやったら身近に感じてもらえるか悩みながら制作した。テロップなど、若干押しつけがましくなってしまった部分、説明の順番をはしょっているように見える部分もあったのかと思う。そういう部分は反省し、今後うまく生かせればと思う。番組の趣旨としては、新潟の人たちに新潟の魅力を分かってほしいということ、外国人が感じていることを通し、新潟の人が外国人にやさしい目線を持ってほしいということだ。海外発信を行わないと、観光客誘致の面ではあまり意味がないと考えていたが、番組の目線が今後の観光振興の役に立つという意見を頂けたことは心強い。そういう意味でも貢献することができたのであればうれしいし、大変励まされた。今後も新潟の魅力を全国、海外に向かって何かの形で発信できるように努力したい。引き続きよろしくお願いいたします。

＜放送番組一般について＞

○　熊本地震の報道について、さまざまな番組で益城町を含め熊本県の地震被害を取り上げており、心より感謝したい。１か月が経過する中、報道が少なくなると、ボランティアの数や義援金の額にも影響が及ぶ。メディアの影響力は大きく、これからも引き続き取り上げていってほしい。月日がたつごとにＮＨＫでの取り上げ方が変わってきたと感じる。今までは１日１日変わる被災地の情報をいかに伝えるかという内容が多かったが、最近は防災の視点で今後どのように備えるかという内容も増えてきた。今後の地震に備えるという視点は大変重要だが、相変わらず何を備蓄するのか、非常持ち出しグッズの話になっているような気がして、その点は残念だ。被災者からこんなものがあればよかったということを引き出して紹介しているが、そういう内容は番組で構成しやすく、何よりも視聴者の反応がよいのはＮＨＫだけではなく、民放からもよく言われることだ。そのような点は理解出来るが「防災＝非常持ち出し袋・グッズの備え」という短絡的な内容ではなく、防災の本質を捉えた番組を多く制作してほしい。今回の熊本地震、阪神・淡路大震災、新潟県中越地震もだが、内陸の地震では直下型の激しい揺れに耐えられなかった建物の脆弱性こそが多くの命、財産を奪ってきたと言える。そのことを受け止めてもらい、建物の耐震化を促進する情報を積極的に発信してほしい。耐震性の低い建物が奪うのは命だけではなく、財産、将来の希望も失うという大きな影響がある。住む場所を失うという喪失感は心に大きな傷を残し、避難所や仮設住宅での生活は健康面にも影響する。家を失うことは大人だけではなく、子どもの人生にも影響する。家を再建できないストレス、イライラが家庭内暴力、児童虐待、震災離婚など、家族の絆をも脅かすことがある。家を失うことは社会の基盤を失うという深刻な問題だということから、どうしたら災害から自宅を守ることができるのか、ＮＨＫでは積極的に訴え続けてほしいと切に願う。

（ＮＨＫ側）

大事な指摘を頂いた。熊本地震が発災した際には、現状がどうなっているのかすら分からない状況だったため、まず事実を把握し伝える報道が中心になった。１か月が経過し、時がたつにつれ、心のケアの問題、何が足りないのかという問題など、いろいろな課題が見えてきた。その課題を提示することと同時に、解決への道筋も含めて取材し、ニュースや番組を制作しているところだ。建物の耐震問題も重要だ。耐震基準が変わった前と後で住宅の被害にどれだけの差があった

のかというニュースも伝えている。今後どういう形で住宅を造るのかなど、直下型地震が起きる中でいろいろな問題がある。コストの問題もあるだろうし、今家がある人はどうしたらよいのかということもある。幅広く伝えていきたい。

○　熊本地震が起きてからすぐに、高速道路や鉄道などの交通機関が寸断された。どこの道路が不通となっているのかがインターチェンジ名などとともに文字情報で伝えられたが、関東で見ていると熊本、八代などの大都市はある程度分かるが、細かいインターチェンジの名前までは分からないため、どの辺りなのか分かりにくかった。支援に行きたい人など、いろいろな意味で位置情報を知りたい人がいたと思う。私の知る限りでは、３日後の深夜になって初めて地図や路線図が出て、不通となっている場所が明示された。テレビであり、地図をもう少し早く出せなかったのかという気がした。最近はインターネットでも地図情報が瞬時に出てくる時代だ。今回の熊本地震だけではなく、事故のときでも場所を早く知らせることは大事だと思う。汎用性のある地図を作っておいて、時間をおかずに画面に表示させるということがあってもよかったのかと思う。ラジオ第１放送ではどこのスーパーマーケット、どこのドラッグストアが営業しているのか、お店の名前も出していて、かなり丁寧な放送をしていた。メディア別に伝える情報の役割分担がされていたと思う。いろいろな情報をいろいろな方が必要とするので、それぞれのメディアでどういった情報を伝えているのか、メディアをクロスさせるような形で知らせてほしい。カーラジオを聴いた人が誰かに教えることもできる。いろいろな形で複合させ、災害時に報道するという準備はもっときめ細かくてもよいのかと感じた。

（ＮＨＫ側）

ニュースの中で、通行止めになっている場所について地図を出していたと思う。台風のときは左下に台風の位置情報を出すことが可能だが、門型、Ｌ字型に文字情報を表示する場合には細かい地図を出すのは難しい。熊本地震でどこが通行止め、国道が不通なのかをまず地域の人に分かってもらうため、なるべく早く文字情報で伝えた。門型、Ｌ字型の中で分かりやすくどう表現できるのか、検討させていただきたい。ライフラインの放送はラジオやホームページで伝えていることを分かりやすくガイドしてもよいのでないかという点も工夫したい。

○　熊本地震の報道について、地方局と全国放送の報道の内容を変えられないだろう

か。熊本、九州に住んでいる方が欲している情報と関東、全国の方が知りたい情報は若干違うだろうと思う。新潟県中越地震が起きてから　約１２年、新潟県中越沖地震が起きてから約９年経過したが、金よう夜きらっと新潟「にいがた国際旅行社＃１　私が愛するＮＩＩＧＡＴＡ」で紹介されたように新潟県が訪れてみたい観光地で全国４７位だったのは、新潟がＰＲ下手ということもあるが、数パーセントは新潟県中越地震と新潟県中越沖地震からの立ち上がりが遅かったことも大きな理由としてあると思う。新潟県中越地震が起きた後の風評被害で、新潟全体が壊滅的な打撃を受けたのでないかと思われ、観光の落ち込みが大変大きかった。少し上がりかけたところで新潟県中越沖地震が起き、観光面では奈落の底に落とされた。そこから観光の発信が全国的にもなかなかされずに、よい場所であるにもかかわらず観光が落ちた経緯はあると思う。熊本地震は、直下型で被害の甚大なところは甚大だが、甚大ではないところでは通常どおりの暮らしをしている方もおり、かなり大きな差がある。今後は風評被害が大きくなっていくだろうと思う。地震が起きて１か月経過し、天草、黒川温泉では観光の落ち込みが激しく、このままいくと大変なことが起きるということだ。観光を取り戻すには、熊本の被害と同じぐらいかそれ以上伝えていかないと戻らない。しかし番組を制作するのも時間がかかる。風評被害で観光の落ち込みが激しいという番組を作ろうと思ってからオンエアまでに、観光客が戻ってくるまでにタイムラグが相当ある。これから復興に向けての報道ももちろんだが、観光客が夏に戻るような番組も作り、早く通常の暮らしに戻れるところは戻れるような手助けをしてほしい。

（ＮＨＫ側）　全国と地方の放送の内容を変えられないかということについて。あれだけの大きな地震であり、全国放送でも相当伝えてきているほかに、九州管内のニュースや熊本県域のニュースで伝えている。首都圏では、Ｌ字型の情報でボランティアの方に参考になるようなことや義援金の募金先などの情報を伝えているが、地元ではライフラインの情報などを主に伝えており、地域によって伝える情報を変えている。風評被害は悩ましいところだ。学会では今後３０年以内に首都直下地震の起きる確率は７０％だと言っており、熊本地震などの被害、いろいろな課題をきっちり伝えることはやらなければいけないことだ。ただし、風評被害の部分を意識し、伝えなければいけない。黒川温泉郷については「ＮＨＫニュース　おはよう日本」でも、旅館の女将たちが奮闘していること、ほとんど被害がなかったこと、宿泊客が落ち込んでいることを伝えた。「泊まりにきても全く被害はなかった。おもてなしを受け

られてよかった」という声も伝えた。被害のないところは大丈夫だというところも含め、報道していく。

○　熊本地震は報道でもよく伝えられているとおり、日本でもあまり経験のない長い時間揺れる地震だった。ＮＨＫは最初に地震の状況、避難所の模様、食糧が不足していること、ボランティアのことなど、流れとしてうまく伝えているが、他局では、東京都内で直下型地震が起きたときには何十万人が亡くなるというような、不安をあおるような報道のされ方があった。地震に備えること、心構えをすることは大事だが、不安をあおるような報道があったことは気になった。東日本大震災の後には観光、農業など、いろいろな面で地元の人が苦労した。地元を支援し元気づけるような番組も作ってほしいと感じた。

○　熊本地震では耐震がキーワードになるということを嫌というほど見てきたが、今後も伝えていってほしい。地域をＮＨＫはどう応援するのか、すべての人が避難所へ行き、右へならえにする人間をつくることが本当によいのだろうか。震災を自分のこととして受け止め、行政、政治にすべてを任せるのではなく、自分でどう頑張っているのかということこそを伝えるべきだろうと思う。また、そういう観点で頑張っている人たちについても伝えてほしい。行政の人たちがこの１か月間、１日も休みを取らないことが当たり前だと思われてしまって、その苦労は報道で伝えられていない。どうしても被災者がクローズアップされてしまいがちだが、そのうえでどうするのかという課題解決の方向に割いていく必要があると感じた。報道の全体のあり方がそちらへ行っているのではないだろうか。弱い日本人を増やしてどうするのかと感じている。

（ＮＨＫ側）

耐震性のことは重要だと思う。建て替えると費用がかかるが、筋交いを入れるなど、ちょっとした工夫で耐震性が上がることもあると思う。そうしたことの必要性をさまざまな面で皆さんにお知らせすることはきちんと行っていきたい。

○　熊本地震については、日本列島にある断層を考えればどこの県も人ごとでないと思う。熊本で刻々と起こっていることをＮＨＫが伝えているので注目しているし、大きな力にもなると思う。

○　東京都美術館で「生誕３００年記念　若冲展」が開催中だが、４時間待ちということで驚いた。ＮＨＫで関連する番組を放送した影響のようで、ＮＨＫの影響力を

思い知らされた。４月２４日(日)のＮＨＫスペシャル「若冲　天才絵師の謎に迫る」では、若冲の細密画について高感度カメラなどの高性能技術で紹介し、ＮＨＫでなければできない番組だった。若冲は、代表作の「動植綵絵」の３０幅を１０年かけ制作し、千年たてば自分の絵が分かってくれるだろうと言ったそうだが、その意味がよく分かる番組だった。「鳥獣花木図屏風」では８万 6,000 個のマス目を描いているが、番組ではデジタル化して見せてくれた。1788 年の天明の大火と天明の飢饉(ききん)も紹介していたが、もの足りなかった。もう少し当時の社会の状況を具体的に紹介してくれると、若冲について理解が深まったと思う。若冲は「文字も残さず、言葉を残さず、ただ絵を残した」と謎めいた画家だったが、この番組でよく分かった。４月２９日(金)の「若冲ミラクルワールド　豪華版」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 10：00～10：59)も見た。ナビゲーターに嵐の大野智さんを起用していたが、大野さんは細密画が上手で、そういうことで若い世代にも見てもらいたいということだったのだと思う。高精度カメラを使って深く作品解析を行っていて、森村泰昌さんによる「動植綵絵」の分析がおもしろかった。升目描の技法の分析も具体的に見せてくれた。４月３０日(土)のザ・プレミアム「若冲　いのちのミステリー」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 9：00～10：29)もすごかった。さかなクンや、水中写真家の内山りゅうさんと石田利男さんなどを使って、若冲が描いた描写がうそではないことを解析していた。３つの番組で若冲の天才性と謎に満ちているということを詳しく紹介していたが、これらの番組を見ればだれでも展覧会に行きたくなると思った。若冲の生き様について、江戸中期の黄檗宗の売茶翁の影響を受けた背景なども詳しく紹介してほしかった。若冲を知っている人は少なかったと思うが、ＮＨＫが放送したために、多くの人が展覧会に押しかけたのだろうと思う。若冲展に入れず東京藝術大学に行ったが、「いま、被災地から　－岩手・宮城・福島の美術と震災復興－」というよい企画を開催していた。岩手、宮城、福島で災害に遭った美術館の絵を修復し、見せるものだが、全く人が入っておらず、寂しかった。こここそ支援するべきだと思った。ＮＨＫではこういったことも放送してくれるとよいのでないかと思った。

○　４月３０日(土)のＮＨＫスペシャル「そしてバスは暴走した」を見た。丁寧に掘り下げた取材で、バス会社、運転手などにも状況を取材し、おかしい方向に進んでいることが分かった。国の規制緩和でバス会社の新規参入が多くなり、人材不足、機材不足が起きていること、事故を起こしたバス会社がさびていて危険なバスを使用していたことなどが報道された。命を預かる経営者の心構えが掘り下げられて伝えられたことで、このままでよいのかと強く感じた。東京オリンピック・パラリンピックに向け、外国から大勢の観光客が来ることが予想されるが、こういった事故があると日本に対する不安が生まれる。日本の安全性やすばらしさをアピールでき

るようなことをしないといけないと感じた。長野放送局も取材に関わっていると思うが、かなり掘り下げられた分かりやすい番組だったと思う。

○　５月３日(火)のにっぽん紀行「ディスカバー“魅力度最下位県”」を見た。国際観光課の若手職員を通し、外国人観光客の誘致の問題、施策を伝えている番組だったが、茨城県における現状、問題点をかなり分かりやすく伝えていた。映像的にもテロップがすっきりしていて見やすく、案内人の綾部祐二さんもきちんと進行していて聞きやすかった。外国人観光客の成熟した誘致においては、ハード面はもちろん、ソフト面の充実が大切ということをきちんと伝えていて好感が持てた。

○　５月７日(土)の「ＢＡＢＹＭＥＴＡＬ革命・完全版～少女たちは世界と戦う～」(総合 前 2：00～2：44)を見た。ＢＡＢＹＭＥＴＡＬが 2012 年ぐらいから世界の音楽フェスに参加していく状況も含め、認知されていくさまの紹介と経過報告というライブインタビュー形式の番組だった。ただのアイドルの音楽番組ではなく、現象と状況をコンテンツの特性とともに紹介している番組で、クールジャパン戦略等も含めた、重要な番組だったと思う。

○　４月２４日(日)のうまいッ！「美白で柔らか　ホワイトアスパラガス～長野県・千曲市～」について。長野県千曲市はホワイトアスパラガスの産地ということだが、実際は２軒しか栽培していない。生産者が少なくても、こだわっている生産者を紹介してくれたことがうれしかった。番組では、ホワイトアスパラガスを使った料理が紹介されたが、料理のメニューから食材を紹介するという番組的な流れはあるにしても、今回のように食材から料理を紹介するというところがよかった。生産者も今回の番組で取り上げられて大変喜んでおり、励みになったようだ。その地域に１軒しかなくても、伝えるべきものがあれば全国各地に伝えてほしいと思った。

○　４月２７日(水)のガッテン！「新発見！鶏むね肉がこんなにもやわらかくなるとは！！」を見た。鶏むね肉はどうやってもぱさついておいしくなく、今まではヨーグルトや重曹につけることで柔らかくするのが限界だった。番組で紹介されたマイタケにつける方法を試してみたら、同じようにできて感激した。牛肉やシカ肉、イノシシ肉でも試してみたが、柔らかくなった。従来の重曹につける方法は薬品につけるようでイメージがよくないが、みじん切りのマイタケにつけるのはイメージもよく、大変な発見だと思い、久々に興奮した番組だった。震災など食糧難の際に、増えすぎて困っている野生動物を食肉として利用できないかという話がある。肉なので野外でさばいて食べるのは危険だが、厚生労働省と農林水産省とメーカーが移動式解体処理車を作り、その許可も出された。画期的なことで、解体処理車を使い、

屋外で食肉にし、山で捕ったシカ、イノシシを適正に、衛生的に車の中で食肉にする。食肉にしたものを、簡単においしく食べるところが加わればと思う。シカやイノシシは肉が硬いというイメージがあるが、マイタケで柔らかくしたものをみそ仕立てにすればおいしい豚汁のようなものもできるし、ステーキも焼ける。そういった可能性も示してくれて、番組に感謝したい。

○　５月７日(土)の週刊ニュース深読み「“税金逃れ”に世界が怒り！　パナマ文書って何？」では、分かりにくいニュースの中身をうまく伝えていた。かつて放送していた「週刊こどもニュース」のように大変分かりやすかった。他局やＮＨＫの番組でも解説は何度かあったと思うが、一般にも分かりやすく解説してくれていた。よい番組だと思った。

○　いつも「ＮＨＫニュース　おはよう日本」の「まちかど情報室」を見ている。便利なものを基本に紹介しており、そのつどいつも感心し、家族と話題にしている。しかし最近気になっていることがある。事例で出てくるアイデア商品はだいたい子どもたちが使うことが多い。便利になることが子どもたちにとってよいことなのか、判断が必要だと思う。障害がある人が社会参加につながった、自分でできるようになったという事例はよい。しかし、子どもたちにとって、もっと能力を開発しなければいけないときに、便利なものを与えることがよいことなのかと懸念した。簡単に事例を出しすぎているような気がする。

（ＮＨＫ側）

　大切な視点を指摘していただいた。われわれは便利がよいことだと思いがちだ。「まちかど情報室」では確かにこんなに便利だというものが多いと思う。不便であることの意味合いを考えることも重要だと思う。以前、「ＮＨＫニュース　おはよう日本」では定規の目盛りを１０刻みでなく、１２刻みにするなど、不便さの中から発想を転換し、子どもたちに工夫させるという企画を放送したことがある。子どもたちにとって不便さをどう乗り越えるかというのは重要な視点だ。そういう視点も「まちかど情報室」に入れるように考えていきたい。

○　夜のニュース番組では「ニュースウオッチ９」「クローズアップ現代＋」などがあって、最後に「ニュースチェック１１」が放送されているが、なじめないとずっと思いながら見ている。なじめないのは演出の問題のような気がする。ニュースは

そもそも演出を必要とするわけではなく、分かりやすい解説は必要だが、本来はことばと映像で伝えるものではないかと思う。「ニュースチェック１１」が演出過多だとは言わないが、セットに不必要なものが付属していて違和感を覚える。他局と比べてニュースの取り上げ方自体に何も遜色はないが、なぜあのセットを見ながらこの時間帯にニュースを聞かなければいけないのだろうと思う。１日のニュースをきちんとチェックしようという趣旨は分かるが、「シャキシャキいきます、サクサクやります」と言ったり、背景でサクサク、シャキシャキと手書きの文字も表示されるが、夜１１時台は、１日サクサク、シャキシャキと働いてきた後であり、じっくり落ち着いて見たり聞いたり考え直したりする時間帯ではないかと思う。そこも違和感の１つだ。新機軸を立ち上げようとしているとは思うが、検討してほしい。地方の話題を取り上げているときはほっこりしていてよいが、わざわざホームページから桑子真帆キャスターが検索し、画面の右側にキャスターの顔が表示される演出も、もっと地方の話題の画面をしっかりと見たいと思ってしまう。細かな違和感がいろいろある。

○　「クローズアップ現代＋」の後ろで描いている絵が最後に出たからといって何なのだろうという思いがぬぐえない。絵が１日のおさらいとしての意味を持っていればよいが、ただ描いて、割とすぐに消えてしまう。あの演出は本当に必要なのだろうか。もっとことばと映像で訴えてもよいのではないかとこの１か月半ぐらい視聴しながら思っている。一度始めるとあるスパンは続けないといけないのかもしれないが、検討する際にブラッシュアップをお願いしたい。

（ＮＨＫ側）

「ニュースチェック１１」は新年度のニュース番組改定の一つの柱として新しく打ち出した。ＮＨＫのニュースは多くの方によく見ていただいているが、年代別に調査すると高年齢層にかなり偏っている。メディア全体にも言えることだが、若い世代のニュース離れがかなり進んでおり、多くの年代にニュースに触れてほしいという気持ちがある。「ニュースチェック１１」を始めた一つの理由でもあるが、幅広い人たちに見ていただけるような、親しみやすく、見やすく、わかりやすく、１日がサクサク、シャキシャキと分かるニュースにしたいということでスタートした。１か月程度が経過し、ご指摘のような意見もたくさん頂いた。われわれがいつもどおり伝えるとよい反応が得られるが、それだけでは世代への広がりが少ない。いつものような番組に戻すことは簡単だが、

さまざまな工夫をしていきたい。インターネットとの連動を行いたいということがその１つで、地方のニュースをネットから引き出すのは、ネットでこういうものが見られるという１つの誘導でもある。少しずつ変えながら、より見やすく、分かりやすく、親しみやすく、若い世代にも見てもらえるようなものにしていきたい。仕事を終え「ＮＨＫニュース７」「ニュースウオッチ９」を見られなかった人たち、都会のサラリーマンや働き盛りの方たちに１日のニュースを分かってもらって、明日につながる情報を得ていただきたいという番組でもある。そういうことも踏まえて取り組んでいきたい。

「クローズアップ現代＋」のグラフィックについてはいろいろな指摘を頂いている。もう少し工夫をしていきたい。アメリカのニュースではああいった演出がかなり使われているそうだ。わかりやすくという意図で始めたが、伝わっていないということであれば工夫していきたい。

「クローズアップ現代＋」で、絵を描くのであればきちんと利用するようにと現場に伝えている。番組の流れを有機的につながればもしかすると可能性があるかもしれない。そこはもう少し探ってみたい。違和感がなるべくないように工夫したい。

○　４月から始まった土曜ドラマ「トットてれび」をとても楽しく見ている。小さいころに「若い季節」という生放送のドラマが大好きで、もう１回見たいと前から思っていた。５月１４日(土)の第３話がちょうどその場面で、当時をほうふつとさせるテーマ音楽、３人娘が歌うシーン、いろいろなドタバタが起こるところなど、懐かしく視聴した。カメラが少し引くとフロアのディレクターがいて、近くの中華料理屋で食事をする、そこで台本が出来上がってくるなど、さまざまな当時のことが再現されていて楽しかった。ＮＨＫは娯楽番組もすばらしいと思う。民放でも娯楽番組を見るが、いちばんチャレンジングで、テレビ業界に刺激を与えているのはＮＨＫだと思う。「トットてれび」もそういう一連の流れにある番組で、視聴者を楽しませていると思う。

○　５月７日(土)の映像散歩　世界の市場「ドイツ、韓国」(総合 前２：45～３：05)は、ドイツと韓国の市場を紹介するのかと思い、録画して視聴したが、文字情報も

ナレーションもなく、何の説明もないまま映像が流れているだけだった。外国に初めて行ってことばも分からない状態と同じ状況だった。韓国ではくさやのようなものを作っている場面があり興味が湧いたが、説明がないためよく分からなかった。ホームページで紹介があるかと思ったが、それもなかった。番組で何を伝えようとしているのかがよく分からなかった。ほかの国の市場についてもやっているようなので見てみようかと思った。

（ＮＨＫ側）

「映像散歩」は、放送をきちんと出すために深夜帯に実施する保守工事の際などに放送されている。工事は地域ごと、個別に行っており、すべての工事に対応するため、いつどこで放送を開始・終了してもよい番組を編成している。それをたまたまご覧になったのかと思う。深夜でも放送を見ている方が多い週末は朝まで通常の番組を編成しているが、そうでない日はこうした番組を放送するかたわら、この時間を使って安定送出のためのさまざまな工事を行っている。

○　私は夜中のテロップも説明もない「世界の市場」のような番組が大好きだ。そういった番組を見て想像することが好きだ。

○　５月７日(土)のＳＷＩＴＣＨインタビュー　達人達（たち）「立川談春×古川周賢」を見た。自分が受けたものを次の世代にどうつないでいくのかが、隠れたテーマだろうと思った。極めることの難しさ、師弟関係や人間関係をつくることの難しさ、歯を食いしばって乗り越えた人たちだけが感じ得る達成感や見える世界について語っていたが、その世界を見えない人たちからすると分かりづらい番組だったという感じがした。おもしろい番組だったが、結構長く感じた。前半は古川さんに立川さんが聞く、後半は立川さんに古川さんが聞くという仕立てだったが、達観した人たちが削ったことばを語るのを、すっきりとシャープに見せるには、もっと短い番組でもよかったのでないかと思う。

○　５月１３日(金)の新日本風土記「常磐線」を見た。ＮＨＫらしい建物、歴史の紹介ではなく、常磐線がつなぐ人の歴史としての構成がすばらしく、さすがＮＨＫという番組構成だった。地元住民としては経済効果につながりにくい内容だと思ったが、視点、構成はすばらしく完璧な番組だった。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２８年４月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

４月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、１５日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、長野放送局の最近の取り組みと今後の予定について、知るしん。信州を知るテレビ「“箸ピー”にかけた冬～ある児童養護施設の子どもたち～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、５月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　敦井　一友（敦井産業（株）代表取締役社長）
副委員長　伊藤由貴子（神奈川県立音楽堂館長・プロデューサー）
委　員　大山　寛（サンファーム・オオヤマ(有)取締役会長）
岡田　芳保（元群馬県立土屋文明記念文学館館長）
国崎　信江（(株）危機管理教育研究所代表）
髙野孫左ェ門（(株）吉字屋本店代表取締役社長）
野老真理子（大里綜合管理（株）代表取締役）
藤木　徳彦（フランス料理店オーナーシェフ）
古澤　宏司（(有）古沢園代表取締役）
山口　晃平（(株)山口楼 専務取締役）

（主な発言）

＜知るしん。信州を知るテレビ「“箸ピー”にかけた冬～ある児童養護施設の子どもたち～」（総合　２月１９日(金)放送）について＞

○　すばらしい番組だと思った。ネグレスト、児童虐待の果てに、子どもたちがどのような生活を送り、その過程の中で自信をつけていくのかがよく表現されていた。１８歳になったら卒園し、１人で生きていくために大学に進学することなども紹介されて、目頭が熱くなるような番組だった。ディレクターのナレーションも胸に染みるものだった。子どもたちの顔がかなりそのまま出ており、セキュリティー上大丈夫か心配になったが、性善説を唱えるのであれば、子どもたちの表情が視聴者に

伝わればよいと思える番組だった。

○　説明的なナレーションの番組が多い中で、必要なことだけを適宜語っており、取材者自身による語りだからこそ何を伝えたいのかが十分に整理されていた。番組のガイド役を担うようなナレーションで大変よかった。

児童養護施設ということばは知っていても、その現実を実感できる人たちはほとんどいないと思う。そういう中で、民間の養護施設があること、つまり、民間が運営していかなければならないほど対象となる児童が多いこと、そして、しっかりとした志を持つ民間の運営者がいることに驚いた。施設の運営体系がどうなっているのか、また、大学に進学する子どもなど、卒園後の子どもたちの生活はどう支援されるのかについては、番組のテーマとは異なるかもしれないが、大変気になった点だ。

施設の子どもたちの名前や顔、進路が明確に出されていたが、肖像権の問題も含め、保護者からクレームはなかったのか、保護者が何かの形で関与することはなかったのかと心配になった。

大変困難な環境の中で育っている子どもたちではあるが、環境が違っても同世代の子どもたちが抱える課題も投げかけていたと思う。“箸ピー”の大会で、施設では禁じ手としていた、同時に２個ピーナッツをつかむ有力な競争相手が出てきた際、あくまでも１個ずつつかむ正攻法で挑戦しようというくだりは、若い世代に対して、“楽をするな”“正攻法で乗り越えろ”という大いなるメッセージだと思った。だからこそ結果として優勝し、乗り越えた瞬間の子どもの表情が光っていたと思う。大事な場面だった。競い合いながら切磋琢磨(せっさたくま)し、生活の中でチームのコミュニティーを築く、自分が我慢をしてでも相手を助けるなど、さまざまな大事な要素が描き出されており、一般の家庭で育つより、施設で育った子どもたちのほうが社会性の高い価値観が持てるのではないかと思う。信州大学に進学する子どもが紹介されていたが、卒園した方々のその後に“箸ピー”が影響を与えたのかどうかも触れてもらえれば、児童養護施設とは何か、どういう役割を担っているのか、若い世代とのコミュニケーションギャップをどう埋めたらよいのか等、視野の広いテーマを見いだすことができたと思う。施設の子どもたちと信頼関係を醸成するまでじっくりと交流したとのことだが、どのように交流したのか。

（ＮＨＫ側）

２か月間くらい施設に通って交流を図りながら信頼関係を構築した。

○　そういった表向きだけでは判断できない価値観を確認できた意味で感動する番

組だった。

○　児童養護施設をテーマに扱い、取材も大変だったと思う。ナレーションをディレクターが担当したことは結果的に大変よかったと思う。番組の冒頭で“箸ピー”が紹介されたため、競技方法などに興味が湧いた。その後、施設に暮らす子どもたちの暮らしぶりが紹介され、それについても興味が湧いたが、もう少し知りたいと思うと、そこで話題が変わってしまうため、ストレスを感じた。テーマの重さは別として、もう少し丁寧に作ってほしかった。理解できないところがあり、繰り返し番組を視聴したが、見ている内にこれはこれでありかという気になった。いろいろな事情で児童養護施設に暮らす子どもたちが、１つのことに夢中になって一生懸命に取り組み、勝負に勝ちたいという思いをぶつけることが淡々と追いかけられるだけでも十分に価値はあると思う。“箸ピー”を通じ、ひなちゃんが成長していく雰囲気は十分に伝わってきた。

気になった点がいくつかある。ひなちゃんを紹介するシーンで、悔し泣きをしている女の子は別の女の子の映像だった。別の意図があったのかもしれないが。“箸ピー”の全国大会でピーナッツを２つ挟む競技者が現れるという話について、その手がそもそも競技として禁じ手なのかよく分からないまま、次の緊急ミーティングの話に変わってしまい、“このまま最後まで戦おう”という話は伝わってきたが、そもそも何を話し合うミーティングだったのかもよく分からなかった。また全国大会の規模、個人戦と団体戦の違いなども、簡単に紹介があってもよかったと思う。

ひなちゃんが最後に言ったコメントは「みんなで協力して団体戦で勝ててよかった」というものだった。団体戦で優勝し、愛育園の皆さんが、戦っていた人たちも含め、笑顔で番組が終われたのはよかったと思う。児童養護施設という大変難しいテーマを“箸ピー”という切り口をうまく使い、知らしめ、理解を深めさせてもらったよい番組だった。

（ＮＨＫ側）

冒頭の文脈では、ひなちゃんを主軸にするのではなく、子どもたちが泣いたり笑ったりしながら一生懸命頑張っているというところを伝えるべきだったかもしれないと改めて感じた。“箸ピー”は「國際箸学会」が主催しているが、統一ルールは、全国大会も含め、まだかっちりとしたものがあるわけではない。ルールでは２個つかむことは想定していなかったようだが、愛育園では禁じ手としていた。子どもたちは大きなショックを受け、先生たちを通じて抗議をしたが、受け入れられなかったそうだ。番組で紹介したのは、子どもたちを

落ち着かせるという意味合いでのミーティングだった。団体戦についてはさらっと紹介したが、時間の制約で細かい説明が出来なかった。

○　里親として、似た境遇の子どもたちを育てたことがあり、養護施設の子どもたちが親元を離れ、集団生活をすることでとても大きな傷を負っていることをよく分かっている。その子どもたちが一丸となってピーナッツを箸でつかみ、競い合うゲームに取り組む姿には胸が熱くなった。西澤君の明るい表情からも“箸ピー”がきっかけとなって自分を肯定し、自信につながっていくプロセスがよく分かった。親に捨てられたのは自分が悪いから、自分が悪いから親が自分をたたくなど、彼らはそのように自分をいつも否定していて、自虐的な態度をとることもある。職員が子どもたちに自分を肯定し、自信を持ってもらう取り組みを“箸ピー”を通じ行っており、施設の方向性、考え方がすばらしいと思った。

養護施設にいる子どもがテレビに映ること、たとえば私のような他人に里親として預けることも大変なことだと思う。さまざまな事由で離れて暮らさなければならない事情にある実親にテレビに映ることの了解を得ることの苦労は大変だったと思う。かなりの時間と労力があったはずで、長野放送局の皆さんはすばらしいと思っていたが、コミュニケーションを築くまでに２か月と聞いて、そんなに短い時間で心を簡単に開くのかと自分の経験から思った。おそらく陰には職員の並々ならぬ説得、理解、協力があったからこそ、短時間で問題をクリアできたのではないかとも感じた。地域に密着し、地域にあるちょっとした出来事、心温まる情報を発掘する取材力はすばらしいと思う。社会にそういう子どもがいることに関心を持ってもらう意味でもすばらしい番組だったと思う。

（ＮＨＫ側）

愛育園やその職員を通じ、特殊な事情の方は除き、全員の保護者の方に連絡を取ってもらった。その了解を得たうえ、かつ園の判断も聞きながら、子どもの顔を出すか出さないかの判断をした。園側とはこちらが何を伝えたいのかというやりとりの中で全面的に協力していただいた。

○　児童養護施設があるとは知っていても、どういうところなのか、どういう活動をしているのか実態は全く知らなかった。私もある福祉施設と一緒に仕事をしたことがあるが、仕事を始める条件として、その福祉施設を理解するために、最低でも２泊３日泊まり込んで、その生活を知ってほしいということがあった。短い時間だったが一緒に生活し、接することによって、同じ仕事をお願いすることでも、普通と

は違うと分かった。この番組は、通常の「知るしん。信州を知るテレビ」とは、制作にかける思いが違うと感じた。“箸ピー”の勝負を通じ、自分たちの弱さや欠点を解決する自分自身の心を育てるということは、指導してもなかなか伝わらないことだ。私の職場にも新入社員がいる。施設の子どもと比較するつもりはないが、普通の子でも自分のメンタルを自分で正すことはできない。怒られたら沈んだままでその日が終わることもあるし、仕事に来なくなることもある。家庭環境などでつらい思いをしてきた子どもであるがゆえに、園でメンタル面、社会に出て通用するものを“箸ピー”というゲーム、大会を通じ、教えていると思った。園での規則正しい生活ぶりは、一般の家庭でも教えていないようなことで、当たり前のことを当たり前に教えていることを見てハッとさせられた部分があった。全国的にこういった施設があると思うが、しっかりと指導されていることが改めて分かった。そういう子どもたちが将来活躍でき、社会が受け入れるような、理解を得られる番組だったと思う。大変よい番組だった。

○　養護施設への取材は大変だったと思う。友人が養護施設で教えており何回か行ったことがあるが、皆礼儀正しかった。指導者がよいからだと思う。愛育園の生徒たちも１人１人がよい顔をしていた。撮影はかなり苦労したと思うが、子どもたちの顔が生き生きとしていて、よい環境なのだと思った。お互いに連帯感や共生感を育みながら成長している様子が見られたと感じる。かつてのチャンピオン西澤君の“箸ピー”の技は超人的で感心した。ひなちゃんの挑戦の様子も感動的だった。単なる“箸ピー”だが、単なる“箸ピー”ではなくなったという感銘を受けた。施設の中で“箸ピー”にかける情熱を短時間でうまく編集していたと感心した。“箸ピー”という競技は知らなかったが、老人施設やリハビリなどに使ったらどうかと思った。「國際箸学会」があるということにも驚いた。もう少し、学会についても触れてくれていれば、単なる“箸ピー”ではなく、もう少し大きく広がったかもしれない。

○　タイトルの“箸ピー”の意味が分からず、何だろうというのが第一印象だった。障害のある子どもと接する機会があるが、タイトルに養護施設とあったため、子どもたちの生い立ちの問題、悲惨なことなど、重いテーマなのかと思ったが、実際の番組は正反対だった。丁寧な取材があったからこういう番組ができたのだろうと実感した。画面に出てくる子どもたちが生き生きと活発で、負けん気もあった。“箸ピー”の大会を通じ、ひなちゃんの成長が伝わってきた。最初は投げやりで、あきらめもあったが、養護施設の先生、大人たちにも気を遣える、周りの子どもたちにも気を遣うように成長したことがよく伝わってきた。最近の子どもたちは自分中心という印象があったが、競技を通じ、施設の仲間と一緒に前に進むことがテーマと

して伝わってきたよい番組だった。養護施設における教育水準の話もよく聞くが、頑張って信州大に進学する先輩もいて、そういう成功事例があるとみんなが目標に向かって進むことができると思う。西澤君が社会に巣立って、施設の子どもたちの目標になってもらえたらよいと感じた。また、気持ちが和らぐナレーションだった。取材を丁寧にしたからこそ、ああいうことば、語り口で説明できたのだと思う。番組を見て感動した。施設の子どもたちを、地域や一般社会の人たちが事情を理解し、支援できるような社会になればよいと思った。

○　円福寺愛育園には、施設を応援するための講演を行ったことがあり、とても縁のある番組だった。今は２代目の方が経営しているが、創立者同様に慈悲深い人で、施設全体にその風土が行き渡っていると思う。子どもたちそれぞれに家庭の事情があることを十分に承知したうえで、あえて詳しく触れなかったことは大変好感が持てた。　“箸ピー”という競技に施設全体で取り組み、一人ひとりが一生懸命に取り組むことを通し、記録を伸ばしていくという小さな達成感を積み上げ、肯定的に自分を受け止めていく姿を番組で見ることができた。私自身も同じような境遇の子どもたちを受け入れているが、一人ひとりに自信を持ってもらう方法は同じで、誰でもできそうなことを誰もできないぐらい一生懸命に取り組むことだ。こういう番組を制作してくれたことは、同じ問題を抱え、日々がんばっている多くの人たちを励ましてくれたと思う。感謝したい。私は日頃からそういう世界に身を置いているが、縁遠い人たちにとっては、暗く、悲しい、つらいものというイメージがあるようだ。しかし全く違うことを知ってほしい。そこは楽しいもの、幸せなところだと番組のディレクターが一番学んだのでないかと思う。

○　集中力を持って、達成感を味わえることが“箸ピー”だと思う。“箸ピー”のことは知らなかったが、左右の手を使い脳の活性化によいと思う。たわいのないゲームだが、子どもには何が転機となり、何がステップアップのチャンスになるのかは分からないものだとしみじみ思った。単純だが、一生懸命に何かに取り組む姿のさわやかさがあった。子どもたちを見守る愛育園の先生方、前面には出て来なかったが、園の中での大会に地域の方が参加している場面がよいと思った。施設はどうしてもクローズになりがちだが、その場面があったことで、中で育まれている家庭的な温かさと、地域の方々のまなざしもあることがうまく伝わってきたと思う。子どもだけに焦点を当てると、周りで温かく見守っている地域や社会の視点が欠けてしまうと思うが、短い時間ながらもそこが紹介されて好感が持てた。子どもたちは施設にいるが、自然にみんなに育てられていくし自分たちも育っていく様子が伝わったと思う。全体的に温かい自然な印象を受けた。“箸ピー”については、全国大会の規模などもう少し情報があるとよかったと思う。

「知るしん。信州を知るテレビ」のような番組は、地域の小さくても、大事な話題をきちんと取り上げ積み重ね、長野県の人が見て、長野のよい面を知る、地域という共感をつくるよいチャンスでもあると思う。これからも丁寧な取材、地域に密着した取材を続けていってほしいと切に思う。

○　ディレクターが熱意を傾け、取材したものをそのまま番組にした感じが伝わってきた。ディレクターの語り口も番組の雰囲気に合っており、まとまりがよかった。あきらめがちだった女の子ががんばって逆転して優勝するというのはドラマのようだった。ディレクターがそこに着目し、浮き彫りにしたところに取材の成果があったと感じる。番組化を前提とせずに取材を進めていたということだったが、全国大会までの取材でそういうところに着目し、捉え続けたことで要点がしっかりし、番組全体のまとまりにつながったと思う。

番組全体の評価には全く影響しないところで疑問点がいくつか残った。愛育園でなぜ“箸ピー”を始めたのかという説明があまりなかった。愛育園で６年間取り組んでいて、全国大会が第２回ということは、愛育園の取り組みのほうが古いということになるが、前後関係、全国大会の規模などがよく分からなかった。その要素がなくとも、番組として十分に成立したとは思う。子どもの映像や個人名などについては、きめ細やかな配慮をしていたと思う。事前に園に確認を行ったということだが、どのような段取りで確認していったのか。

（ＮＨＫ側）

取材の際は顔を出しても大丈夫かということは問わずに普通に撮影してくるように指示し、最終的な編集後に顔などにモザイクをかける処理を行った。ロケを始めてから１か月ぐらいの間で、園側から保護者に確認を取ってもらい、あわせて園としての判断もお願いした。名前も含め、すべてを確認しながら、１つ１つカットレベルでモザイクをかける処理を行った。

○　もし間違いがあれば影響が大変大きいが、ディレクターの記憶に頼って子どもを特定し処理を行ったのか。

（ＮＨＫ側）

園と一緒に作成した顔写真と名前がセットになった資料を用意し、画面と資料を付き合わせ、確認を行った。

○　第三者が後から確認することができるような資料があるということか。

（ＮＨＫ側）

そのとおりだ。

○　最近の番組では字幕スーパーを入れることが多くあるが、今回はあまり入っていなかったと思う。何か意図があったのか。見ていて新鮮だった。

（ＮＨＫ側）

今回悩んだところだ。通常インタビューに関してはＮＨＫのニュースも含め、できるだけスーパーを入れるようにしているが、今回はことばよりも、表情を伝えたく、子どもが話すところは極力入れないようにした。

今回のご意見を受けて、ローカル番組でもきちんと取材を重ねることで、皆さんの中に何かが残るような番組が制作可能であることをディレクターに伝えていきたい。しっかりした取材が私たちの番組の基である、財産であるときちんと伝えたいと改めて思った。ありがとうございました。

＜放送番組一般について＞

○　昨日の熊本の震災報道では、全国の人に熊本の地震を知らせる役割のほかに、熊本で避難している人に届けるメッセージがしっかり入っていた。「皆さん、頑張ってください」「移動してはいけません」など、熊本で避難している人に伝えるメッセージが、結果的に私たちの心に響いて１つになれる。その手法はよいと思うし、続けてほしい。関東・東北豪雨の報道でも感じたが、地方になればなるほどリポーターなどが安易なコメントをする場面が多い。「えーと」「まー」「あのー」ということばがやたらと多く、聞きづらかった。聞きにくいことばを外すようにしてもらえないかと思う。

○　熊本の地震報道については、初動から情報を的確に伝えていたと思う。東日本大震災のときの自らの経験上、震度６で１０秒～１５秒の地震よりも震度５で１分半ぐらい揺れるほうが大きな被害になると思う。的確な被害状況を全国的に知らせるのであれば、確定してからでもよいので、震度５が何秒間続いたのかという情報を

織り込んでくれればと思う。

（ＮＨＫ側）

震度はどれぐらいの揺れかを示している。確かに長く揺れることで被害が大きくなる部分もあると思う。何秒間続いたのかは地震の波形などで分かることもある。地震を検証するときにはそういった情報も伝えていきたい。

○　速報の際は、気象庁の発表をそのまま伝えているのか。その中に時間の情報は入っていないのか。

（ＮＨＫ側）

気象庁の発表を伝えているが、地震直後に何秒間揺れたのかという情報はない。後で波形を分析して、どのくらいの揺れが何秒間続いたのかということは分かることもある。

○　熊本の地震報道では、熊本放送局内での最初の揺れの状況が映し出されたが、棚は倒れず職員はすぐに机の下に入っていて、安全対策がしっかりされていると思った。いちばん大事な災害情報については中継の連携がうまくいっていなかったと思う。もともと九州は地震が来ないとよく言われていたせいか、突発的な地震災害の対応はお粗末だったと思った。音声がブツブツと切れるなど、１分ごとに民放と見比べていたが、民放のほうがすばらしいと感じた。発災後の初期の段階でＮＨＫは死者が１人だと伝えていたが、民放では死者が３人、負傷者が１００人と情報はどんどん更新されていた。その情報の遅さは何だろうかと感じた。民放は早い段階でライフラインの状況を伝えていたが、ＮＨＫは文字情報も含めずっと同じ情報を伝え、しつこいぐらいに同じ映像を繰り返していた。このタイミングで活断層の話は必要だろうか、しっかりと情報を伝えなければいけないときにいつまで活断層の話をしているのだろうかという違和感もあった。民放はどう防災対策をするのか、先を見越しどんなことを考え行動するべきか、その専門家を呼んで話を聞いていた。ＮＨＫは同じことを繰り返し言っているにすぎず、そのときの状況変化に対応できるような適切なコメントができていなかったと感じた。また、民放と見比べるとＮＨＫは映像の画面が小さかった。民放では文字情報を横にどんどん流していたが、ＮＨＫでは縦で固定され、パンパンと切り替わっていた。見ているほうは横に文字情報が流れているほうが読みやすい。ＮＨＫでは、映像を邪魔するように震度情報が下に表示され、邪魔に感じた。画面の見せ方は民放と比較し、工夫が必要だと感じた。家族や友人などいろいろな人にＮＨＫの災害報道をどう思うか聞いたが、た

いていが「つまらない。民放のほうが新しい情報をどんどん伝えていて、被害の様子がよく分かる」と言っていた。ＮＨＫは何時間たっても同じトーンで同じことを伝えている感が否めず、災害情報の伝え方を見直すべきでないかというのが今回の印象だ。

○　「ＮＨＫスペシャル　新・映像の世紀」全６回をすべて見た。「映像の世紀」が大好きで、ＮＨＫの中でベストテンに確実に入る番組だった。加古隆さんのテーマ曲「パリは燃えているか」はよい曲で、今回のシリーズでも変な手を加えずに使用していたのは大正解だと思う。一方、オープニング映像はいまひとつだった。前作のオープニングは文字情報をたくさん入れ、アート作品のようで印象深かったが、今回のオープニングはレーニン、ヒトラー、スターリン、毛沢東、ゲバラが出てきて一体何の番組なのか、人選やその意図について疑問が湧いた。昨年１１月２９日(日)の「第２集　グレートファミリー　新たな支配者」はテーマ自体が今までなかった経済界を取り上げていた。ロックフェラー、モルガン、デュポンなど今でも名前が残るようなグループを扱うことで、現代に通じるアメリカ経済のスタイルというか、アメリカ式資本主義の広がりの始まりみたいな源流を捉えており、興味深かった。昨年１２月２０日(日)の「第３集　時代は独裁者を求めた」(総合 後 9:00～10:13)では、リンドバーグ、フォードという著名人がヒトラーに心酔し、ナチスドイツを支援していた事実を明確に突きつけており、興味深かった。３月２０日(日)の「第６集　あなたのワンカットが世界を変える」は興味深い映像が多く、特に亡くなったデヴィッド・ボウイさんが、ベルリンの壁が壊れる前の西ベルリンでのコンサートの際に、東ベルリンに向けてスピーカーを置いたというエピソードがよく、その後に東側で撮影した市民の映像が紹介され驚いた。東ドイツがなくなったからそういった映像が出てくるのだろうという気がした。また、壁が崩れる前でも東側でそういったことがあったのかといまさらながらに驚いた。一方天安門事件については、見慣れた映像しか紹介されず、体制が変わらないところは映像も出てこないのだと如実に感じた。このシリーズは、最初に売りが３つあったと思う。１つ目は俳優のナレーションだが、ピンと来なかった。淡々としたナレーションだったが、アナウンサーでもよかったのでないかという気もした。２つ目は市井の人々の声を紹介するということだが、元のシリーズでも結構取り上げており、今回ことさらに取り上げている感じもなかった。３つ目のプライベートフィルムを紹介するというのは売りだったと思う。グレートファミリーも、東ベルリンもだが、個人が撮影した貴重なプライベートフィルムが発掘され、大変興味深かった。元のシリーズではエンドロールに各国のニュース社、公立アーカイブスなどが多く並んでいたが、今回は、回によっては本当に少なかった。これは、少ない数でも十分に番組を構成できるだけの良質のプライベートフィルムを見つけられたことの裏返しだと

思う。新シリーズが始まると知って、元のシリーズを再度見ようと思い、レンタルショップをネットで検索したが、レンタルは禁止とのことで、図書館で借りた。なぜレンタルが禁止なのか分からないが、残念だった。これだけのよい番組が視聴者の目に触れる機会を失っていることが残念だった。元のシリーズを見たうえで、新シリーズのテーマは何だったのだろうと改めて考えた。元のシリーズでは人の争いがテーマだったのでないかという印象がある。今回は第１集が第一次世界大戦だったが、第２集は経済の話だったので、元のシリーズとはテーマが違うことは明白だった。グレートファミリーも、ナチスドイツも、ベルリンの壁もだが、当時は正しいと思っていた価値観が今の目で見ると正しくないと伝えるのがテーマなのかという印象をシリーズの途中までは持っていた。市民が発信するという第６集を見て、ひょっとすると世界の価値観、人々の価値観が多様化している、爆発し、拡散していることを伝えたかったのかと思い直した。そういう意味で、第６集は報道やマスコミのこれからの在り方を自らに問いかけることまで考えているのかと思った。そう考えると、元のシリーズが制作された当時は、冷戦が終わり、バブルも終わって、湾岸戦争で強いアメリカが世界に君臨する時代で、経済成長を成し遂げ、平和になっていくという希望を込め、今までの争いを振り返ることをテーマとしたシリーズだったのかと思う。今回のシリーズは、どちらかというと迷走している社会を踏まえたうえで、いろいろな価値観があって変わっていくことをテーマにしたのかと思った。今回のシリーズの完成度が元のシリーズに届いたかどうかは判断が難しいが、大変おもしろい作品に仕上がっていたのでないかと思う。

○　４月３日（日）のＮＨＫスペシャル　巨大災害　ＭＥＧＡ　ＤＩＳＡＳＴＥＲⅡ　日本に迫る驚異「地震列島　見えてきた新たなリスク」を見て、日本に住んでいるのが嫌になるぐらいに驚いた。東北沿岸に地震で沈下した地盤が数十センチ隆起しており、プレートの上に日本列島がのっているということに驚がくした。衝撃的なドキュメントだった。

○　ＮＨＫスペシャル　巨大災害　ＭＥＧＡ　ＤＩＳＡＳＴＥＲⅡ　日本に迫る驚異「地震列島　見えてきた新たなリスク」を見た。日本が地震の巣であると思い知ると同時に、先端の研究が進んでいると思った。以前の難しい予知、地震のメカニズムがよく分からない頃に比べるとだいぶ進化しているし、また、コンピューターを使うことで、うまく観測できる時代に入ったという思いを強くした。熊本の地震についても、プレートの裂け目があり、いつ起こってもおかしくない場所の一部として番組で警告を発していたと記憶している。地震の脅威を知らせるパンフレットなどを見るより、しっかりと作り上げられた番組でデータや学者のコメント、実際の映像を見せるほうがよりその脅威を感じることが可能で、テレビ番組の威力はす

ごいものがあると改めて感じた。そのような視点からすばらしい番組だった。地震をしっかりと心すること、少しでも災害を少なくすることに役立つ番組だと思った。

○　３月２２日(火)の「放送記念日特集」を見た。第一部「激動の時代を越えて～戦前から戦後へ　放送の歩み～」(総合 後 10:00～10:45)は、ＮＨＫの前身が逓信省による情報のコントロールを受け、自分たちで取材をせずにもらった情報だけを伝えていたこと、そういった権力とメディアの関係から、正しい情報を伝えずに、よいことだけを伝えていた時代を経て、現在の公共放送ＮＨＫとして再出発し、自ら取材し、本当のことを伝える、常に真実を追求する姿勢になったことを分かりやすく伝えていた。そうやって私たちはコントロールされてしまうのかということもよく分かった。特によかったのは、こういう番組を放送記念日に放送したことだ。

○　４月６日(水)の武井壮の鉄人列伝「騎手・武豊」(総合 後 10:25～11:14)を見た。武豊さんの強さの秘密に迫る番組だったが、よくある対話形式で会話と映像を交え紹介する形ではなく、ナビゲーターの武井壮さんが実際に乗馬を体験し、武豊さんの考え方、騎手としての姿勢に迫っていた。馬に乗ること、馬と息を合わせることなど、武豊さんの考え方に基づいた体験を武井さんみずからすることで、武さんをよく理解し、実感のこもったことばとして視聴者に伝わっていた。武さん独自の「人馬二体」という考え方が強さの秘密だと感じた。馬の持ち味を最大限に生かすのが騎手の仕事であり、どんな馬とでも勝てなければ騎手ではない、それが「人馬二体」だとのことばは、馬との相性ありきの人馬一体とは違い、プロとしての考え方で印象的だった。競馬は馬と騎手の相性と運で勝負は決まると思っていたが、馬をしっかりとコントロールし、その性質を生かすプロの仕事で勝利を得ているということが大変よく分かった。ナビゲーターが体験し、プロフェッショナルに迫るという演出はよかったと思う。

○　４月８日(金)の「カラヴァッジョ　光と闇のエクスタシー～ヤマザキマリと北村一輝のイタリア～」(総合 後 10:00～10:48)を見た。フランスの民家からカラヴァッジョと思われる絵画が発見され、本物であれば 150 億円の価値があるという大ニュースが報じられた直後の放送だったため、タイムリーだった。「日曜美術館」ではなく、総合テレビで放送していることもすごいと思った。　４月から「ガッテン！」が夜７時３０分からの放送となったため、ゆっくり見ることができる。４月１３日(水)の「春のトースト祭り」もおもしろかった。「探検バクモン」は夜８時１５分からの放送となったが、４月１３日(水)の「横浜中華街」では横浜中華街の裏側を見せてくれた。ほんの一部だとは思うが、ゆっくりと見ることができて、爆笑問題の２人が突っ込んだ質問をしていておもしろかった。

○　「クローズアップ現代」は「クローズアップ現代＋」として新しくなった。国谷裕子キャスターが最後に２３年を振り返って「時代が大きく変化し続ける中で物事を伝えることが難しくなってきた」とコメントをしており、そういう側面も考慮して「クローズアップ現代＋」を編成していると思うが、見慣れていないせいか、以前のほうが鮮明だった。

○　４月からの番組改定では、ゴールデンの時間帯を大きく変更している印象がある。半月ぐらい番組を見てきたが、ＮＨＫは攻めているという印象だ。ゴールデンの時間帯に７５分の番組を編成するなど、見応えもある。「クローズアップ現代＋」は夜１０時に編成しているが、同じく攻めていると感じた。

○　「クローズアップ現代」が「クローズアップ現代＋」として新しくなったが、日替わりでどうなるのかとできるだけ毎日見た。４月５日(火)の「働くって、何ですか～変わる入社式と若者たち～」はニュースの解説とドキュメンタリーを足したような番組で、従来の緊迫した、切り込んでいく感じがなくなったと思った。４月６日(水)の「経済減速　中国で仏教大ブーム！？」は切れ味があると少し思った。ツイートの使い方は「ＮＥＷＳ　ＷＥＢ」に似ていた。４月１２日(火)の「子どもの命が危ない～保育園が非常事態～」はキャスターが子どもを持つ親だったこともあり、切り込んでいて、緊迫感もあり、問題に対する怒りも伝わった。このように、日替わりで傾向が変わってしまうことをよしとするのか、どう考えるのかという問題がこれから試されるし、キャスターの性格、話題によって受ける印象がさまざまになると思う。番組を見て、全く新しい番組として、タイトルも刷新すればよかったのではないかと思った。皆さんの記憶の中には、国谷裕子キャスターのジャーナリスティックに切り込んでいく現場感覚の思い出が強く、今の「クローズアップ現代＋」とは違うのでないかと思った。また、画面の横で絵を描いている人たちがいるが、その場ではおもしろく、分かった気になるが、テレビの演出上意味があるのかどうかについては疑問を持っている。

○　３月２１日(月)のプロフェッショナル　仕事の流儀「あがき続けろ、それがメロディになる～作曲家・佐藤直紀～」で「放送９０年大河ファンタジー　精霊の守り人」の音楽を担当した佐藤直紀さんの舞台裏を見た。テーマ音楽を制作するために、徹夜でメロディーを考え出すなど裏側の苦労が分かって感心した。

○　３月２３日(水)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」の「ｃｈｅｃｋ！エンタメ」のコーナーでは、「放送９０年　大河ファンタジー　精霊の守り人」の番組宣伝で

綾瀬はるかさんのインタビューを伝えていたが、このコーナーでの番組宣伝はやめてほしい。「プロフェッショナル　仕事の流儀」で「精霊の守り人」の作曲家を取り上げるのはよいと思うが、「ｃｈｅｃｋ！エンタメ」のコーナーでは、きちんとエンタメのニュースを伝えてほしい。

○　４月１１日(月)から５日間にわたって「ＮＨＫニュース　おはよう日本」で「さくら５つの物語」を放送していた。桜の季節に合わせ、桜にまつわる話を５日間にわたって放送していたが、ダムに沈んでしまう村の高台にあるしだれ桜に、村はなくなってしまったが昔住んでいた人たちが集う話や、目の見えない方がよい香りがする桜をめでる話など、心温まる話とともに桜を見せていて、大変よかった。慌ただしい時間で、悲惨なニュースも交錯する時間帯だが、ただ美しい桜を見るよりも心に残る、温かく、ホッとするひとときを作っていてよかったと思う。

○　３月２９日(火)のアニメ英国一家、日本を食べる「すしの源に」を見た。日本人でもあまり知らない日本食の歴史をアニメで分かりやすく伝えていた。子どもたちに日本食のすばらしさを分かりやすく伝えるよい方法だと思った。ほかの回も見てみたいと思った。

○　いま長野県諏訪地域で御柱祭りが開催されているが、他県から移住してきた人間にとっては、地元の方の気持ちになってお祭りを一緒に盛り上げる、楽しむことが難しい面がある。「イブニング信州」でも紹介されていたが、どういうお祭りなのか、数えで７年に一度なのはなぜなのか、御柱を諏訪大社の四隅に立てる理由など、他県から移住してきた人間にも分かるような情報も伝えてほしい。また「ＮＨＫスペシャル」などでも特集を放送してほしい。地元の人間は血が騒ぐと言い、会社も休業してお祭りに参加するぐらいだ。一部の学校は休校にもなる。そういった意気込みの背景を伝えてもらいたい。

○　「放送９０年大河ファンタジー　精霊の守り人」を見た。光っていたのは、綾瀬はるかさんの演技だ。「ＮＨＫ紅白歌合戦」の司会ぶりとはうってかわって、ドラマの中に入っていると感じた。やりの使い手という役だが、女性であれだけの立ち回りをするのは体もかなり鍛えたのだろうという印象があった。大河ドラマ「八重の桜」でスペンサー銃を構えた格好もほれぼれした。トロガイ役が高島礼子さんだとは調べるまで分からなかったが、メークのすごさを感じた。衣装もファンタジードラマに合っていると思う。背景はＣＧなどを使用しているのだと思うが、見応えがあり、かなり作り込んでいるという感じを受けた。次回も楽しみにしている。

○　「放送９０年大河ファンタジー　精霊の守り人」を見た。視聴する人の年代で印象が違うのかもしれないが、私も子どもたちも、１０分で席を離れてしまった。現代の子どもたちはファンタジーの世界観をゲームで楽しんでいるが、ゲームのアニメーションの精度のすばらしさは世界で評されるぐらいに進んでいる。そういう中で現代の若者たちに、「精霊の守り人」のファンタジー感は受け入れられない内容と映ったようだ。物語の背景や舞台設定も、３０年以上前に民放で放送していたある特撮を見ているようで、平成のこの時代に似たような舞台設定は合わないと思った。ＣＧや美術も粗雑さや古さを感じた。ストーリーも何を伝えたかったのかよく分からず、印象に残らなかった。出演している俳優のオーバーな動きや、ファンタジーの世界観に合わないセリフの言い回しが興ざめした点でもある。すばらしかったのは綾瀬はるかさんの演技力で、綾瀬さんが主演だったから最後まで見ることができた。それ以外のストーリー、演出はどれも見るに堪えない感じがした。

○　連続テレビ小説「あさが来た」は好感をもって番組を視聴した。「とと姉ちゃん」は３週目に入って、おもしろみも出てきたかと思う。１週目は涙と感動の場面が多かった。お父さんが病気で倒れ、長女に「自分の代わりに家族を守ってほしい」と言うシーンは涙が出た。体を壊すため花見に行けず、時期が遅れたが、会社の仲間や子どもたちがピンクの布を桜の木に結びつけ、幕を下ろすという感動的な場面があった。心に響くシーンだったが、撮影時期の問題から違和感があった。お父さんが奥さんに肩を抱えられて歩くシーンで、周りの畑には霜があったり、桜が終わった頃のシーンなのに、遠くにある木々は葉が全くなく、寒々とした背景だった。また、セリフを言うときに息が白く映るシーンもあった。ＮＨＫの看板番組でもあり、季節感をうまく表現してほしいと思った。感動のシーンだったため、特にそう感じた。これからますます楽しくなっていくかと思うが、うまく作っていってほしい。

（ＮＨＫ側）

昨年の１２月ごろに撮影しているものだ。ドラマ撮影の場合には、冬に夏の撮影、夏に冬の撮影ということがよくある。そのため、息を白くするときには役者に氷をなめてもらって撮影することもある。ＣＧを使うという方法もあり、背景も替えることが可能だ。クライマックスシーンでしらけてしまったというご意見は現場にも伝える。

○　連続テレビ小説「あさが来た」が終了したが、キャストも、脚本も、演出も、すべてがすばらしく、今まで見た「連続テレビ小説」の中でいちばんよかったと思う。テンポがよく、１話たりとも途中で緩みがなかったことはすばらしい。「あさが来

た」が始まったときに、「第１話が大事で、そのときの印象が最後まで影響する」とこの場でも伝えたと思うが、やはり「あさが来た」は間違いがなかったと思う。

○　連続テレビ小説「とと姉ちゃん」は「あさが来た」の視聴率に引っ張られた結果、第１週の視聴率がよかったのではないかと思う。それを差し引いても、子役はかわいらしく、よかったと思う。しかし、すでに私は見逃しても何ら惜しくはないという気持ちだ。「とと姉ちゃん」はテンポをゆっくり見せる演出の方向性があったのかと思う。「あさが来た」はテンポのよさが視聴率の高さにも影響したのだと思う。ゆっくり見せることが裏目に出なければよいと思う。頑張ってもらいたい。

○　総合テレビでの再放送、４月６日(水)の東北発☆未来塾　ドクター大川のハツラツ診療所（１）「動かないと　人は病むのよ」を見た。東日本大震災から５年経過し、記憶をとどめ、忘れないようにという話があちこちで聞かれる中で、この番組はどう記憶し伝えるのかを違う切り口で提示しており、大変興味深かった。大川さんは徹底したフィールドワークを行うことを大事にしており、学生とともに現地を訪れ、被災や復興の状況などを感じ取らせ、そこにいる人の生活そのものをしっかり支える視点で進めていて、引き付けられた。また、「生活不活発病」を治療するためには、患者が自分の力で再起し、機能を取り戻すことが重要で、さまざまな制約のある環境にいる患者に対してどのように働きかけるのかを、身をもって学生に伝えていた。できることは自分でやること、やらないでよいことまでその人から取るのではなく、本当に必要とされることに応える医療、リハビリ、支援のあり方を提示しており、参考になった。次回を見たいと思ったが、最後まで放送予定日が紹介されなかった。次回の告知方法はルールがあるのか。震災、被災をどう記憶し伝えるのか、その方法について、いろいろと気がつかされた、刺激の強い番組だった。

（ＮＨＫ側）

「東北発☆未来塾」は、Ｅテレと総合テレビで曜日や時間を変えて放送している。次回の放送日時をお知らせすると、混乱する恐れがあるため、現状では番組内容だけ紹介するようにしている。

○　「ららら♪クラシック」の進行役である作曲家・加羽沢美濃さんは、作曲家の人生、作曲したときの環境、精神状態にも触れ、時にはスコアをひもといてくれる。音楽好きにとって、どう聴き、理解するのかなどの捉え方を平易に伝えてくれる番組として好んで視聴している。

○　「世界女子カーリング選手権２０１６」は全試合録画し、だいご味を感じながら楽しく見ている。

○　ＢＳ１で毎日放送している「ワールドスポーツＭＬＢ」は小宮山悟さん、高橋尚成さん、石井一久さんの解説がすばらしいと思う。自らもＭＬＢに挑戦した経験から選手、監督の個性など、いろいろな情報を交え、分かりやすく試合内容を説明しており、楽しく見ている。月曜～金曜担当の深津瑠美キャスター、森中直樹アナウンサーも、視聴者の視点から解説の方々に話を振り、解説者のよい個性をうまく引き出していると思う。しかし、土曜日と日曜日の担当キャスターは起用する必要性があったのか疑問だ。両者とも聞きたい試合の内容や裏話が引き出せていない。ＭＬＢをＢＳで放送するようになった当初から視聴しているが、「ワールドスポーツＭＬＢ」が放送されることで、自らのひいきの球団の結果、順位、好きな選手の情報がすぐに分かるため、毎回、楽しく見ている。スポーツファンは民放のようなバラエティー化されたスポーツ情報番組を望んでいるとは思えない。知りたい希有な情報を真摯（しんし）に伝えてくれるＮＨＫならではのスポーツ情報番組をこれかも維持していってほしい。

○　４月７日（木）のコズミック　フロント☆ＮＥＸＴ「ついに発見！？宇宙人の高度文明」は期待したほどではなくがっかりした。高度地球外文明が存在する可能性があるとされる恒星の謎を追うということだったが、ＮＡＳＡのケプラー宇宙望遠鏡で見た観測の様子が紹介されただけで、突っ込んだ内容がなかった。

○　４月１３日（水）のアナザーストーリーズ　運命の分岐点「華麗なるご成婚パレード　世紀の生中継・舞台裏の熱戦」を見た。当時を思い出し懐かしかった。当時ＴＢＳ、ＮＨＫ、日本テレビの３社の闘いがあり、カメラマンたちが苦労して撮影していたことを実感した。時代背景もよく見えて、自分の青春を思った。担当した関係者は今８０代や９０代だが、当時のことを語る様子に実感がこもっていた。報道記者たちが命がけで仕事をしていたことが分かり大変見応えがあった。自分自身を再認識、再発見するようなよい番組だった。

○　アナザーストーリーズ　運命の分岐点「華麗なるご成婚パレード　世紀の生中継・舞台裏の熱戦」を見た。当時はテレビが今のように優位性はなく、１番が新聞、２番がラジオ、３番がニュース映画、４番がテレビという社会情勢の中でテレビの時代を作りたいという思いを強くしたテレビマンたちが迫力のある段取りを行ったことがよく描かれていた。興味深かったのは、各社がよい映像を撮影するために

苦心したエピソードが豊富に紹介されたことだ。また、その各社の渾身(こんしん)の映像をまとめて見られたこともよかった。テレビの時代を作ろうという意欲を感じた。

○　「ラジオ深夜便」をよく聞いている。「明日へのことば」ではおもしろい人、今まで知らなかった分野の人を多く紹介している。４月１３日(水)は彫刻家の東勝廣さんの「木の命を生かす」、その前に放送された１月８日(金)の「“心に響く医の道”を求めて」など、毎日おもしろい人が出演しているので、つい聞いてしまう。

○　４月２日(土)のとっておきラジオ「ＮＥＸＴ　ＲＡＤＩＯ　ＬＩＶＥ」は、千葉放送局が主催で、民放ＦＭ局と一緒に行ったイベントの様子を紹介していた。東日本大震災をきっかけに、ラジオの重要性を伝えるイベントだったが、画期的だったと思う。司会進行をＮＨＫと民放局のアナウンサー２人で担当していたことも大変よかった。

○　「ＮＨＫマイあさラジオ」の「健康ライフ」が大変おもしろく参考になる。短い時間の中で、大変よいコメントだと思う。ただし、全体的にマンネリ化しており、「きょうは何の日」は、地方の人にインタビューするなど、毎回同じだ。切り口は変えてもらいたい気がする。

○　「ラジオ深夜便」をよく聞いている。「明日へのことば」ではおもしろい人、今まで知らなかった分野の人を多く紹介している。４月１３日(水)は彫刻家の東勝廣さんの「木の命を生かす」、その前に放送された１月８日(金)の「“心に響く医の道”を求めて」など、毎日おもしろい人が出演しているので、つい聞いてしまう。

○　「ラジオ深夜便」のファンだったが、最近聴かなくなったいちばんの理由は落語がなくなったからだ。曜日も、時間帯も、定型化しすぎているように感じ、楽しみに聴こうという気力がなくなってしまった。

○　本質を伝えるのがＮＨＫの役目であり、番組の視聴率は関係ないと思うが、何を伝えたいのかよく分からない全国放送の番組がよくある。年齢が高くなればなるほど、番組の展開が速いとついていけず、私の両親もよく同様のことを言っている。１つの話題にテーマを絞り、きちんと伝え、分かりやすく、最後に結論を導き出せるような番組がＮＨＫならではだと思う。ＮＨＫは公共放送であり、視聴率が低くても心に響く番組であればよいと思う。流行に流されて仕事をしていると、顧客から「本質を忘れるな」ということを言われることがある。はやりすたりにとらわれ

ずにしっかりと伝えるべきものを伝えなければいけないと感じている。知るしん。信州を知るテレビ「“箸ピー”にかけた冬～ある児童養護施設の子どもたち～」も作り手の思いが伝わってくる番組だったと思う。一方、逆に思いが強すぎて、プロデューサーやディレクターの思い通りに作られてしまうことがＮＨＫにはある。そこは難しい案配だと思うが、作り手の意向だけではなく、取材先の持ち味を探りながら制作された番組は、よく伝わる番組となると思う。知るしん。信州を知るテレビ「“箸ピー”にかけた冬～ある児童養護施設の子どもたち～」のような番組は今後も見たいと思った。

○　先日、美術関係者から「『日曜美術館』はよい番組だが、１人の作家を取り上げるよりも美術館の話題、情報がもっと欲しい。そのほうが大事ではないか」という意見を聞いた。全国の文学館や博物館ではよい企画を開催していても、あまり伝わってこない。そういう美術館の情報を３０分番組で放送してほしい。文学に関しても、「１００分ｄｅ名著」もあるが、文学館の活動についてもきちんと伝えてほしい。長野放送局の「ゆる～り信州」には「関根の本棚」というコーナーがあり、信州にゆかりの作家や書籍を紹介しているそうだが、さすが教育県の信州だと思った。

○　知るしん。信州を知るテレビ「“箸ピー”にかけた冬～ある児童養護施設の子どもたち～」の施設では“箸ピー”以外にもいろいろな取り組みを行っており、“箸ピー”はその１つだ。しかし、それが全部だと捉えられるような番組の作り方がよくある。子どもたち、施設の子どもたちが番組を見て、どう受け止めるのか、ありがとう、うれしいというほかに隠れたことばがあることを知ってほしい。いろいろな取り組みの中の一部であると表現することで救われることが多くある。一部分だけクローズアップしてしまうと実態との違和感を覚える。熊本の震災報道でも、避難している人がどう受け止めるかが大事だと思う。自分も当事者としていつも思うことなので、参考にしてもらえたらよいと思う。

○　３月末に国会中継でＮＨＫの予算審議の総務委員会の中継があった。大好きなので深夜にもかかわらずいつも見ている。今年の質問でニュース報道、特に政治絡みのことでＮＨＫは伝えなかったが民放各社が伝えているという一覧表を出し、説明していた。対するＮＨＫからの答弁は「放送法に基づいて公平・公正に扱っている」ということだった。ＮＨＫではいろいろな資料を作成しているが、今回の答弁を説明するような資料を作成すれば、番組審議会のような会議などでいろいろ利用できると思う。編集権もあり、ＮＨＫの姿勢はそれでよいと思うが、いろいろな取り組みについて、もっと具体的にしっかりと説明したほうが国民の印象もよいと思う。

「放送法で…」という説明は、国民からするとどうかと思う。ＮＨＫのニュースはいろいろなところで圧倒的な信頼感がないといけない。特に政治絡み、利害が対立するようなことについてもきちんと一本筋の通ったものが欲しい。資料を作成し、さまざまな場面で提示できる環境を整えるとよいと感じた。

○　番組審議会の場で、数多くのよい番組に触れることができた。制作者のいろいろな思い、苦労も分かった。ＮＨＫはまじめに番組を作っているとひしひしと感じ、番組にかけるＮＨＫの脈々と続くＤＮＡのようなものを教えてもらった感じがする。一方で、佐村河内氏の問題、出家詐欺の問題などがあり、一部の番組の質は手放しで問題なしとは言えなかったのかもしれない。しかし、そのことによってすべてが否定されるべきものではないと思う。原点をきちんと守る姿勢と、悪かった点は素直に反省し、改善し、生かすという向上を目指し、ＤＮＡが環境に応じ変化するようによい番組作りの姿勢を追求していってほしい。番組審議会としては番組の質が高いかどうかも大事なことだが、それだけでは完結しない。その番組をいかに多くの人に見てもらえ、かつ見たうえで制作者の意図をしっかりと理解し、共感し、感動しということがあって初めて番組として使命を果たせると思う。よい番組を作っても視聴者に正しく伝わらなければＮＨＫの責務を果たせていないことになると思う。視聴者が番組を見てどのように理解するかはいろいろなファクターが影響するが、大事なことはＮＨＫに対する期待、信頼であると思う。ＮＨＫの番組が評判となることは望ましいことだが、最近はＮＨＫの番組でなく、組織自体が話題になることも多くなっており、それが番組に対する信頼にも影響しているのでないかと思う。経営に関わる問題は経営委員会が所掌していると思うが、ＮＨＫの編集権といったものも含めて、私個人としては番組に関することは番組審議会が関知しなければいけないと思う。現在、ＮＨＫに対する信頼という点でよい番組が視聴者に十分に伝わる環境に必ずしもないことを危惧している。「クローズアップ現代」はキャスターと放送時間が変更になり、「ニュースウオッチ９」は、キャスターが変更になった。それぞれはしっかりとした背景と理由があると思うが、視聴者に意図が十分に伝わっているだろうか。意図を裏付ける材料をすべて提供することは現実的には不可能と思えるので、視聴者が納得するかどうかはＮＨＫへの信頼の度合いによると思う。番組の制作、編成、編集にあたっては視聴者がどう感じるかをいちばん気にするべきで、どう伝わるかを常に意識し、制作、編集してほしい。また、決してあってはいけないことだが、組織の中の内向きな動機で制作することがないようにしてほしいし、必要以上に現場が萎縮することのないようにしてほしい。戦後７０年にあたってのさまざまな特集番組を放送していたが、戦時中はもとより、日本人の民族性として勝手な深謀遠慮で他人のことを忖度（そんたく）して誤った行動をしがちだということが、いろいろな番組で取り上げられていた。そういうこ

とは今も十分に起きる危うさが残っている。その点については常に視聴者の感覚や目線を意識してほしい。番組審議会も常に新鮮な視点を持ち続け、刺激を与えるような存在であってほしい。ＮＨＫにも存在意義、趣旨をしっかりと受け止めてもらい、これからも良質な番組を作って、信頼を得ていってほしい。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局